

国立公園指定と世界遺産登録における吉野の評価とその背景

著者	渡邊 真菜美
発行年	2018
その他のタイトル	Evaluations of Yoshino at the National Park Designation and the World Heritage Inscription and their Backgrounds
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2018
報告番号	12102甲第8765号
URL	http://doi.org/10.15068/00153803

国立公園指定と世界遺産登録における吉野の評価とその背景

渡邊 真菜美

所属 筑波大学大学院人間総合科学研究科世界文化遺産学専攻

Evaluations of Yoshino at the National Park Designation and the World Heritage Inscription and their
Backgrounds

Manami Watanabe

World Cultural Heritage Studies, Graduate School of Comprehensive Human Sciences,
University of Tsukuba

目次

1. はじめに.....	4
1-1. 研究の背景と目的、方法	5
1-2. 先行研究	11
1-2-1. 名所としての吉野に関する研究	12
1-2-2. 国立公園としての吉野に関する研究	12
1-2-3. 吉野林業地に関する研究	16
1-2-4. 本研究の位置づけ	18
2. 対象地の特徴	20
3. 国立公園指定時の吉野に対する評価	31
3-1. 目的	32
3-2. 方法	32
3-3. 分析	32
3-3-1. 国立公園候補地選定（1920-1932）	32
（1）初期候補地選定	32
（2）吉野を含まない調査地の選定	33
（3）熊野地方への拡張案	33
（4）現地調査と懇談会—吉野の編入	34
（5）吉野を含めた国立公園候補地の選定	38
3-3-2. 国立公園指定（1935-1936）	39
3-4. 結果	41
4. 世界遺産登録における吉野に対する評価	43
4-1. 目的	44
4-2. 方法	44
4-3. 日本と UNESCO/ICOMOS の評価の共通点、相違点	45
4-4. 世界遺産としての管理方針	52
4-5. 結果	53
5. 吉野をめぐる政策および空間の変化	54
5-1. 国立公園政策	55
5-1-1. 目的および方法	55
5-1-2. 国立公園制度の導入	55
5-1-3. 国立公園行政の特徴	57
5-1-4. 国立公園としての吉野における風景評価の変遷	59
（1）国立公園管理行政による刊行物の記述傾向	61

(2) 一般向け書籍の記述傾向	67
(3) まとめ	70
5-2. 各種関連政策	71
5-2-1. 目的および方法	71
5-2-2. 文化財および風景地の保存政策	71
5-2-3. 林業政策	73
5-2-4. 観光政策	76
5-3. 大峯奥駈道（「回廊」区域）の空間・景観	77
5-3-1. 目的および対象・方法	77
5-3-2. 土地利用の変遷と可視領域	81
5-3-3. 囲繞感	81
5-3-4. まとめ	83
5-4. 結果	84
6. 結論	86
7. 参考文献	96
8. 史料	104

1. はじめに

1－1. 研究の背景と目的、方法

今日、文化財や自然環境、風景地に関する指定や登録が国内外問わず、また国際社会から国内行政単位によるものまで、数多く行われている。世界遺産や日本の文化財保護法に基づく指定、国立公園、ユネスコエコパーク（生物圏保存地域：Biosphere Reserve）、ジオパーク、世界農業遺産などはその一部である。同じ地域が複数の指定を受けている例も多い。特に、日本の世界遺産登録では、構成資産の保護が国内で法的に担保されていることがマネジメント面の条件として UNESCO（国連教育科学文化機関）・世界遺産委員会で求められることから、必然的に国内法制度と重複指定となる。

指定や登録では、それぞれの制度の基準に基づいて、地域の資源に対して評価が行われ、価値づけがなされる。重複指定の場合、同じ地域に対する価値づけは制度の目的ごとに必然的に異なってくる。これは、文化に関する指定と自然に関する指定が併存している場合に顕著である。たとえば、富士山は、世界文化遺産（文化的景観）「富士山－信仰の対象と芸術の源泉」であると同時に富士箱根伊豆国立公園にも含まれている。世界遺産条約では、信仰や芸術等と関連した有形の文化遺産を評価する基準（vi）が当てはめられ、富士山本体に加え、山岳信仰と浮世絵、詩歌等の芸術に関連した景観を特徴づけるものとして山麓の神社や御師の家、三保の松原などが構成資産に含まれた（UNESCO World Heritage Center Fujisan ホームページ）。一方で、国立公園としては、富士山を中心に富士五湖、溶岩トンネルといった火山帯の地形や、植生の垂直分布、野鳥の豊富さが特長として挙げられている（環境省 富士箱根伊豆国立公園ホームページ）。

こうした評価の違いは、各制度の目的ごとに注目する観点が異なることによる。資産そのものを重視する観点もあれば、背後にある歴史や社会といった情報を重視する観点もあり、こうした観点の違いが評価の違いに結びついている。

保全管理の現場では制度間の連携が求められ、その第一歩として、地域資源に対する価値づけや地域への理解の仕方、保全管理方針などの違いや共通点を異なる制度の管理者間で認識し、調整しておくことが不可欠である。しかし、複数制度による指定・登録がなされた一つの地域につ

いて、制度間の違いを学術的に考察した試みは少なかった。それぞれの制度で地域のどのような資産や情報が評価され、何が評価されていないのか検証し、その違いが生じた背景を明らかにする必要がある。それが、現場での制度間連携を円滑にすることにつながってこよう。

世界遺産登録においては、管理においてコミュニティ（住民）の重要性が謳われている現在¹、UNESCO やその諮問機関である ICOMOS、IUCN といった国際機関による評価が、地域の資産・情報に対する正確な理解に基づいてなされているか否かの確認が必要である。地域に実際に存在している資産と情報を踏まえない、国際的あるいは学術的視点からのみの評価が行われていれば、地域に対する認識において国際社会とコミュニティの間で乖離が生じ、遺産を守り続けていく上でコミュニティの協力を得ることが困難になる恐れがある。また、評価された対象を守っていくには形だけの保護では限界があり、背後にある地域の生業などの情報を踏まえ、適切にその営みが継続されるよう支援を行っていく必要がある。

本研究で対象地とする奈良県の吉野（奈良県吉野郡吉野町）は、紀伊山地中央部の大峰²山脈の北方に位置し、吉野山の周辺に広がる山深い地域である（図－1）。吉野山は修験道（大峰山脈を信仰対象として、吉野から熊野に至る山岳修行を行う山岳信仰）の拠点として発展し、古来日本有数の桜の名所³として知られてきた。文学や芸術に数多く描かれ、後醍醐天皇の南朝や古代の天皇が行った吉野行幸など国の歴史とも深い関係を持つ。さらに、独特な山林管理制度（後述）とスギやヒノキの高級材で知られる日本を代表する伝統的林業、吉野林業の地でもある。

¹ ユネスコ世界遺産委員会は、2007 年、世界遺産を保護していく上で地域のコミュニティが果たす役割の重要性を強調し、Community を戦略的目標の一つに掲げた。2012 年には、世界遺産条約採択から 40 周年を記念する行事等が通年で行われ、テーマに“World Heritage and Sustainable Development: the Role of Local Communities”が掲げられた。（UNESCO World Heritage Center（2012）：Celebrating 40 years of World Heritage 1972-2012 <<http://whc.unesco.org/en/activities/664/>>, 2018.03.02 参照）

² 大峰山脈の「おおみね」については、資料や論文により「大峰」あるいは「大峯」が用いられているが、本研究では地形、地理の観点で山脈を指す場合は「大峰（山脈）」を、修験道の霊場を指す場合は「大峯（山）」と表記する。

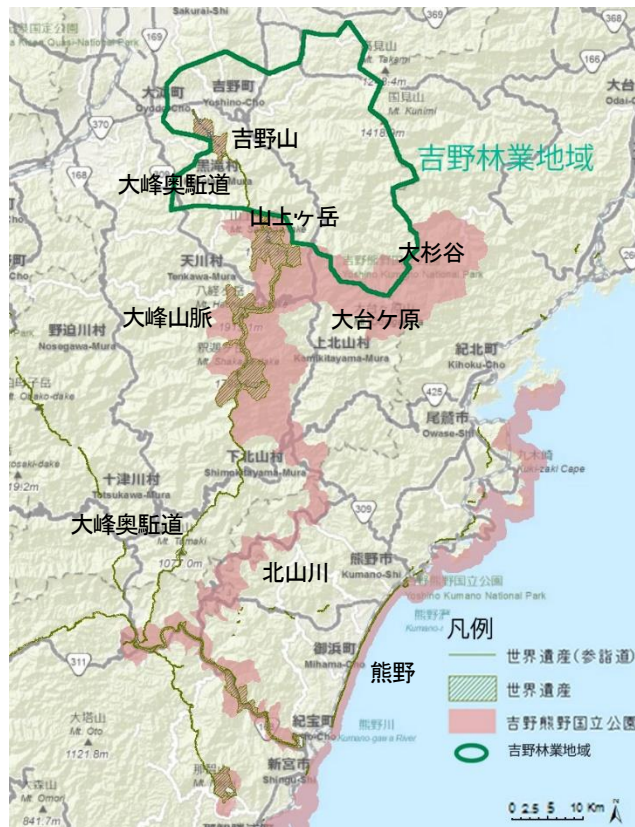
³ 本研究では、吉野の桜を指す表現として、制度として、1924 年に名勝指定された吉野山を指す場合は「名勝」、古くからの有名な見どころとしての吉野山を指す場合は「名所」を用いる。ただし、引用文や史料で古くからの見どころが名勝地などと表現されている場合は原文のままとした。



図－１ 吉野山全景 中央に金峯山寺の本堂を望む
(2017 年 4 月 13 日 筆者撮影)

保護制度については、1924 年に「吉野山」が史跡および名勝に、1936 年に吉野が吉野熊野国立公園の一部に指定されている（図－２）。2004 年には、吉野山および吉野山から熊野に至る山岳修行の道・大峯奥駈道が「紀伊山地の霊場と参詣道」の一部として世界文化遺産に登録された（図－２）。「霊場と道、森林から成る景観が、神道と仏教の融合や山岳信仰の伝統を映す信仰の山の文化的景観である」とされた（UNESCO World Heritage Center 2013, 119-120）。

保存管理の方針として、保存管理計画は、文化財保護法及び同法施行令に基づいて策定されている（奈良県 2005, 12）。世界遺産の構成資産の直接的な担保の法制度は、史跡および名勝である。しかし、「各構成資産の周辺環境を構成する諸要素に関しては、各町村が定める景観条例をはじめ、森林法や自然公園法など、各種環境保全のための法令に基づき保全措置を講ずる（奈良県 2005, 12）」とある。文化的景観の環境面の保存管理は、国立公園にひとつの根拠が置かれている。



図－２ 吉野における世界遺産、国立公園、林業地域の位置
(ArcGIS より作成。吉野林業地域の範囲は、奈良県農林部林業振興課 (2016, 1
頁)、奈良県吉野町 (1972, 48 頁) を参照した。)

吉野は、上述したように重層的な価値がある中で、自然に関する指定である国立公園と文化に関する登録である世界文化遺産が併存しており (図－２)、地域に対する評価に大きな違いが予想され、異なる制度での資産と情報によって生成される風景評価を比較検討する上で、適当な場所であると判断した。なお、本研究では、各制度の指定時にとらえられた資産と情報を取り扱っており、各種保護制度で指定の枠組みとして用いられている「景観」という用語と区別し、資産と情報の総体を「風景」とする。

本研究は、山岳信仰 (修験道) の聖地、桜の名所、それと関連した文学・芸術での重要性、国の歴史での役割、伝統的な巨大な林業地 (吉野林業) などの吉野の多様な資産と情報が、国立公園指定および世界遺産登録でどのように評価されたかを把握し、両者の観点の違いとその背景を明らかにすること、および吉野の多様な価値が包括的に捉えられていたかを明らかにすることを

目的とする。国立公園指定や世界遺産登録に関係する国内外の資料を調査するとともに、実際の空間や景観の変化も把握し、考察を行った。

本論では、まず対象地の特徴を整理した上で（第2章）、国立公園指定における吉野に対する評価を明らかにした（第3章）（図－3）。吉野熊野国立公園について、指定過程における議論を把握し、吉野のどのような資産・情報が評価されていたかを明らかにする。国立公園指定の主体だった内務省国立公園委員会および特別委員会の議事録など行政文書を分析し、指定過程上の出来事とそれぞれにおける評価対象を整理した。委員である学者が特定の評価を行っていた場合は、評価に至った思想的背景を考察した。

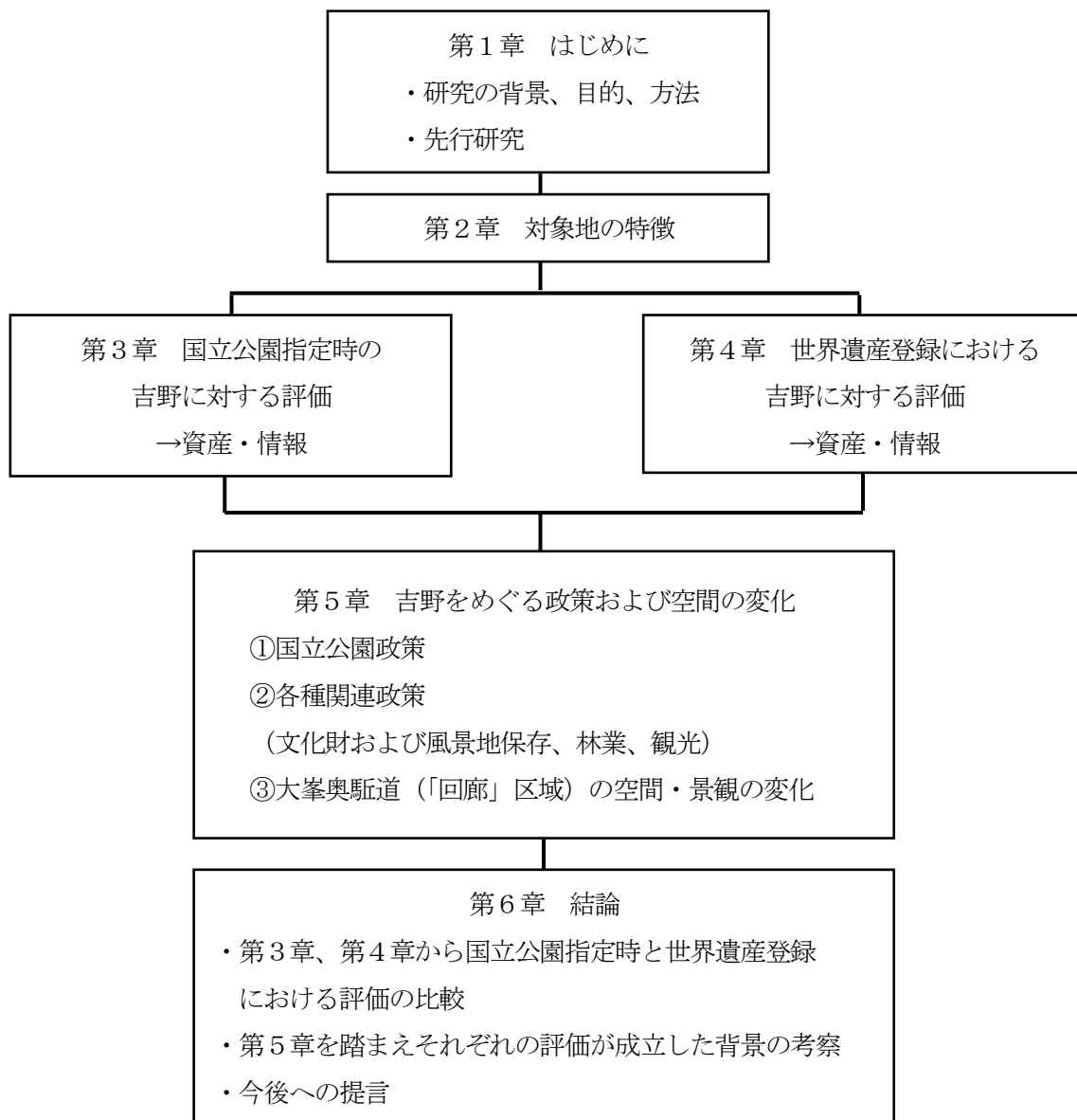
次に、世界遺産登録における吉野に対する評価を明らかにした（第4章）（図－3）。世界遺産登録において日本の行政および UNESCO/ICOMOS が吉野をどのように評価したか、管理方針でどのように扱ったかを把握した。「紀伊山地」の世界遺産登録推薦書、評価報告書など登録審査に関わる文書、および登録後の保全状況審査や保存管理に関わる文書の記述を分析した。

第5章では、前述した国立公園指定時および世界遺産登録時の背景を明らかにするため、吉野を取り巻く各種政策と空間的状況の変化を考察した（図－3）。

政策の変化として、国立公園政策については、昭和期における国立公園制度導入に向けた動きとその思想や、昭和期以降の国立公園行政の特徴を先行研究から把握し、さらに吉野における風景評価の変遷を管理行政の資料の記述傾向から考察した。吉野に関連する諸政策として、国立公園指定以前に吉野山が指定されていた吉野公園や史跡および名勝など、文化財や風景地の保存政策における関心を把握した。国の造林政策およびそれに伴う吉野の空間的变化や、国の観光政策の方向性と吉野の資産・情報の関係性も検討した。

国立公園区域から除外され、変化が大きいと考えられる世界遺産区域の景観・空間の変化を把握するため、過去の地形図や GIS による可視領域データ、写真資料を利用して分析を行った。

吉野の国立公園指定以前の、国立公園政策や文化財および風景地の保存政策を検討することで、



図－3 研究方法

第3章の国立公園指定における吉野に対する評価の背景を考察できる。また、吉野の国立公園指定後世界遺産登録に至るまでの国の国立公園政策や吉野の風景評価の変遷、林業政策や観光政策の変遷を見ることで、第4章の世界遺産登録における吉野に対する評価の背景を考察できる。また、吉野の林業地や国立公園区域から除外された世界遺産区域の空間の変化を分析することは、世界遺産登録での吉野に対する評価と、評価対象となった資産と情報の関係を明らかにする上で有用である。

本論全体を踏まえ結論（第6章）とした（図－3）。

なお、本研究では、各制度や資料における評価対象を判断するにあたり、既に示している「資産」と「情報」という区分を用いた。世界遺産や文化財保護の領域では、「文化」と「自然」や、「有形」と「無形」という対比が用いられることが多い。しかし、本論文で扱った資料には、このような整理では包括できない記述が多かった。たとえば、「日本の国立公園は歴史に重きを置かなければならぬ。吉野熊野は自然も優し歴史上に於ても大切である。」（「国立公園審議会一般・昭和6・10年」、国立公文書館所蔵）や、「吉野の蔵王堂が、役小角とその刻んだ蔵王権現像に連なる修験道の霊地で、大峯山が修験道で我が国第一の霊峰とされ、修験道が興隆してきた」（国立公園協会 1951, 191）といった記述で評価されているのは、物理的な神社仏閣でも、具体的な無形の宗教慣行でもなく、歴史や信仰といった情報である。これらを従来の観点で捉えるのは困難であり、「資産」と「情報」という整理を用いることとした。

「資産」とは評価の対象となる実空間や実物であり、「情報」とは関連する歴史、文化、社会、産業などの地域の背景および信仰、伝承などの地域に関する視点や思想である。「資産」と「情報」の具体的内容は、地域においては多種多様であるが、本論文では資料で積極的な評価の対象として強調されたり重視されたものを取り上げ、結果、「資産」は桜と森林、「情報」は国史（国家的な歴史）、信仰（修験道）、産業（林業）となった。

1-2. 先行研究

吉野は、文学や、吉野朝とも呼ばれる後醍醐天皇治下の南朝をはじめ日本史や考古学で膨大な研究の蓄積があるほか、修験道に関する宗教学的的研究（小田 1989）、観光学的調査（小田 2000）、桜の樹勢調査（吉野山サクラ調査チーム 2010）など多くの領域で関心の対象となってきた。本研究は主に国立公園と世界遺産を扱う。前者は風致の保全、後者は文化的景観として紀伊山地を登録しており景観の保全を目的としていることから、吉野の風景が過去からどのように見られてきたかを把握するため、桜の名所としての吉野山に関する研究を参照した。次いで、国立公園としての吉野に関する研究を整理した。また、後述するように吉野では土地利用の多くを人工林が

占め、風景において大きな構成要素となっていると考えられるため、吉野林業地に関する研究を把握した。

1-2-1. 名所としての吉野に関する研究

伝統的な桜の名所としての吉野については、主に文学の分野で多数の既往研究が残されている。これまでの知見を総合的に示した著作として、鳥越（2003）が挙げられる。

鳥越によれば、これまで文学研究の立場から『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』などの歌集の詩歌に見られる、吉野と桜の捉え方の変遷が研究されてきた。万葉集から、古今和歌集など平安期の勅撰和歌集までは、「吉野」と「桜」の結びつきは全くないか、強くはなく、むしろ「白雲」や「白雪」が吉野と強く結びついており、吉野山は①雪深い、寒い、春の到来の遅いところ、②仙境、隠遁の地の主に二つのイメージで捉えられていた。

西行と新古今和歌集において「吉野山」「桜」の関係が決定づけられる。西行が契機になって、歌枕「吉野山」すなわち桜のイメージが13世紀の『新古今和歌集』の時代には定着した。この構図は都人の観念の中で美的な増殖を続け、『新古今和歌集』以降、桜と吉野は緊密な関係として、歌以外の世界にも意識されていく。

鳥越によれば、江戸時代には花見の名所として吉野山が確立し、吉野山周辺である吉野に新たに花見の要素が加わり、明治期に至った。

1-2-2. 国立公園としての吉野に関する研究

戦前の国立公園成立の流れは次の通りであった。1922（大正11）年、国立公園の候補地を検討する調査の対象地16ヶ所（以下、16調査地）が内務省衛生局保健課で決定された（上高地、白馬山、日光、温泉岳、阿蘇山、富士山、大台ヶ原、磐梯山、阿寒湖、霧島山、小豆島及屋島、伯耆大山、十和田湖、立山、大沼公園、登別温泉）（水谷 2014-1, 67）。

1931（昭和6）年に国立公園法が制定、内務省に国立公園委員会が設置され、主として16調

査地から候補地の選定が行われた。1932（昭和 7）年 10 月の第 2 回国立公園委員会で 12 ヲ所の候補地が選定された（阿寒、十和田、日光、富士、日本アルプス、吉野及熊野、瀬戸内海、大山、雲仙、阿蘇、霧島、大雪山）。具体的な指定区域の検討などを経て、1934（昭和 9）年と 1936（昭和 11）年にこの 12 ヲ所の国立公園が順次、正式に指定された。（水谷 2014-2, 89 /水谷 2014-1, 67/村串 2012, 13）

国立公園選定の実質的な審議は、国立公園委員会の一部のメンバーで構成された特別委員会に委ねられた。国立公園委員会の間に複数回の特別委員会が開催され、現地調査や懇談会形式の議論も行った（西田 2016, 46）。内務省衛生局で国立公園事業の中心を担っていたのが、日本の国立公園制度の確立に尽力した林学博士の田村剛であった。

吉野を含んだ吉野熊野国立公園の成立過程に関する研究は複数ある。

1922 年、16 調査地の一つとして大台ヶ原、大杉谷と大峰山脈を区域に国立公園案が提案された。北山川流域と熊野海岸、吉野山まで区域を拡張し、1932 年に正式な国立公園候補地 12 ヲ所の一つ「吉野及熊野国立公園」として選定された。しかし、その後大台ヶ原・大杉谷・大峰山脈を大幅に縮小、吉野山と大峰山脈の北端山上ヶ岳を結ぶ細長い回廊状の地域（図- 2 参照）を除き、吉野山を飛地化して 1936（大正 11）年 2 月に「吉野熊野国立公園」が指定された。（水谷 2014-3, 82）

このように吉野熊野国立公園は、大台ヶ原と大峰山脈を主とした区域案から大幅な拡大、縮小を経て指定に至った。

村串は、奈良県にある高見山から大台ヶ原山にいたる台高山脈と山上ヶ岳から釈迦ヶ岳にいたる大峯山脈は吉野群山と言われると述べ、この範囲を主に吉野として、国立公園指定の過程を論じている（村串 2012, 354-371）。北山川・十津川流域では、江戸時代から吉野林業が発達し、明治期に入って森林の乱伐が進んだ一方、奥地の大台ヶ原では維新後も原生林が残されていた。しかし、明治末から近代林業が進出し、大台ヶ原の原生林の伐採が進んだことを受け危機感を持つ

た地元民が、植物の貴重性から着目していた白井光太郎など史蹟名勝天然紀念物協会の学者とともに、大台ヶ原の自然保護、原生林の伐採中止の運動を展開した。白井らにより早くから保護が訴えられていたことが、国立公園の設置に向けた調査、政策を担っていた内務省地理課と衛生局保健課を動かし、大台ヶ原は 16 調査地の一つに指定された。地元の奈良県吉野郡では、国立公園指定の推進運動が組織化され、大台ヶ原や大峯山脈周辺を対象に、原生林の乱伐に対抗し観光地化を進めつつも大自然、植物など天然記念物、風景の保護を図る趣旨の政府への請願書や建議が多数提出された。これは、当時はじめた瀨八丁など熊野川・北山川流域の水力発電計画による自然破壊への地元民の危惧（観光資源、地元の交通機関である河川の保護）、熊野地方の史跡および名所を観光資源として破壊から守ろうとする地元の動きと結びついて、吉野群山に、これら峡谷や熊野灘周辺を入れて拡大し、奈良、三重、和歌山合同で国立公園設置を求める動きに発展していった。一方、北山川での水力発電所の建設計画による景観の破壊、吉野の山林地主・林業者たちが私有地の国立公園指定に反対の動きを強めていったことが、国立公園指定を阻む大きな問題として浮上した。

内務省に設置された国立公園委員会で国立公園指定の具体的作業が始まり、大台ヶ原候補地に熊野と南紀を加える拡大案が、1932 年に「吉野・熊野」の名称で正式な国立公園候補地として承認を得たが、二つの難問は解決がつかず、調査を行いつつ継続審議されることになった。地元からは北山峡の保存と絡めた国立公園指定促進の働きかけが活発に行われ、国立公園制度確立を目指す学術的団体である国立公園協会でも指定を促進する活動が活発化し、他方林業家による反対運動は激しさを増していった。

他の国立公園の指定が決定していく中、吉野・熊野も最終的な解決を迫られ、両方の問題で妥協案を採択して 1936 年に正式な国立公園指定に至った。水力発電問題では、発電所と風致問題を「両立」させた黒部峡谷の建設方式に倣うという提案で曖昧に解決された。林業問題では、国立公園候補地内の私有地について、人工林の地域指定を力説する意見も国立公園委員会にあった

ものの、内務省の国立公園事業の中心人物である林学博士田村剛は農林水産省と相談の上、林業家より反対のあった区域を縮小し、ほぼ従来どおりの営業を認めるという方向が提案されて、委員会の上で了承に至った。

以上の過程を振り返り、村串は、吉野熊野国立公園の指定運動は、他の国立公園のような観光開発要求はほとんど見られず、自然保護のためであったと位置づけている。

西田（2011）は、国立公園候補地は大台ヶ原の自然を中心としていたが、戦時下の国粋主義で重点が歴史に移り、吉野と熊野が結びつけられ国立公園が成立したと考察する（西田 2011, 187-196）。

熊野方面への拡張について、村串（2004）は自然保護の観点から北山峡の水力発電計画に対する反対の動きとの関連性を示し（村串 2004, 153-180/村串 2012, 354-371）、当初は、山林伐採への危機感や植物保護の要請から、大台ヶ原を中心に国立公園が構想されていたが、熊野方面への拡張が議論されるようになると、北山川流域の民有地の林業および水力発電計画との調整が懸案となって国立公園指定の過程は複雑化したとした（村串 2004, 153-180）。

神田（2009）は国立公園選定の過程で海岸の風景が注目されたこと、国家や天皇制との結びつきを強調する風景認識から熊野の霊地や史跡が重視されたことを指摘した（神田 2009, 99-113）。水谷（2014-2）は、奈良、和歌山両県の地元の役割から、熊野拡張の過程を分析した。政府内ではナショナリズム的観点から我が国を代表する風景として海岸風景が評価され、熊野への拡張が進められたが、その前提には、地元の奈良・和歌山両県の政府に対する活発な働きかけと、熊野の写真館が作成した写真集が政府関係者に普及して生まれた建国の歴史に関わる風景観の影響があったことを明らかにし、歴史が同国立公園選定の重要な要素となったことを示した（水谷 2014-2, 89-97）。

大台ヶ原・大杉谷・大峰山脈の区域変更は、地元の林業家が国立公園設置に反対していたことを受け、内務省で区域の調整を行ったものだった。水谷は、このときに国立公園区域から除外あ

るいは縮小された森林の範囲や、森林施業に対しなされた配慮の内容を明らかにした（水谷 2014-3, 81-88）。公園区域の調整が行われた森林の範囲を特定した上で、普通地域での施業制限の撤廃など、林業者の要望を汲むかたちで吉野熊野国立公園が指定されたことを明らかにした。これらの調整は、公園指定後の森林の取扱いや戦後の自然公園法における森林施業制限の後退にもつながり、国有地を主体に設計された国立公園法において、私有地制限の制度的準備が十分でなかったことを指摘した（水谷 2014-3, 81-88）。

1-2-3. 吉野林業地に関する研究

吉野林業は、紀ノ川上流の奈良県吉野川流域に、江戸時代初期からスギの人工造林を基盤として形成された林業である（加藤 1991, 51）。奈良県の森林はほとんどが民有林で、その割合は 95% に上る。民有林における人工林率は 62% であり、このように林業の盛んな奈良県で特に有名なものが「吉野林業」である（増田 2012, 43-44）。

吉野山地（紀伊山地の中央部、ほぼ吉野郡に相当。奈良県土のほぼ 3 分の 2 を占める。）のうち、吉野川上流域で行われている独特の林業を「吉野林業」と呼ぶ（増田 2013, 43-44）。奈良県川上村、黒滝村、東吉野村の三村が主要な吉野林業地と位置づけられている（奈良県農林部林業振興課 2016, 2）が、林業はこの地域一帯の主要産業であり、吉野町（吉野山周辺）も吉野林業地域の一翼を担うとの見方もある（奈良県吉野町 1972, 48）。

これら地域では、西暦 1500 年頃の室町時代末期、すでに川上村で造林が行われたという記述がある（増田 2013, 44）。他の吉野郡各地においても、およそ江戸時代の初期には植林が開始されており、以降営々と造林が行われ、黒滝、東吉野村の人工林率は 90% に達する（増田 2013, 44）。

吉野林業の特徴は、第一に特有の施業体系を持つことであり、その内容を端的に表すと、密植、多間伐、長伐期になる。密植とは、林地の地味に応じてスギとヒノキの割合を変えて混植し（現在はどちらか 1 種を選択することが多い）、高密度（8,000～10,000 本/ha、全国平均は

3,000 本/ha 前後) で植栽する。多間伐、長伐期とは、植栽後、枝打ち、弱度の間伐を繰り返し行い、集約的に施業を施すものである。このように極端な密植と弱度の間伐を数多く繰り返し長伐期とする施業(植田 2012, 315)によって産出される高品質のスギ材が、いわゆる「吉野スギ」である(増田 2013, 44)。

第二に、産出される木材の優秀さである。「吉野スギ」の特徴は、年輪幅が密で均一、幹は通直完満(真っ直ぐで、元から末の細り具合が小さいこと)、真円、無節、心材色が美しい、強度に優れていること等である。これらの特徴は樽用材として最適であったため、江戸時代以降、樽丸(樽用の板材を束ねた丸い束のこと)としての製品価値が高まり、明治、大正にかけて、京阪神の酒造地での需要が吉野林業を大きく発展させた。その後、樽の需要が減少してからは、高級建築用材としての用途に転じた。(増田 2013, 44)

戦後、日本の林業全体が衰退の波を受けたのと同じく、奈良県の林業も安い外材に市場を奪われていった。奈良県産材のうちでも、吉野材は高級ブランドを確立しており、外材の影響を大きく受ける並材とは別の市場で取引され、地域の産業として生き残ってきた。しかし、吉野材が使用される場である和室の減少が市場を減少させている。(増田 2013, 44-45)

第三に独特な森林管理制度である。「借地林業」と呼ばれる経営方式、村外の大山林経営とそれを支える山守の存在など特徴的な林野制度や生産構造を持つ(加藤 1991, 51)。「借地林業」とは、山林経営の安定を図るため土地の所有権を使用収益権から分離させ、あえて村外の商業資本に依存するものである。これを基礎に、村外所有者が地域住民から選んだ者に山林の保護管理を委託するのが「山守制度」である。山守は、森林所有者からの委託を受け、山林の保護・管理を担う者であり村外居住の森林所有者に代わって、植林・下刈り・枝打ち・除間伐の時期設定、現地における労働者の手配と監督、素材の搬出と輸送、時にはその販売まで、一貫して森林を管理してきた(植田 2012, 315)。「密植・多間伐・長伐期」という育林体系が維持されてきたのは、山守が受け継いできた高度な技術によると考えられる(植田 2012, 315)。

吉野林業に関する古典とも言える著作が、奈良県吉野郡川上村の材木商であった森庄一郎（1846－1916）が1898年に出版した「吉野林業全書」である。吉野の地形、木々の成長に合わせた施業方法、林業道具のイラスト、市場取引まで全450頁に渡って詳述されている（森 1983）。

今日までに行われてきた吉野林業に関する研究の多くは、地域の林家の経営に関する史料を発掘、整理した経済史的観点からの史料研究である（谷 2008 など）。その集大成でありそれまでの研究を体系化したのが、「吉野林業史料集成」（筑波大学吉野林業史研究会 1987-1992）全9巻である。林業史、農業史、歴史学の研究者が合同で、90件以上に及ぶ旧家文書、区有文書、機関文書、山林地主文書を広範囲に収集、調査し、近世、近代を通じての吉野林業史論をまとめたものである。村外に形成された大山林地主と、前述したように山林経営安定のため山林を手放す側の山元の関係、山林地主による山林経営の実態、吉野から産出された木材に課された運上金など租税の問題、材木商人の同業者組合の実態など流通の側面などが扱われている。経営史、産業史を中心に、多角的に吉野林業を把握した。

松尾（2010）は、吉野林業地域の産業構造分析を行っている。林業が縮小していく中で、吉野林業地の人口、職業、居住動向、生活様式、山守・社会的分業に代表される従来の独特な林産業経営の仕組みなど、地域の産業構造がいかに変容しつつあるかを考察すると同時に、産業の再活性化、農山村の存続に向けた従来の仕組みの解体・再編の動きを把握した。

現在の山守の実態に関する研究も行われている。井戸田ら（2004、05）は、山守による森林管理に対する所有者の意識、管理面積別の山守の管理業務の実態について考察した。植田ら（2012）は、林業を取り巻く状況が厳しさを増す中、山守の森林管理能力の低下が森林の管理状態にもたらす影響を明らかにした。その他、施業技術研究（川村 1994、高橋・武内 1999）などがある。

1－2－4．本研究の位置づけ

文化財や自然環境、風景地の制度上の指定について、吉野に限定して論じた研究はない。吉野

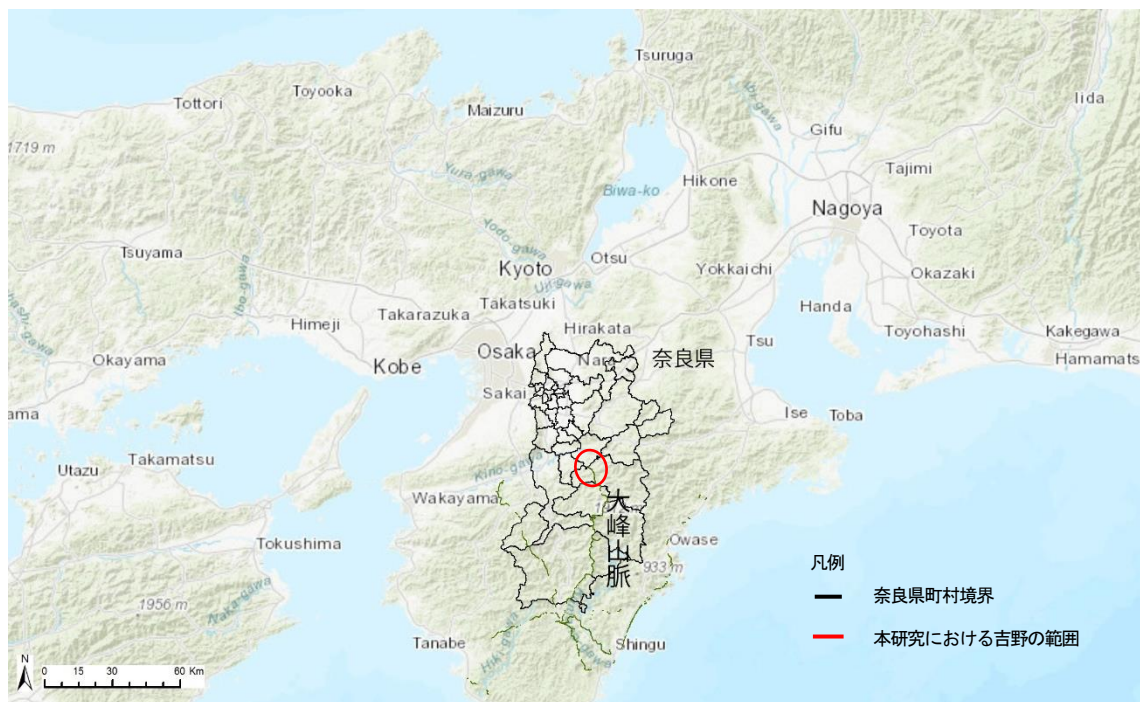
熊野国立公園の成立過程については先行研究があるが、熊野方面や公園中央部（大台ヶ原、大杉谷、大峰山脈）の区域変更の背景に主たる関心があり、吉野（吉野山とその周辺）に焦点を当ててはいない。

また、吉野は各研究領域でそれぞれの関心から取り上げられてきたが、吉野が持つそのような多様な側面を包括的に扱い、各制度上どのような資産や情報が重視されたかは明らかにされていなかった。

さらに、吉野は、江戸時代から続く大規模な林業地でありながら、政策的に国立公園となった場所である。日本の国立公園は、多くの私有地の上に法的な保護の枠をかけており、国立公園内で多くの産業（農林漁業）が行われている。本来、日本の国立公園は、自然だけでなく、人の営みが濃い地域である。国立公園と産業の関係を扱った研究としては、国立公園区域内における土地利用の実態を調査したもの（堀 1993）や、産業活動との調整の結果国立公園区域が決定された過程を示したもの（水谷 2014・3）があるが、産業の価値に焦点を当てた研究はない。本研究では、景観を成立させてきた産業が、国立公園制度においてどこまで積極的に評価されてきたかをとり上げ、活発な産業活動を含む国立公園における保全のあり方を考える一助としたい。

2. 対象地の特徴

吉野とは、広義には奈良県南部の吉野郡、狭義には金峯山寺を中心とした吉野山一帯を指す（小学館 1996, 1201）（図－4、図－5、図－6）。吉野山とは単独の山ではなく、広域地名であり、大峰山脈の北端が吉野川南岸に延びる長さ約 8km の山稜の総称である（ブリタニカ・オンライン・ジャパン 2017）。行政区域では吉野郡吉野町に含まれる。本研究では、吉野郡に国立公園や世界遺産における主要な地名が含まれることから、他の地名と区別し、吉野山一帯を吉野と定義した。



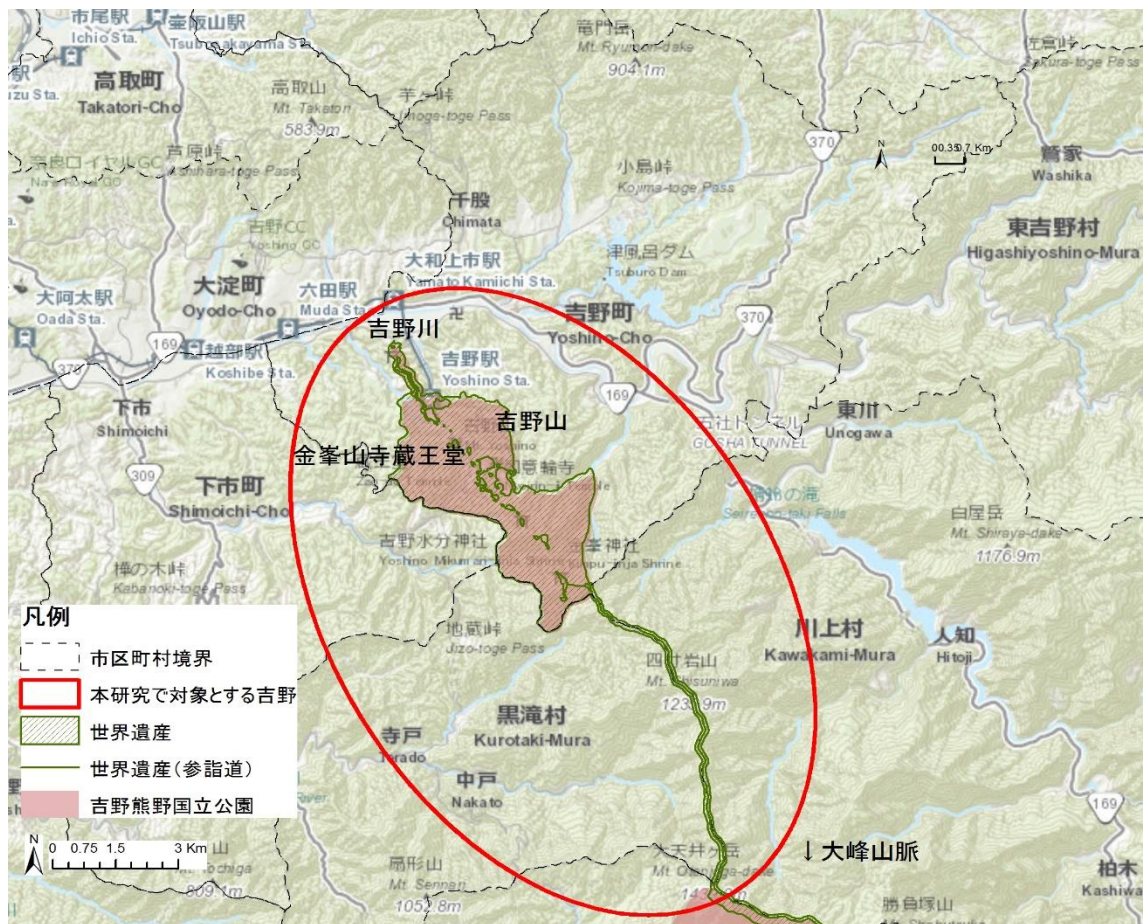
図－4 近畿地方と奈良県および本研究における吉野の位置関係

(ArcGIS で作成)



図－5 奈良県吉野郡と吉野町

(<http://www.freemap.jp/item/nara/nara.html> より作成)



図－6 本研究で対象とする吉野の位置

(ArcGIS で作成)

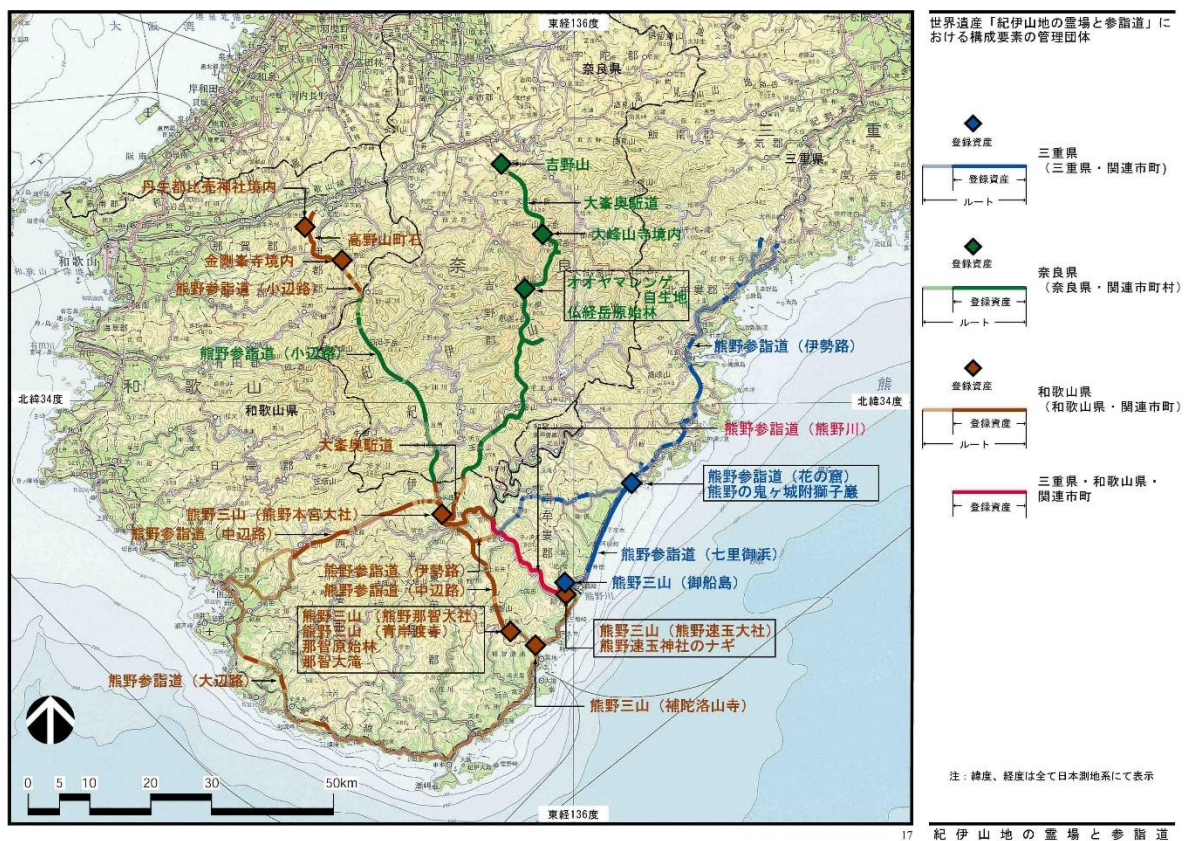
吉野には古代から山岳信仰が存在していたが、修験道（日本古来の山岳信仰に、神道や外来の仏教（特に密教）、道教、陰陽道などが混淆して成立した日本独自の山岳宗教）の成立とともに中心的な聖地として、開祖役小角（役行者）ゆかりの地と考えられ発展してきた（山と溪谷社 2004, 10）。修験道では、大峰山脈の険しい峰々全体を「大峯山」と称して信仰の対象とし、特に吉野山から山上ヶ岳に至る山岳地帯は金峯山と呼ばれてその中心となった（奈良県 2005, 8）。大峯信仰は、役小角が山上ヶ岳山頂で蔵王権現を祈り出したという伝承に関連づけられている。山上の蔵王堂である大峰山頂の大峰山寺に対し、吉野山には山下の金峯山寺・蔵王堂が造営され、この蔵王堂を中心に修験道関係の寺院が多数成立し、今日に至る（図－7）。中世には、これらの寺院勢力が強大となり、源平の争乱や南北朝時代の政治にも関係することとなり、源義経や南朝に関連する遺跡等の文化財も多く遺された（奈良県 2005, 8）。なお山上ヶ岳では現在でも厳しく女人禁



図－7 吉野修験の根本道場である金峯山寺本堂
(2017年4月13日 筆者撮影)

制が守られている。

吉野山から大峰山脈の主稜線を通り熊野まで、紀伊半島の中心を貫いて「大峯奥駈道」と呼ばれる古道が走っている（図－8、図－9、図－10）。修験道では、聖なる山岳に入り苦行を重ねながら踏破する山岳修行を「奥駈」あるいは「峯入」と称して最も重視する（和歌山県世界遺産センター 2016）。大峯奥駈道はこの修行の場であり、数多くの行場や、礼拝施設あるいは休憩所である宿・茶屋、社寺が結ばれている。熊野に向かう参詣道の一つでもある（図－8）。現在も吉野山や洞川など周辺地域の修験道寺院や、近畿地方など各地に存在する講と呼ばれる行者集団によって、大峰山脈に入り熊野に向かう奥駈修行が続けられている（奈良県 2005, 10）。



図－8 大峯奥駈道と熊野古道
（世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」に関する三県協議会 2005, 17）



図一 9 吉野山から大峰山脈に至る修行の道 大峯奥駈道
(2016 年 8 月 12 日 筆者撮影)



図一 1 0 大峯奥駈道中の祠
(2016 年 8 月 12 日 筆者撮影)

吉野は古来、日本随一の桜の名所として名高い（図－１１）が、桜も山岳信仰に由来する。吉野山が一面の桜の山となったのは、中世以来、人々が祈願のために桜の苗を植え続け、尊重し、江戸幕府による保護や地域住民による手入れが続けられてきた結果であった（鳥越 2003, 86-106）。



図－１１ 名勝・一目千本の桜

眺望地点である吉水神社は後醍醐天皇の行在所や源義経の隠れ家となった地。

（2017年4月13日 筆者撮影）

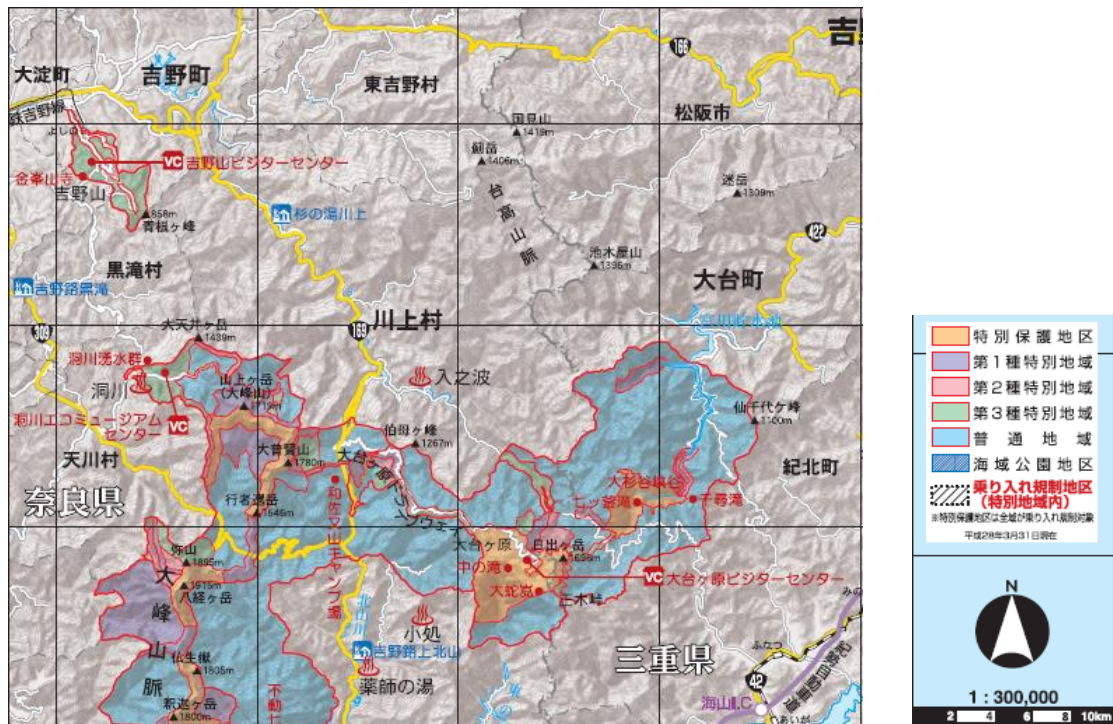
桜に加え、古代の歴代天皇が吉野に行幸を行い、13世紀には後醍醐天皇の南朝が吉野を拠点に戦うなど天皇との関係が深い地でもある。また、大海人皇子から後醍醐天皇、源義経まで歴史上の著名人物が政争から逃れた場所として日本史に度々登場し、このような歴史に関連する史跡も多い。西行、本居宣長など詩歌や文学、芸術の舞台としても広く知られる。これらの特色から早くから観光地として発展してきた。金峯山寺を起点に土産物屋や旅館が連なり門前町を形成し、花期を中心に国内外から多くの訪問客を集めている。

他方、吉野およびその周辺地域は吉野林業で知られる一大林業地でもある。前述したように、室町時代に遡る造林の歴史があり、山守や借地林といった独特な山林管理の制度の下、江戸時代より集約的な施業が行われ、スギやヒノキの良材を産出してきた（奈良県吉野町 2016）。

吉野山全域は 1924 年に史跡および名勝、1936 年には吉野熊野国立公園の一部に指定された。国立公園では、吉野山全域に相当する吉野山管理計画区（図－2、図－6、図－12）が、国立公園の主要部分から切り離され飛び地として設置された（環境省 2001, 2）。同公園は、三重県、奈良県、和歌山県の三県にまたがり、北部に「吉野地域」として吉野山管理計画区のほか大峰山脈管理計画区、大台ヶ原管理計画区、大杉谷管理計画区が設置され、南部には「熊野地域」として熊野川および北山川流域、本宮・新宮・那智山の熊野三社、尾鷲から勝浦、潮岬にかけての熊野灘に臨む海岸線が指定されている。国立公園の中で私有地が 66 パーセントと大きな割合を占めるのが特徴で、特別保護地区と特別地域以外では林業が盛んに行われている（菅沼 1996, 20）。吉野山の周辺に、国立公園の区域を避けるように吉野林業の中心地域が広がっている（奈良県農林部林業振興課 2016, 1）（図－2）。

公園面積は、61,406ha（陸域のみ）、うち 7.3%が特別保護地区、6.3%が第一種特別地域、9.2%が第二種特別地域、12.6%が第三種特別地域、64.4%が普通地域である（環境省吉野熊野国立公園ホームページ）（図－12）。吉野山地区は昭和 45 年に第三種特別地域に指定されている。

吉野山以外の管理計画区の概況については、大峰山脈では弥山周辺のオオヤマレンゲ群落（天然記念物）、八経ヶ岳山頂付近のシラビソ純林などの貴重な植生が存在する（環境省 2001, 7）。また稜線部では、大峯奥駈道の周辺が宗教的理由から長期に亘り禁伐とされてきたため自然度の高い植生が見られる（環境省 2001, 7）。大台ヶ原は、東大台地区のトウヒ林、西大台地区のブナ林など広大な原生林が残り（環境省 2001, 12）、明治時代から伐採と保護の動きとの葛藤が続けられてきた地域で、大台ヶ原の自然保護の要請は吉野熊野国立公園成立の大きな原動力となった（村串 2006, 4-5）。原生自然保護のため、昭和 48、49 年に核心部の一部民有地が奈良県に買い



図－１２ 吉野熊野国立公園・吉野山周辺の地種区分
(自然公園財団 2016)

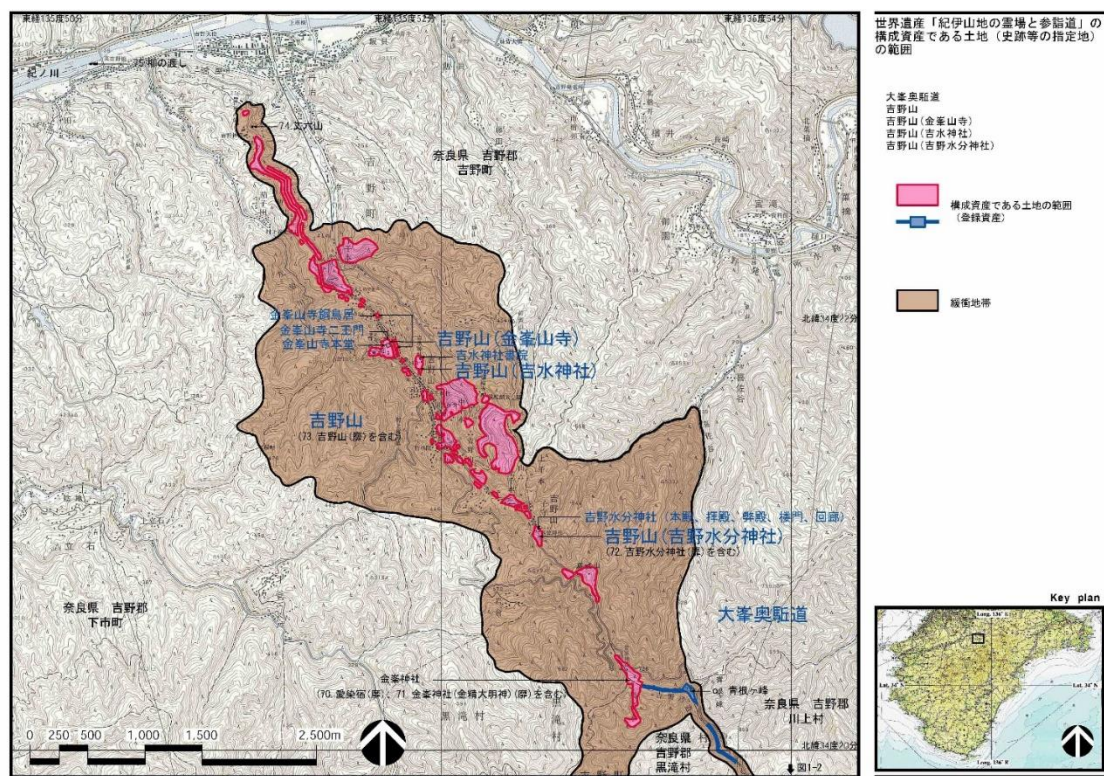
上げられ、1984年に環境省所有となり（環境省 2001, 12）、2006年には西大台地区が全国初の利用調整地区（国立公園特別地域において入山者数、入山方法を制限する）に指定された。大杉谷は、切り立った岩壁、滝、淵など非常に急峻な地形から成る溪谷景観が特徴であり、地形条件ゆえに自然植生も保たれている（環境省 2001, 18）。

大峰山脈や大台ヶ原ではシカによる植生への被害が深刻化し、吉野山ではヤマザクラの樹勢の衰退が懸念され保全の措置が取られてきた（奈良県吉野町 1972, 6）。

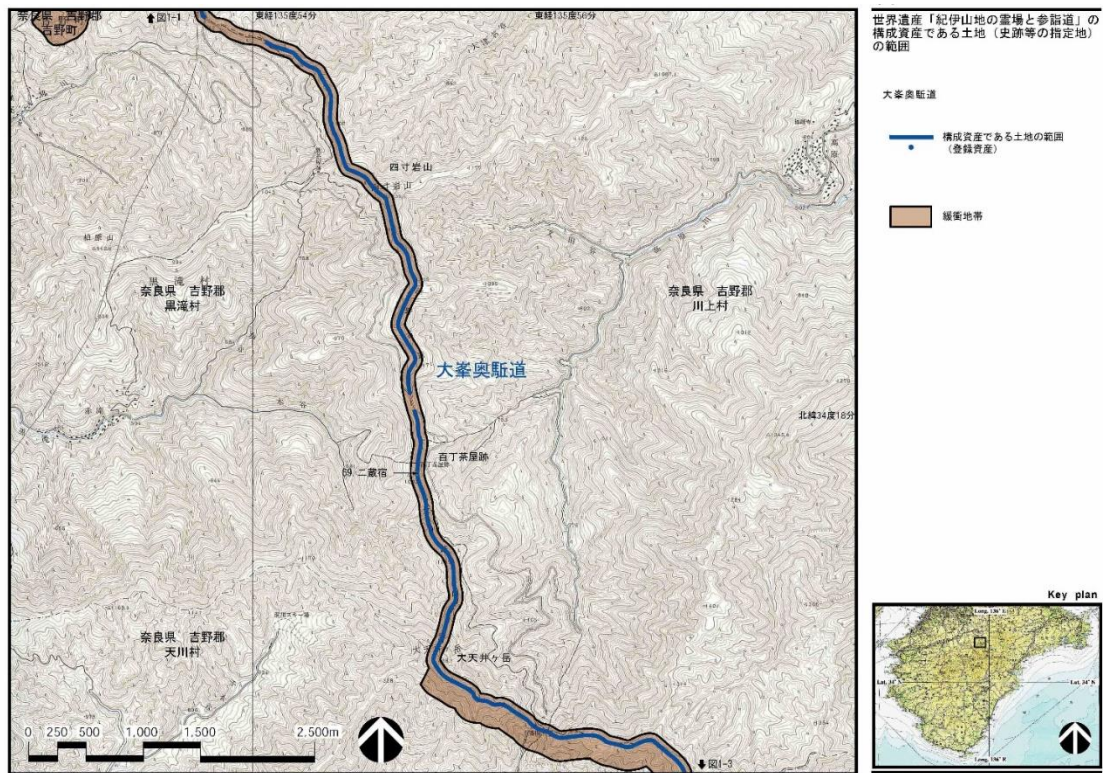
2004年には、吉野山および大峯奥駈道が「紀伊山地の霊場と参詣道」の一部として世界遺産登録を受けた。世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」は、三重県・奈良県・和歌山県の三県に所在する神道、仏教、両者が混淆して形成された山岳信仰の修験道などの霊場「吉野・大峯」「熊野三山」「高野山」と、その間を結ぶ参詣道から成る。霊場と道およびそれらを取り巻く紀伊山地の深い森林が、自然信仰に根差す神道と大陸から伝えられた仏教の融合や、1200年以上に亘り人々によって連綿と続けられてきた山岳信仰の伝統を映す文化的景観であるとの評価を受けた

(UNESCO World Heritage Center 2016)。

世界遺産「吉野・大峯」は、三霊場の中で最も北にあり大峰山脈上に位置し、吉野山を中心に青根ヶ峰までを「吉野」、以南を「大峯」と呼んでいる。「吉野・大峯」の構成資産として、吉野山全域、吉野水分神社、金峯神社、金峯山寺、吉水神社、山上ヶ岳山頂の大峰山寺が含まれ（奈良県 2005, 11）、これとは別に「参詣道」として大峯奥駈道と熊野参詣道小辺路が構成資産となっている。吉野山周辺では、国立公園の吉野山管理計画区の範囲が、世界遺産のバッファークゾーン（緩衝地帯）と一致している（図－1 3）。なお、吉野山と大峰山脈など国立公園中央部の間の、国立公園には含まれなかった一帯は、大峯奥駈道として世界遺産の登録区域には含まれ、道周辺がバッファークゾーンとなっている（図－2、図－1 4）。



図ー1 3 吉野山周辺における世界遺産の構成資産と緩衝地帯
(奈良県保存管理計画 2005, i)



図ー1 4 吉野山－大峰山脈間の大峰奥駈道における世界遺産の構成資産
と緩衝地帯
(奈良県保存管理計画 2005, ii)

3. 国立公園指定時の吉野に対する評価

3-1. 目的

本章では、吉野熊野国立公園としての吉野の国立公園指定（1936 年）について、指定に至る議論を把握したうえで、吉野が当時の国立公園当局すなわち内務省によってどのように評価されてきたのかを明らかにする。

3-2. 方法

1920 年代から 1930 年代にかけての吉野熊野国立公園の成立過程を、区域案の変更に沿い候補地の選定期と公園指定の二段階に分けた。国立公園指定の主体だった内務省国立公園委員会および特別委員会の議事録（1931 年から 1935 年まで。同一冊子にまとめられた議事録から計 6 点（史料 2, 3, 4, 5, 8, 9）を対象とした。）を中心に、当時の『国立公園』の雑誌記事（1932 年および 1936 年）も分析し、各時期の出来事とそれぞれにおける吉野の評価を整理した。なお、国立公園委員会および特別委員会で、委員である学者個人（本多静六や三好學）が特定の評価を強く主張している場合は、評価に至った思想的背景を先行研究より、先行研究がない場合は当該学者の著作から考察した。

3-3. 分析

3-3-1. 国立公園候補地選定（1920-1932）

（1）初期候補地選定

1921（大正 10）年より、国立公園設置に向けた本格的な議論が、林学博士・田村剛を中心として内務省衛生局で始まった。1922（大正 11）年には国立公園の調査の予定地（全 16 ヲ所）が内務省衛生局でまとまるが、ここに「大台ヶ原」は含まれるものの、「吉野」や「吉野山」の名はなかった。（水谷 2014-1, 67）

この頃から、各地から国立公園設立を要請する請願・建議が政府に多数提出されるようになる（田中 1981, 214）。奈良県や地元吉野郡の国立公園指定推進家、あるいは奈良、三重、和歌山の三県から、吉野群山一帯すなわち大台ヶ原・大峰山脈について、あるいは大台ヶ原を中心に北山

川峡谷、熊野海岸を含め三重、和歌山県まで拡大して国立公園の設立を求める訴えが繰り返し提出された（村串 2012, 354-371）。

（2）吉野を含まない調査地の選定

1923（大正 12）年の関東大震災を受け、大正末年にかけて国立公園の議論は停滞する。昭和初期に入り、不況を受けた外国人観光客誘致の要請などから指定の動きが再燃した。（田中 1981, 235-236）

1931（昭和 6）年 10 月に国立公園法が成立すると、内務省に国立公園委員会が設立され、16ヵ所の調査予定地から候補地の選定が進められた。実質的な審議は一部のメンバーで構成された「国立公園の選定に関する特別委員会」（以下、特別委員会）が担った。（水谷 2014-2, 90）

1931（昭和 6）年 11 月の第 1 回国立公園委員会では、前述した大台ヶ原の調査予定地から発展し大台ヶ原・大峰山脈を主とした「大台ヶ原大峯山国立公園案」が提案された。本提案には吉野は含まれていなかった。このときの議事録にも吉野に関係した言及は見られなかった（史料-1）（内務省 1930, 1931）。

続いて 1931 年 12 月 8 日に開催された第 1 回特別委員会の議事録では、海岸美を主体とした臨海公園として「大台ヶ原大峯山国立公園案」を熊野・南紀海岸に拡大する意見が出されるが、このときも吉野への言及はなかった（史料-2）（「国立公園審議会一般・昭和 6～10 年」 1931-1935 以下、国立公園選定に関する特別委員会、懇談会、区域決定に関する特別委員会の議論は同資料による）。

以上（1）（2）より、1920 年代に内務省の衛生局で始まった国立公園候補地の検討では、吉野は対象とされず、大台ヶ原と大峰山脈のみが国立公園として提案された。

（3）熊野地方への拡張案

「大台ヶ原大峯山国立公園案」は、1932（昭和 7）年 3 月 10 日の第 5 回特別委員会で具体的

に審議された。このとき、和歌山、奈良の両県より熊野地方（北山川流域、紀州海岸）への拡張案が提示され、海岸風景を主とする国立公園の成否、北山川流域の電源開発計画との調和を巡り、この案への対応が主に議論された。

拡張の要望範囲には、那智の滝、神武天皇史跡、熊野三社など熊野地方の史跡が含まれ、委員から史跡を考えるべきとの意見が出された。地元案に吉野への拡大要望はなかったが、特別委員会の記録上初めて、「色々の意味から拡張するなら吉野まで入れたい。」と吉野を拡張範囲に含めてほしいとの発言（正木直彦委員、東京美術学校校長）があった（史料－3）。

こうした地元案を踏まえ、1932（昭和7）年3月17日の第6回特別委員会で、内務省・田村より、熊野地方まで公園区域を拡大した修正案が提案された。

田村は、第5回目の審議で編入を求める意見があった吉野および熊野三社などについて、「従来の国立公園の観念を変えずにどうしても必要なものだけを取り入れますと今申し上げた様な区域になるのです。」と除外している。「従来の国立公園の観念」とは、後述するように、日本を代表する自然の大風景地であることを前提に、原始的自然や区域のまとまりを重視するものだった。吉野はこのような国立公園の性質にそぐわないとされたのである。

しかし、一方で、本多静六（林学者）より吉野を入れなかった理由を問われ、「利用上の関係が薄いので入れなかったが、更に研究の必要がある。」と編入の可能性を残している（史料－4）。

（4）現地調査と懇談会—吉野の編入

特別委員会の後、16ヶ所調査地について特別委員会委員による現地調査が行われ、上述の拡張案についても本多静六（林学者）、正木直彦ら4名が山上ヶ岳から大台ヶ原山、熊野海岸、瀬八丁、川湯、本宮、湯ノ峯を訪問し、一部委員は吉野山に入った（西田 2016, 41）。

現地調査を踏まえ、1932（昭和7）年夏以降、懇談会形式で議論が継続され、吉野の国立公園編入を求める発言が相次いだ。第二回懇談会で、藤村義朗委員長（男爵、元通信大臣）が「靈感享受の点で霧島、吉野は傑出している。」「歴史的に吉野熊野は貴重である。」、正木委員が「日本

の国立公園は歴史に重きを置かなければならぬ。吉野熊野は自然も優し歴史上に於ても大切である。」と述べた。また本多は「大台ヶ原大峯山を第一位とは解せないが、森林美を（中略（筆者））主張したい。日本の杉の美しい人工林は吉野である。又柑橘が方々にあつて之も代表している。」と吉野を推薦した（史料－５）。1932（昭和 7）年 8 月 2 日の第三回懇談会では、三好學（植物学者）も「吉野の人工林もよい。副次条件も重く見る必要がある。これより見れば有力である。」と発言している（史料－５）。主に歴史と吉野林業地の人工林の美しさが高く評価された。

以上から 1931 年の国立公園法成立後、国立公園委員会で選定の審議が進む中で吉野の国立公園編入が議題に上り、特に 1932 年夏の特別委員会による現地調査を経て、吉野への評価が決定的となった。歴史が重視された一方、本多と三好によって吉野林業地の「人工林の美」が高く評価された。1932 年 10 月には吉野を加えた国立公園案が選定されることになる。

本多が吉野の人工林美を評価した背景には、20 世紀末にドイツ林学から導入され国内で発展していた「森林美学」の影響が考えられる。本多はドイツ留学の後、1910（大正 10）年頃から東京帝国大学で「森林美学」の講義を行っていた。本多は森林美学の導入の初期に位置する学者であり、導入初期の概念である、管理され整然とした施業林の美しさから吉野の人工林美を評価したと考えられ（清水ほか 2006, 395-398）、それまでには見られなかった新しい吉野の風景といえる。

三好は、後述するように史蹟名勝天然記念物の制度確立に尽力した経歴があり、吉野の国立公園指定が議論される 1930 年代までに全国の桜や巨樹名木に関する著述を多数残しているが、林業地の人工林景観を評価したものは他に見られない。

三好が人工林美を評価した背景を考察するため、1929（昭和 4）年に創刊された雑誌『国立公園』で、吉野熊野国立公園が指定された 1936（昭和 11）年までに三好學が寄稿した記事を収集した。

「欧米の国立公園と天然記念物保存」（国立公園 1 巻 1 号）では、三好は、欧米諸国で国立公

園として保存されている地域は、山水風景に富んでいるのみならず、その中に動植物、地質、鉱物などの天然記念物を包含しており、それらは学術上重要であると共に、それぞれの国立公園の特徴を現し、固有の風景を成しているとする（三好 1929, 8）。その上で、欧州たとえばスイスの国立公園は、自然界の絶対保存を行うのに対し、北米の国立公園は遊覧、交通、宿泊が自由になっているなど、一面民衆的であると共に他面には原始林、野花、鳥獣などの天然保護に努めているとし（三好 1929, 8）、日本に国立公園が設置される場合にはこのような欧米の国立公園のあり方を考慮すべきだと意見を述べている（三好 1929, 9）。

「日光の特殊植物景觀に就て」（国立公園 2 巻 5 号）で三好は、具体的な植物名や植物群落を挙げ、その分布や生態、色などの特徴を述べている（三好 1930, 4-5）。「雲仙国立公園、霧嶋国立公園並に瀬戸内国立公園の植物に就て」（国立公園 6 巻 4 号）でも、各国立公園に見られる植物種、群落について、樹容や分布、色等の特徴を挙げている（三好 1934, 6-9）。「日光国立公園の景觀」（国立公園 6 巻 12 号）は、日光地方と尾瀬地方の地理、地形、自然環境を述べた上で、どのような植物・樹林があるか、どの時期が美しいか、また景觀として山容の偉大さや桜や紅葉の集団が形づくる景觀に触れている（三好 1934, 5-9）。「十和田国立公園の景觀」（国立公園 8 巻 3 号）も同様の文章であり、三好は、十和田湖周辺の地理、地勢、地形を述べた上で、アクセス方法や遊覧に適した季節、生えている植物の詳しい品種やそれらがなす景觀を紹介している（三好 1936, 8 巻 3 号）。

以上から、本研究では、三好學の国立公園全般に対する関心は極めて学術的、植物学的なものであったと考える。他方、国立公園委員会特別委員会で見られた吉野の人工林を評価する発言は、生業と関わる植物景觀に意義を見出しており、三好の国立公園観一般とは異なるものだったと考察される。

国立公園法が制定されたのと同年である 1931 年には、三好は、『史蹟名勝天然記念物保存ニ就テ』において、「杉は日本特有の植物で外国にも知れて居ますから、外国人が日本へ来ますと此木

に目を附けます」(三好 1931, 19) と述べている。後続する文で具体例として挙げられているのは林業地景観ではなく単独の杉の大木であるものの、三好が杉という樹木を、対外的に日本を代表するものとして意識していたことが考えられる。国立公園制度が外国人観光客の来訪を期待し、海外に日本を売り出すことを一つの目的としていたことを鑑みれば、日本を代表する植物として国立公園指定の議論の中で吉野の杉に注目したと推察される。

1902 年に三好は『植物生態美観』において、植物の美には「天然の美と人工の美との二つがある」(三好 1902, 3) と述べた。天然の美とは文字通り人の手が入っていない自然の状態であるが、人工的の美とは「人の作用又は細工に因つて天然の美の上を更に潤飾したり、又色々に変化し、或は應用していくもの」(同上) でこれには二つの場合があるという。三好によれば、第一に、生花や庭園造りにみられるような、人が手を加えることで植物の形態や性質を変え、自然の状態よりも美麗にする、園芸的な美である。第二は、絵画や写真、文学など自然の植物を真似ることによってその美を永存させようとする方法である。第一の人工的な植物美の具体例には挙がっていないものの、林業地の人工林は、人によってその成長を管理された木の集合であり、以上の記述から三好がそこに自然状態の森林を上回る美を見出していた可能性は考えられる。

小野 (2008) は、三好學が導入したとされる「景観」の用語について、三好が持たせた意味と導入の意図を考察した。小野によれば、三好の「景観」は、一定領域を占める植物の集団の状態と、眺めという意味の双方を捉えた両義的なものだった (小野 2008, 438)。さらに、人間の作用によって成り立っている群落、たとえば日光の杉並木も、実体としての植物という意味だけでなく眺めの性格も含んだ植物景観だとされた (小野 2008, 436)。

「景観」を表題に含んだ著書『日本植物景観』で、三好は、「やまざくら竝に森林ノ景観」(三好 1915, 2) として吉野山を取り上げている。「大和吉野山にはやまざくら甚だ多く、所謂一目千本、中千本、奥千本の称あり、本図に示せるものは奥千本の一部にして、吉野山の高所より見たる景観なり、一帯の遠望山林は主としてすぎより成る、」として、桜だけでなく周囲の杉林にも言

及している。上記のような景観の概念から、三好は、桜という植物の集団だけでなく、吉野山の総体的な眺めを意識し、桜と杉を一体的な景観と見たと考えられる。

以上から、三好は、植物種としての杉への注目に加え、1930年代までに植物学者として培ってきた美や景観に対する考え方もあり、吉野の人工林を良いと述べたと考えられる。

一方で、1932（昭和7）年8月以降、吉野郡の大山林地主から、国立公園からの民有林削除を求める要望書が度々提出されていた（水谷 2014-3, 82）。

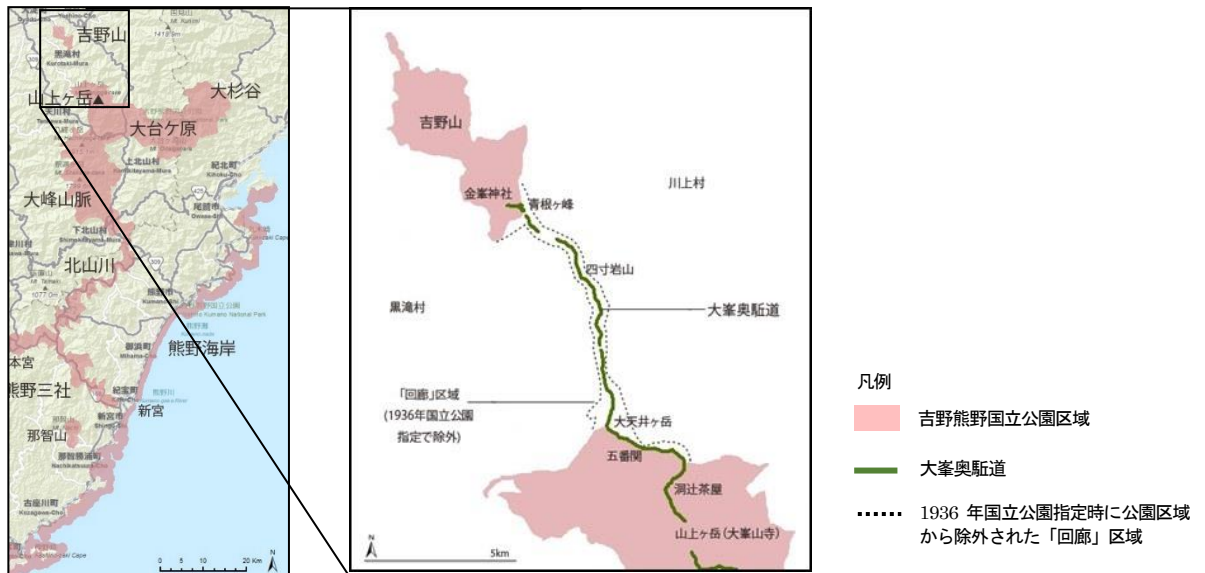
（5）吉野を含めた国立公園候補地の選定

1932（昭和7）年9月24日の第8回懇談会で、熊野地方及び吉野に拡大した「吉野及熊野国立公園案」が合意され、1932（昭和7）年10月8日、第2回国立公園委員会で、12ヶ所に整理された候補地の一つとして正式に選定された。

雑誌『国立公園』に「第二次国立公園委員会総会の記」として掲載された選定理由の説明では、候補地中唯一水成岩系統の山地として吉野群山（大峯山、大台ヶ原等）、大杉谷と北山峡の溪谷の景観、我国を代表する海岸風景として紀州海岸を挙げ、山岳、森林、溪谷、河川、海岸という各種の優れた風景を併せ持つ点で比類がないとした（史料-6）。

この説明の末尾では「本公園は、神武建国以来の貴重なる史跡伝説に富み」と国史との関係が評価されている。一方、懇談会で歴史とともに評価された吉野の人工林に関する言及はなかった。このとき吉野がはじめて候補地の区域に含まれたといえるが、吉野に特化した説明はなく、付随的に吉野山や熊野地方の国史は評価されたが、吉野林業地の人工林美は全く触れられていない。

「吉野及熊野国立公園」の候補地選定において、「回廊」区域が示されている。吉野山の青根ヶ峰頂から大天井ヶ岳山頂までの尾根筋を辿る道とその両側数百メートルの範囲である（図-15）。これは、吉野山から山上ヶ岳を経て熊野へ至る修験道の山岳修行の道である「大峯奥駈道」と一致しており、大峯山（山上ヶ岳および大峰山脈）に対する信仰である吉野の修験道において



図－１５ 現行吉野熊野国立公園区域と大峯奥駈道
(ArcGIS、内務省衛生局（1932）：「国立公園候補地地図」、環境省所蔵より作成）

重要な一帯である⁴。

3－3－2．国立公園指定（1935-1936）

その後、12ヶ所の候補地に基づき正式な国立公園指定に向け区域調整などの議論が進められ、1935年12月の第7回国立公園委員会では、「吉野熊野国立公園区域」案が内務省から提案された（史料－7）。

このとき、大台ヶ原・大杉谷・大峰山脈の区域を縮小し、「回廊」区域を除外し、熊野三社（那智山、本宮）が追加された。こうして吉野山と熊野三社が飛地として国立公園区域案に含まれることになった（水谷 2014－2, 92）。

第2次国立公園委員会の候補地選定の説明と同様に、吉野の人工林を評価する言及はない。しかし、産業との調整の観点から、国立公園設置による吉野林業の施業に対する影響を最小限にしたい旨が示される。

⁴ 吉野山から山上ヶ岳までの大峯奥駈道は、金峯神社、青根ヶ峰、四寸岩山、大天井ヶ岳、五番関、洞辻茶屋を経て山上ヶ岳山頂の大峯山寺境内に至る。青根ヶ峰から大天井ヶ岳までの範囲が、内務省衛生局（1932）：「国立公園候補地地図」の区域案より「回廊」区域と一致する。

吉野熊野国立公園区域案は、続いて開かれた区域決定に関する特別委員会の第二回、第三回委員会で審議された。内務省・田村は、吉野の林業地で地元の林業家が国立公園からの除外を求めているため、区域を縮小したと説明しており（第二回、史料－８）（「国立公園審議会一般・昭和6～10年」, 1931-1935）、この区域案において吉野林業地が以前より縮小されたことがわかる。

これらのことは、前述した吉野の林業家により繰り返し出ていた国立公園区域からの除外の要望を反映し、国立公園区域から吉野林業地が大幅に削減されたと考えられる。

「回廊」区域除外の経緯については明らかではない。第二回区域決定に関する特別委員会（後述）における、吉野の林業地を縮小したという田村の発言と、「回廊」周辺が川上村と黒滝村にまたがり吉野林業地域にあたる（奈良県農林部林業振興課 2016, 1）ことから、「回廊」区域も林業者への配慮から除外されたと推察される。

出席委員の中から三好と本多が反対意見を出し、特に本多は、吉野の人工林が世界的に優れており、この国立公園の中心となるべきもので除外すれば選定の価値がないとし、内務省の対応を激しく批判した（第二回（史料－８）、第三回（史料－９））。三好は、吉野の人工林が風致上大切な地位を占めていると述べている（第二回（史料－８））。

同特別委員会は、本多に妥協を求めるかたちで区域案を提案の通り可決し（第三回（史料－９））、1936（昭和11）年2月の「吉野熊野国立公園」の指定に至った。

吉野山と熊野三社について、1935年の第7回国立公園委員会で内務省衛生局長は、自然の風景地以外のものであるが「我が国建国以来の貴重なる霊地、史蹟等」であり、本公園の成立上欠くべきでないため取り入れたと、国史との関係性を評価した説明を行っている（史料－７）。1936年2月の最終指定で指定理由に挙げられたのは、国史との関わりのみだったということになる。

人工林や信仰は評価されず、国史との関係性のみを理由に吉野山が指定されることとなったが、これは、田村剛が一つの国立公園における風景型式の統一性やまとまりを重視し、飛地や線状の区域に否定的だった（水谷 2014-2, 91-92/西田 2016, 43-44）ことと関係があると考えられる。

1931 年 10 月の国立公園法制定とともに、国立公園の選定標準である「国立公園の選定に関する方針」が決定された。「第一 必要条件」として同方針の冒頭に掲げられているのは、「我が国の風景を代表するに足る自然の大風景地」「即ち 日常体験し難き感激を与ふるが如き傑出したる大風景」であり「海外に対しても誇示するに足り世界の観光客を誘致するの魅力を有するもの」である。この方針には明記されていないが、傑出した大自然に通じる概念として田村が重視したのが、人間の手が入っていない「原始的風景」と「まとまり」であった。まとまりは、一つの風景型式で一つの区域として一体的・完結的であることを指し、利用上、管理上の便宜からも一体性を重視し、飛地や線状の区域は避けたい考えであった（西田 2016, 40, 44）。

熊野三社について、編入するには飛地とせざるをえなかったため、「建国以来の霊地、史蹟」として重要だと説明されたことが既に指摘されている（水谷 2014-2, 92）。吉野山にも同じ説明がなされていることから、「回廊」区域の除外により吉野山を本来避けていた飛地とせざるをえなくなり、国史を強調して説明したと推察される。

以上より、1936 年 2 月の吉野熊野国立公園の最終指定では、地元林業家の反対で国立公園区域の吉野林業地が縮小され、それまで国立公園特別委員会で本多静六らによって注目されていた人工林美への評価は取り入れられなかった。

公園区域は、吉野山と大台ヶ原・大峰山脈を結んでいた「回廊」区域が除外され、吉野山を飛地化するかたちで指定された。内務省の本来の方針に反していた飛地指定を説明するため、国史上の重要性が前面に出された。結果的に国立公園指定において吉野山の国史のみが評価され、人工林や山岳信仰は評価に含まれないこととなった。

3-4. 結果

国立公園指定の過程では、人工林の美的価値が見出された時期もあったが、最終的に吉野が評価されたのは国史との関係からだった。林業者による国立公園からの除外要求が優先されて林業地が縮小され、人工林について生産の側面のみが認識され、一度は見出されていた美的価値は評

価から外された。吉野山の飛地化という変則的な区域設定に説明をつける必要もあり、国史のみが指定理由となった（表－１）。

表－１ 国立公園指定における吉野に対する評価^１

年月	制度指定に関する出来事	資産の評価		情報の評価		
		桜	森林	国史	信仰	産業
1923 年 2 月	奈良県吉野郡を中心とする国立公園設定に関する建議案 ^２			○	○	
1932 年 3 月	第 6 回 国立公園選定に関する特別委員会					
1932 年	第 2 回 懇談会 ^３		本多静六 （林学）	藤村義朗（委員長） 正木直彦（美術行政家）		本多静六 （林学）
1932 年	第 3 回 懇談会		三好學 （植物学）			三好學 （植物学）
1932 年 10 月	第 2 回 国立公園委員会 ^４			○		
1935 年 12 月	第 7 回 国立公園委員会			○		
1935 年 12 月	第 2 回 区域決定に関する特別委員会		本多、三好			本多、三好
1935 年 12 月	第 3 回 区域決定に関する特別委員会		本多			本多
1936 年 2 月	「吉野熊野国立公園」指定			○		

注 1) 表中、人名は議事録から判明した国立公園委員会特別委員会における発言者、○は記述の見られたものを示す。

注 2) 地元議員が帝国議会に国立公園設置の審議を要望した議案書。

注 3) 1932 年夏に国立公園委員会特別委員による吉野での現地調査が行われた。懇談会は現地調査後に開かれた特別委員会の非公式会合である。

注 4) 「吉野及熊野国立公園案」が選定され、吉野が初めて国立公園候補地域に含まれた。

4. 世界遺産登録における吉野に対する評価

4-1. 目的

本章では、世界遺産登録における吉野に対する評価を明らかにすることを目的とした。世界遺産としての吉野を取り上げた先行研究は少なく、また吉野のどの側面がどのように評価されたのか明らかになっていない。UNESCO および世界遺産登録の可否を審査する諮問機関である ICOMOS（国際記念物遺跡会議、International Council on Monuments and Sites）を評価の主体として設定した。また、保存管理の方針も併せて考察した。

4-2. 方法

吉野の価値（桜、人工林、国史、山岳信仰）に関し、世界遺産登録審査および登録後の保全状況の審査、保存管理において、日本（行政）および UNESCO/ICOMOS が吉野をどのように評価したか資料から分析を行った。

対象とした資料は以下 5 点である。世界遺産登録時のものとして、日本政府が UNESCO に対象地を推薦した理由が示されていることから「紀伊山地の霊場と参詣道」登録推薦書（Nomination File、2004 年）、および ICOMOS の対象地に対する価値づけを示す資料として ICOMOS が推薦案件を審査した評価報告書（Evaluation Note、2004 年）を取り上げた。世界遺産登録以降のものとして、日本の地域行政の対象地に対する評価を示す資料として、推薦自治体である三重県、奈良県、和歌山県により作成され UNESCO 世界遺産センターに提出された保存管理計画書（2005 年）、世界遺産登録後の対象地に対する UNESCO/ICOMOS の認識を示す資料として、登録を受けた遺産に対し定期的に行われる ICOMOS の保全状況審査の報告書（State of Conservation Report、2006 年）、各世界遺産に対するユネスコ世界遺産条約における公式的な評価といえるため、「顕著な普遍的価値のステートメント」（Statement of Outstanding Universal Value、2013 年採択）⁵を対象とした（表-2）。

⁵ 顕著な普遍的価値を明文化した Statements of Outstanding Universal Value（以下、SOUV）は、2007 年以降、世界遺産リストへの登録にあたる必要条件として各遺産につき作成、提出することが義務づけられている。また、過去に遡り、2006 年以前に登録された世界遺産においても SOUV を作成し、世界遺産委員会の承認を受けるべきことが決定され、毎年の世界遺産委員会で漸次、各国からの SOUV 提出と同委員会による承認が行われている（Adoption of Retrospective Statements of Outstanding Universal Value）。「紀伊山地の霊場と参詣道」の SOUV は、2013 年の第 37 回世界遺産委員会で提出、承認された。世界遺産センターウェブサイトで各遺産のページの概要説明（Description）に掲載されている文面

表－２．世界遺産登録における吉野に対する評価 分析対象資料

	評価主体	年	資料名
1	日本	2004	「紀伊山地の霊場と参詣道」登録推薦書 (Nomination File)
2	UNESCO/ICOMOS	2004	ICOMOS 評価報告書 (Evaluation Note)
3	日本	2005	保存管理計画書
4	UNESCO/ICOMOS	2006	ICOMOS 保全状況審査報告書 (State of Conservation Report)
5	UNESCO/ICOMOS	2013	顕著な普遍的価値のステートメント (Statement of Outstanding Universal Value)

なお、保全状況審査報告書は管理面が中心であり、価値の評価に関する記述は「紀伊山地の霊場と参詣道」全体についてのみだった。「顕著な普遍的価値のステートメント」も「紀伊山地」全体を一般化して書かれたもので、吉野に対する個別的な評価は含まれていなかった。そのため、両資料については、信仰や森林など吉野にも共通する記述内容を分析した。

UNESCO および ICOMOS の評価の視点をより明確にするため、日本の政府や推薦自治体の認識を示す資料（以下、「日本資料」と記す：登録推薦書、保存管理計画書）と UNESCO/ICOMOS の判断や決定を示した資料（以下、「UNESCO 資料」と記す：評価報告書、保全状況審査報告書、「顕著な普遍的価値のステートメント」）を対比させた。

4－３．日本と UNESCO/ICOMOS の評価の共通点、相違点

日本資料と UNESCO 資料は、修験道の聖地や山岳修行の拠点であることに加え、古代の自然崇拜、神道と仏教の融合、宗教建築史上の影響など多くの特色を挙げ、信仰の側面を強調している（表－３－１、表－３－２、表－３－３）。桜については名所であることに加え、文学、芸術、信仰と関わる象徴性を取り上げている（表－３－１、表－３－２、表－３－３）。

国史は、保存管理計画を除き記述がないか史実の言及にとどまり、国立公園指定で見られたような国家的に重要な歴史の舞台という積極的位置づけは両者ともしていないことが示された（表

が該当する（UNESCO World Heritage Center 2016）。

－ 3 － 1、表－ 3 － 2、表－ 3 － 3）。

日本資料と UNESCO 資料の共通点として、ともに信仰を中心に吉野を評価しているといえる。

日本資料と UNESCO 資料で異なる点を把握するため、森林の位置づけを検討した。

登録推薦書（2004）では、第 2 章 “Justification for Inscription”（登録事由）に紀伊山地の森林についての説明が見られる。“Justification for Inscription”は、a. Statement of significance（重要性の陳述）、b. Comparative analysis（他地域との比較分析）、c. Authenticity（遺産の真正性）、d. Criteria under which inscription is proposed（世界遺産に求められる Outstanding Universal Value（顕著な普遍的価値）を証明する 10 の評価基準のうち該当するものとその理由を示す）と節が続く。森林に関する記述は、c. Authenticity の 2) Authenticity and integrity concerning the cultural landscapes（文化的景観に関する真正性と完全性）の末尾、Integrity（完全性：遺産を構成する要素が全て十分に整っていることを示す）に関する文脈で登場する。林業が、紀伊山地で長い歴史に亘り続いてきた地域の重要な産業で、巡礼路や川に沿った森林の大部分が人工林であることや、植林地を信仰の山である紀伊山地の文化的景観に不可欠なものと位置づける記述が見られた（Government of Japan 2004, 16）（表－ 3 － 1）。

保存管理計画書（2005）は、包括的計画と奈良県版計画に分かれている。包括的保存管理計画では、森林は完全な自然林ではなく人工林からも構成されること（世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」三県協議会 2005, 9, 10, 12）を述べるほか、林業地を林業活動によって成立した文化的景観と捉える（世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」三県協議会 2005, 10）。奈良県版保存管理計画でも、古くから地域の主要産業として林業が発達し、スギ、ヒノキの木材産地として広く知られてきたことを説明している（奈良県 2005, 10）（表－ 3 － 3）。

登録推薦書において、a. Statement of significance や c. Authenticity、d. Criteria と異なり、Integrity は日本の行政が考える遺産の価値を直接示した内容ではない。保存管理計画における人工林の記述も、構成資産を構成する諸要素の一つとして（世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」

三県協議会 2005, 9, 10, 12) あるいは構成資産の人文的環境として(奈良県 2005, 10) 言及されるのみで、構成資産そのものとして扱われているわけではない。しかし、少なくとも日本資料は、世界遺産登録対象地域や巡礼路沿道に人工林が多いことを事実として明記し、森林を社会経済と関連付けて捉えている。

一方、ICOMOS 評価報告書(2004 年)では、森林を世界遺産「紀伊山地」全体の評価に結びつけている。

評価報告書の冒頭、推薦地の簡潔な概要を記した **Brief Description** は、「紀伊山地の非常に深い森林の中に、巡礼路で結ばれた三つの聖地がある」との文章から始まり、「この聖地・道とそれらを取り巻く森林景観は、永続的かつ極めて優れた記録が残された、過去 1200 年間に及ぶ信仰の山の伝統を反映している」と記述している(UNESCO World Heritage Center 2004, 34)。森林・聖地・巡礼路を一体のものとして捉え、聖地と巡礼路を森林が取り巻いているのが、紀伊山地の「信仰の山」の景観であるとみなしているといえる。

構成資産を紹介する第 2 章 **Property** の冒頭、**Description** (概要説明)では、推薦地は以下の文化的資質から成るとして、最初に **The forested mountains** (森林に覆われた山々)を挙げ、その後吉野・大峰、熊野、高野山の三聖地と巡礼路などが挙げられている。続いて各項目について説明がなされ、**The forested mountains** については、「森林に覆われた山々は、対象地の山々の美と驚嘆であり、遺産全体の重要性を支えるもの(UNESCO World Heritage Center 2004, 34)」と述べられる。評価報告書の最終章、**ICOMOS Recommendations** (ICOMOS による指摘)では、「登録推薦案件全体が、森林に覆われた山岳景観に支えられている。これは推薦書では説明や分析がなされておらず、またその(森林および山岳の(筆者補))保全管理も(推薦書で(筆者補))全く詳細に取り上げられていない。(UNESCO World Heritage Center 2004, 40)」と述べられる。以上から、世界遺産登録対象地全体の価値においてきわめて重要なものとして、森林に覆われた山岳景観を高く評価していることがわかる(表-3-2 「全体的特徴」参照)。

同評価報告書は、前述したように、第 2 章 **Property** で紀伊山地の文化的資質の筆頭に三聖地や巡礼路よりも先に **The forested mountains** を挙げ、「推薦書は、山々を覆う森林や、推薦地域内各地の森の異なる分布やデータについて詳述していない（原文：The nomination does not describe in detail the mountains or their forest cover or the differing patterns and profiles of the woods in various parts of the site.）」との指摘も行っている（UNESCO World Heritage Center 2004, 34）。さらに、推薦書に登場した森林や樹木として、吉野山の桜から熊野速玉大社のナギ、那智の原始林、高野山の巨木、大峯奥駈道の一部の沿道に見られるシラビソの天然林、オオヤマレンゲ、玉置山の古代杉、海岸沿いの巡礼路沿道のマツの防風林まで列挙している。

ICOMOS 評価報告書は、推薦国政府が提出した登録推薦書を審査して作成されるが、日本からの推薦書では、紀伊山地の自然が古くから信仰を生んできたことは述べているものの、森林だけでなく単独の木や岩、川、滝なども信仰の対象として挙げており、森林だけを強調しているわけではない（Government of Japan 2004, 5）。評価報告書には、森林や植生への強い関心が示されており、文化財保護の専門機関である ICOMOS としては異例といえる。この要因については推察にとどまるが、当初、日本からの推薦書では本遺産のタイトルは ” Sacred Sites and Pilgrimage Routes in the Kii Mountain Range, and the Cultural Landscapes that Surround Them”であり、霊場、参詣道に加えそれらを取り巻く景観が強調されていた（Government of Japan 2004）。本遺産が文化的景観として推薦されたこともあり、ICOMOS の評価者が特に「景観」を意識して、社寺や巡礼路の周辺環境に目を向けていたことが考えられる。

さらに「自然的要素は信仰・精神性の文化的価値と強く結びついていることから、推薦地域、とりわけ巡礼路を取り巻く狭い回廊状の一角が林業管理の観点から持続可能であることが不可欠（UNESCO World Heritage Center 2004, 40）」と、自然と信仰の結びつきを意識した記述もあり、自然的要素の代表として森林の神聖性に注目していると考えられる。また、森林によって囲まれている巡礼路を持続させていくことを重視している（表－3－2）。

表－３－１．「紀伊山地の霊場と参詣道」登録推薦書における吉野に関する記述（世界遺産登録時）

	資料	評価主体	全体的特徴	桜	人工林	国史	信仰
2004	登録推薦書	日本	<p>・霊場「吉野・大峯」として、信仰に関する記述が多くを占める。</p>	<p>・修験道にちなむ桜の山の縁起、日本人の美意識を示す点で花や吉野が古来象徴的だったこと、多くの和歌や絵画などに描かれてきたことを説明する。 Surrounding them are vast stretches of cherry trees, which were planted after the legend that En no Gyôja carved the principal object of worship out of a cherry tree; since the 10th century, this place has been a symbolic place famous for the beauty of cherry blossoms, typically illustrating the esthetic value of the Japanese people. Written in many Waka poems and drawn in many pictures, it has been a typical cultural landscape associated with religious and artistic activities. (Government of Japan 2004, 22)。</p> <p>・生物種としての評価は明確でない。</p>	<p>・林業は、紀伊山地で長い歴史に亘り続いてきた地域の重要な産業で、巡礼路や川に沿った森林の大部分が人工林である。 On the other hand, the Kii Mountain Range has a history of active forestry-industry production, which has nurtured Japanese cedar trees and cypress trees covering a large extent of the existing forests extending along the pilgrimage routes and rivers. The said forestry industry that has been sustained for a long period of time is one of the important local industries supporting the sacred mountains economically. (Government of Japan 2004, 16) 。</p> <p>・植林地を信仰の山である紀伊山地の文化的景観に不可欠なものとして位置づける。 In addition, the landscapes of those plantations are the essential components of the cultural landscapes of the sacred mountains along with the pilgrimage routes and rivers. (Government of Japan 2004, 16)</p>	<p>・登録対象地の概要説明では、修験道信仰の中心、桜の名地、文学や芸術との関連の三つの側面から吉野山が語られ、国史との関係性は言及されない。 “Yoshino”, located to the south of the Nara Basin, where the capital city of Japan was seated from the 7th to the 8th century, had been since ancient times the object of mountain worship. Later as the Shugen sect of ascetic Buddhism became more and more active and influential, this region became the most important sacred place associated with En no Gyôja (7th c. to 8th c.), who is believed by some to be the founder of Shugendô. There remain many monuments and sites related to Shinto and Shugendô still today. (Government of Japan 2004, 21) 。</p> <p>Yoshinoyama is a mountainous area which is located at the northern end of the Ômine Mountain Range. Along its ridgeline extending over 7 km in length there are Shinto shrines, temples of the Shugen sect of Buddhism, shops and hospices for the accommodation of pilgrims. Surrounding them are vast stretches of cherry trees, which were planted after the legend that En no Gyôja carved the principal object of worship out of a cherry tree; since the 10th century, this place has been a symbolic place famous for the beauty of cherry blossoms, typically illustrating the esthetic value of the Japanese people. Written in many Waka poems and drawn in many pictures, it has been a typical cultural landscape associated with religious and artistic activities. (Government of Japan 2004, 22)</p> <p>・古代の吉野山に対する都での一般的な崇敬は取り上げつつ、天皇行幸には触れていない From the descriptions of prehistoric periods in the “Kojiki” (Japan Record of Ancient Matters) and the “Nihon Shoki” (Chronicle of Japan), which were compiled by the ancient government of Japan in the 8th century, it is indicated that the gods of Yoshinoyama and Kumano were not simply the land gods revered by local people but were also gods which were getting attention from the people living in the ancient capital city, which can be considered to have been the very beginning of the consecration of these areas. For instance, legend tells that Yoshinoyama is the dwelling place of the deity controlling the supply of water, which is essential to rice fields, for the ancient capital area or the deity controlling precious minerals such as gold ore, (Government of Japan 2004, 48)</p> <p>On the other hand, festivals and rites dedicated to gods were continuously observed; for instance, in 698 the national government made prayers for rain to the god of Yoshinoyama and (Government of Japan 2004, 49)</p> <p>・南朝設立の史実と社寺や文化財が戦乱に巻き込まれたことに言及はあるが、後醍醐天皇の名前は登場しない。 In particular, in the period from 1336 to 1392, when two Emperors stood in competition for legitimacy, Yoshinoyama was chosen as the seat of the “Southern” Imperial Court and was therefore</p>	<p>・修験道成立以前の古代吉野の山岳信仰について詳述する。山岳修行拠点としての吉野・大峯の発展、全国的な影響力を強調する。</p> <p>“Yoshino and Ômine”, located in the northernmost part of the Kii Mountain Range, is accordingly the northernmost site among the three sacred sites. This sacred site includes two core areas: the “Yoshino” area and the “Ômine” area. In the Yoshino area, the Kimpû mountains which were believed to be controlling the water supply and were therefore closely associated with agricultural activities, and which produced gold and other minerals were revered as the major objects of worship. On the other hand, the Ômine area, which is located to the south of the Yoshino area, has developed as a primary stage for mountain ascetic practices. This sacred site continued to expand in importance as the central place of Shugen ascetic practices until the mid-10th century, and the reputation of “Yoshino and Ômine” as one of the most sacred mountains in Japan reached as far as China. Many people came to visit this area from various places around Japan to undertake ascetic practices, and in an attempt to reproduce “Yoshino and Ômine”, similar sacred mountain sites were developed in other places around Japan. (Government of Japan 2004, 6-7)</p>

						attacked by the opposing group. Many shrines and temples in the sacred sites suffered from the flames of war. (Government of Japan 2004, 55)	
--	--	--	--	--	--	--	--

表－３－２．「紀伊山地の霊場と参詣道」 ICOMOS 評価報告書における吉野に関する記述（世界遺産登録時）

	資料	評価主体	全体的特徴	桜	人工林	国史	信仰
2004	ICOMOS 評価報告書	UNESCO/ICOMOS	<p>・森林・聖地・巡礼路を一体のものとして捉え、紀伊山地の「信仰の山」の景観であるとみなす。 Set in dense forests in the Kii Mountains overlooking the Pacific Ocean, three sacred sites, Yoshino and Omine, Kumano Sanzan, and Koyasan, linked by pilgrimage routes... (UNESCO World Heritage Center 2004, 34)</p> <p>Together, the sites and the forest landscape that surrounds them reflect a persistent and extraordinarily well documented tradition of sacred mountains over the past 1200 years. (UNESCO World Heritage Center 2004, 34)</p> <p>・「信仰の山」である紀伊山地の価値において森林に覆われた山岳景観がきわめて重要とする。 The forested mountains underpin the significances of the whole site, for it is the beauty and drama of the mountains and their contrast with the seascape to the south, which has attracted people for at least 2000 years. (UNESCO World Heritage Center 2004, 34)</p> <p>・森林を中心とした自然と信仰の結びつきを強調する。 The whole nomination is underpinned by the wooded mountain landscape. This is not described or analysed in the dossier nor is its management dealt with in any detail. It is essential that the nominated areas are sustainable from a forestry management points of view – particularly the narrow corridors surrounding the pilgrims' routes, as the 'natural' elements of the site are strongly associated with the cultural values of spirituality (UNESCO World Heritage Center 2004, 40)</p>	<p>・文学や絵画への影響を「紀伊山地」の特色の一つとし、特に和歌などに多く描かれてきた吉野山の桜を挙げる。 Although only mentioned briefly in the dossier, it is clear that the Kii Mountain sacred landscape provided inspiration for many artists and poets. The groves of cherry trees, for instance, surrounding temples in Yoshinoyama, part of the Yoshino and Omine site, were written into Waku poems and drawn by many artists. (UNESCO World Heritage Center 2004, 37)</p> <p>・古代から信仰のために植えられてきたことや神仏に花を供える儀式での重要性など、桜と信仰との結びつきに注目する Vast stretches of cheery trees, planted and revered since the 10th century in Yoshinoyama, and around Kimpusen-ji Hondo where they form part of an annual ritual in April when cherry blossoms are offered to the deity (UNESCO World Heritage Center 2004, 34)</p>	<p>・「紀伊山地」で歴史的に林業が営まれてきたことや林業地の森林景観について言及はない。</p>	<p>・登録対象地の歴史は登録推薦書の記述を簡略化して掲載。 ・吉野の南朝や古代の天皇行幸への言及はない。</p> <p>From the 3rd to the 2nd century BC, when rice culture was introduced into Japan and settlements began to develop in the lowlands, the Shinto religion, in which natural features such as mountains, forests, rocks and trees were revered as gods, came to be embraced – perhaps as a link to ancient dwelling sites in the hills. The mountain gods were thought to control water, essential for rice growing in the plains, and gold ore, needed as towns developed. It was also believed that the god who guided the first Emperor to build Nara the first capital resided in the mountains. Thus the Shinto religion came to be influential not only in rural areas but also in the towns as they were formed (UNESCO World Heritage Center 2004, 37)</p> <p>The Kii Mountain sites were thus established by the end of the 12th century as the main sacred mountain site in Japan, and attained a status which would persist to the present day. At the end of the 12th century the government was moved to Kamkura –although the ruling family remained in Kyoto. From the 14th to the 16th century conflict between Imperial factions, the grip on power by the samurai and battles between feudal lords meant a weakening of Imperial and centralised authority, but at the same time the growth of a monetary economy and improved methods of production led to a new rich class. Pilgrimages were now extended to anyone who could afford the journey. (UNESCO World Heritage Center 2004, 37)</p>	<p>・古代から神道の自然崇拝の対象だったこと、神道と仏教の融合が見られること、山岳信仰の中心、巡礼の拠点であること、独特な建築が日本の宗教建築に与えた影響などから吉野を評価する。</p> <p>The Yoshino or northern part of the site was by the mid 10th century known as the most important sacred mountain in Japan and its reputation had reached China. It was the object of mountain worship, Shinto, in the 7th and 8th centuries and later in the 8th century became one of the prime sacred places for the Shugen sect of ascetic Buddhism. Omine, the southern part, was also associated with the Shugen sect and, in particular, with ascetic practices connected to the harsh mountain environment. This site consists of groups of buildings in what is said to be a unique architectural style constructed, as an embodiment of Shinto-Buddhist religious fusion. (UNESCO World Heritage Center 2004, 35)</p> <p>Justification by the State Party (summary) The site is put forward for its outstanding universal value related to the way the Kii Mountain Range: ・ Has nurtured the spirit of nature worship since ancient times ・ Is the central place for Buddhist ascetic practices ・ Developed a unique Shinto-Buddhist syncretism ・ Is associated with the Buddhist idea of the Pure Land ・ Developed three main shrine sites which became the key mountain sites in Japan ・ Influenced the development of shrine and temple building throughout Japan ・ Houses important and extensive pilgrim routes which are part of religious practices (UNESCO World Heritage Center 2004, 38)</p>

表－３－３．「紀伊山地の霊場と参詣道」保存管理計画書、ICOMOS 保全状況審査報告書、顕著な普遍的価値のステートメントにおける吉野に関する記述（世界遺産登録後）

年	資料	評価主体	全体的特徴	桜	人工林	国史	信仰
2005	保存管理計画書	日本	<ul style="list-style-type: none"> ・吉野および大峰山脈地域の特色について、社会経済的側面も含めて網羅的に記述する。 ・吉野は第一に修験道の中心として評価される（奈良県 2005, 10）。 ・世界遺産「紀伊山地」の全体像を霊場と参詣道から構成されるものと捉える（世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」三県協議会 2005, 1）。 ・森林は文化的景観の一要素とはするが、世界遺産の代表的特色として特に強調はしない（世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」三県協議会 2005, 1）。 	<ul style="list-style-type: none"> ・卓越した桜の山の景観で名所とされ歴史が古いこと（奈良県 2005, 4）、一面に植えられた桜の起源は役行者や蔵王権現に由来すること（奈良県 2005, 21）、多くの歌人、俳人に詠まれてきた（奈良県 2005, 21）ことを紹介する。 ・桜の品種、樹数の説明（奈良県 2005, 4）がある。 ・風景、生物学、修験道信仰との関係、芸術の題材と多面的に吉野山の桜を評価する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・森林は完全な自然林ではなく人工林からも構成されること（世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」三県協議会 2005, 9, 10, 12）、古くから地域の主要産業として林業が発達し、スギ、ヒノキの木材産地として広く知られてきたことを説明し（奈良県 2005, 10）、森林に社会経済的な機能を見ている。 ・林業地を林業活動によって成立した文化的景観と捉える（世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」三県協議会 2005, 10）。 	<ul style="list-style-type: none"> ・古代天皇の行幸や後醍醐天皇及び南朝との結びつき、源平争乱期の政治介入など、国の歴史と吉野の関わりの深さを述べる（奈良県 2005, 4, 8）。 	<ul style="list-style-type: none"> ・古代から山岳信仰の対象だったこと（世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」三県協議会 2005, 1, 奈良県 2005, 8）に加え、今日に至っても大峰山脈での修行が続けられ大峯奥駈道が使われ続けているなど、山岳信仰の営みの継続性を強調する（奈良県, 2005 : 8, 10,15）。
2006	ICOMOS 保全状況審査報告書	UNESCO/ICOMOS	<ul style="list-style-type: none"> ・管理面を中心とする。 ・自然的要素に宗教的な神聖性を見る。 It also stresses the need to consider appropriate management of natural elements that produce an ‘awe-inspiring atmosphere’（UNESCO World Heritage Center 2006, 170） 	記述なし。	人工林や林業に関する記述なし。	記述なし。	
2013	顕著な普遍的価値のステートメント	UNESCO/ICOMOS	<ul style="list-style-type: none"> ・深い森林の中に霊場や巡礼路が存在しているという描写が、世界遺産の全体像として繰り返し登場する。 Set in the dense forests of the Kii Mountains on a peninsula in the southernmost part of mainland Japan, overlooking the Pacific Ocean, three sacred sites – Yoshino and Omine, Kumano Sanzan, and Koyasan – are linked by pilgrimage routes to the ancient capital cities of Nara and Kyoto. (UNESCO World Heritage Center 2013, 119) The sacred sites are connected by 307 km of pilgrimage routes which cover a total area of 495.3ha. With the surrounding forest landscape, they reflect a persistent and extraordinarily well-documented tradition of sacred mountains maintained over 1,200 years.(UNESCO World Heritage Center 2013, 119) The property consists of three sacred sites including precincts and buildings of temples and shrines in the heavily forested Kii Mountains, and a complex pattern of tracks and paths that link the sites together. (UNESCO World Heritage Center 2013, 119) ・森林以外は全て信仰に関わる特色が描かれる。 	記述なし。	人工林や林業に関する記述なし。	記述なし。	<ul style="list-style-type: none"> ・神道と仏教の融合が文化的景観に見られる点、修験道の存在、社寺建築の他地域への影響を評価する。 Together these sites, the connecting pilgrimage routes, and surrounding forests form a cultural landscape that reflect the fusion of Shintoism, rooted in the ancient tradition of nature worship in Japan, and Buddhism, which was introduced from China and the Korean Peninsula.(UNESCO World Heritage Center 2013, 119) These component parts are essential for demonstrating the religious framework of Shintoism (rooted in the ancient tradition of nature worship in Japan), Buddhism (introduced to Japan from China and the Korean Peninsula), and Shugen-dô (the Shugen sect) which was influenced by the former two faiths.(UNESCO World Heritage Center 2013, 119) The Kii Mountains have become the setting for the creation of unique forms of shrine and temple buildings which have had a profound influence on the building of temples and shrines elsewhere in Japan. (UNESCO World Heritage Center 2013, 119) ・無形の信仰活動（山岳修行での霊場や巡礼路の利用、祭礼、慣行）が継続していることを真正性との関係で評価する。 At the three sacred sites, various religious rituals and practices mainly related to Shintoism, Buddhism, and Shugen-dô have been continually carried out. Such activities are still underway even now, and thus a high level of spiritual authenticity is maintained.(UNESCO World Heritage Center 2013, 119-120) The sacred sites and pilgrimage routes have attracted worshippers since the 11th or 12th centuries and have thus retained a high degree of authenticity of function.(UNESCO World Heritage Center 2013, 120)

ICOMOS 保全状況審査報告書（2006 年）では、管理面が主で価値評価に関わる記述は少ないながら、「自然的要素」は聖なる山の「畏敬の念を抱かせる雰囲気」を創り出すものであり、適切に管理する必要があるとされる。ここでも自然的要素である山の宗教的な神聖性を強調している（UNESCO World Heritage Center 2006, 170）（表－3－3）。顕著な普遍的価値のステートメント（UNESCO World Heritage Center 2013, 119-120）でも、世界遺産の全体像として、紀伊山地の深い森林の中に霊場や巡礼路が存在しているとの描写が繰り返し登場し、本遺産の環境の特色として山および森林が前面に出されている。森林以外は、修験道に加え、神道と仏教の融合、社寺建築の他地域への影響、無形の伝統の継続など全て信仰に関わる特色を挙げている（表－3－3）。

UNESCO 資料は、人工林の存在や伝統的に林業地であることさえ言及しない一方で、世界遺産「紀伊山地」の「信仰の山の文化的景観」の中心的価値として森林を重視し、その神聖性を強調していた（表－4）。また、「森林に囲まれた巡礼路」を重視していた。

表－4. 世界遺産登録における吉野に対する評価

	年	資料	評価 主体	資産		情報		
				桜	森林	国史	信仰	産業
世界遺産 登録時	2004	登録推薦書	日本	○	事実の言及		◎	事実の言及
	2004	ICOMOS 評価報告書	UNESCO/ ICOMOS	○	◎		◎	
世界遺産 登録後	2005	保存管理計画書	日本	○	事実の言及	○	◎	事実の言及
	2006	ICOMOS 保全状況審査報告書	UNESCO/ ICOMOS		◎			
	2013	顕著な普遍的価値のステートメント	UNESCO/ ICOMOS		◎		◎	

注) ○：肯定的な評価、◎：特に高い評価や強調

4－4. 世界遺産としての管理方針

2005 年刊行の奈良県版保存管理計画から、「紀伊山地の霊場と参詣道」における吉野山周辺の構成資産の保存管理方針を把握した（史料－10）（奈良県 2005）。

大峯奥駈道については、道幅の維持など道の物理的保護が保存管理の中心である。その上

で、道で行われる宗教活動（修験）との調整や、沿道に多い林業地の土地所有者や林業経営者との十分な調整が重要だとしている。

社寺関連遺跡については、建造物や構造物の厳密な物理的保護が中心となっている。同時に、現状変更の際、入念に学術調査を行うことや境内で行われる宗教活動に対する配慮を重視している。

吉野山については、歴史上、学術上、芸術上、観賞上の価値の維持を第一に挙げ、それに当たり地域のステークホルダーとの連携が必要であると強調している。加えて、桜の保存管理を訴えている。林業者を含む地域のステークホルダーとの調整は強調されているが、人工林の美的、景観的価値の保全は取り上げられていない。

4－5．結果

吉野を含む「紀伊山地」に対する UNESCO/ICOMOS による評価は信仰と森林景観に重きを置き、特に森林を重視しその神聖性を強調するものだった。

吉野の森林は大半が植林地であり、地域においては、信仰ではなく産業（林業）と強く結びついていた。UNESCO/ICOMOS 評価では、森林を成立させてきた産業（林業）という情報は認識されず、神聖な森林という資産としてのみ取り上げられ、本来直接関係しない信仰という情報との結びつきが強調されていたことが本論から明らかになった。つまり、吉野・大峯奥駈道を利用していた修験道および周辺の森林景観を成り立たせた情報が正しく理解されず、森林（資産）と林業（情報）の関係性が捉えられていなかった（表－5）。

表－5． UNESCO/ICOMOS 評価と資産・情報の関係性

資産	情報 関係・評価	国史	信仰	産業
桜	地域における実際の関係		○	
	UNESCO/ICOMOS の評価		○	
森林	地域における実際の関係			○
	UNESCO/ICOMOS の評価		○	

5. 吉野をめぐる政策および空間の変化

第3章から、国立公園指定では国史との関連性が評価されて吉野が指定を受け、第4章から、世界遺産登録では UNESCO/ICOMOS が信仰を中心に吉野を評価し、森林に神聖性を見出していたことを示した。本章では、これらの評価が成立した背景を明らかにするため、国立公園指定以前から世界遺産登録に至るまでの吉野をめぐる国立公園政策その他諸政策の変化、および空間的状況の変化を考察する。

5-1. 国立公園政策

5-1-1. 目的および方法

本節では、第3章に関連し、吉野の国立公園指定に至る 1920 年代から 1930 年代の、国立公園制度導入に向けた国の動きの思想的背景を先行研究から確認した（5-1-2）。第4章に関連し、吉野指定後の国立公園行政全般の特徴を先行研究から整理し（5-1-3）、さらに国立公園としての吉野における風景評価の変遷を、国立公園管理行政が発行した資料に基づき検討した（5-1-4）。

5-1-2. 国立公園制度の導入

戦前の大正末期から昭和初期に行われた、日本初の国立公園指定の過程や背景を追った研究が蓄積されている。これらの研究から国立公園の選定・指定に際して採られた考え方に関する知見を把握した。

村串（2012）に基づけば、大正期における田村や内務省衛生局、田村の恩師で国立公園委員会に参画していた造園学者・本多静六は、国立公園とは国土を代表する大風景地、大自然であることをその本質と考えていた。国民や外国人客のための自然公園として構想し（村串 2012, 36）、観光、レクリエーションなど利用の側面を強調していた（村串 2012, 30-31, 48, 52）。また、それは「全国に系統的に配置されるべき天然公園のうち大規模なもの（水谷 2014-1, 70）」でもあった。

水谷は、田村剛の国立公園に対する以上のような考え方が 1921（大正 10）年 8 月頃に固

まったとする。さらにそこには以下のような条件が意識されていた。

- ①日本の風景は海よりも山によって代表される。
- ②山中の温泉と湖水が公園の二大要素であり、ホテルや別荘地、各種運動場の設置に必要な平坦地も必要とする。
- ③配置や規模、位置について、比較的小面積のものを全国に多数分布する方が有効である。
- ④真に日本を代表する風景が見出されるべきで、伝統的風景地とは必ずしも一致しない。
- ⑤高標高の地

(1921 (大正 10) 年 9 月上中旬 東京朝日新聞掲載「国立公園論」)(水谷 2014-1, 70-73 掲載のものを要約。)

山岳を重視していること、伝統的な風景地を必ずしも評価していないことがわかる。

田中(1981)や水谷(2014-1)によれば、田村剛や内務省衛生局、国立公園委員会に参加した識者が挙げた国立公園の候補地は、当初、海や湖、伝統的な名所(榛名山、赤城山、妙義山、戸隠山、信州御嶽山、松島、琵琶湖、諏訪湖、浜名湖等)(田中 1981, 213-216)、日本アルプス、十和田湖など新しい風景地が入り混ざっていた(水谷 2014-1, 73)。しかし、その後現地調査が進み候補地が絞り込まれ(水谷 2014-1, 73)、1921 (大正 10) 年頃に海や湖、伝統的風景が脱落し、原始的なスケールの大きい大自然、特に山岳風景が中心となり(田中 1981, 213-216)、田村剛の国立公園観が固まった(水谷 2014-1, 70-73)。吉野を含まない 16 ヶ所の国立公園候補の調査地が決定されたのが 1922 年だったが、その頃内務省の国立公園当局は以上のような思想的状況にあったといえる。

西田(2011)は、このような国立公園指定の過程に伝統的風景観から近代的風景観への変遷を見る(西田 2011, 217)。近代には名所旧跡、信仰の風景、伝説の風景、歌枕の風景など意味の風景が捨象され、美しい視覚の風景が最も重要となった。海洋景から山岳景、近景から遠景、微視的な風景の捉え方から巨視的な風景の捉え方への移行でもあった(西田 2011, 220)。

以上から、大正末期から昭和期にかけて日本で初めて行われた国立公園の指定では、伝統的な日本の風景観から離れ、主にレクリエーション利用のための大スケールの自然風景、とりわけ山岳風景を貴重とする思想があった。

5-1-3. 国立公園行政の特徴

昭和期の12ヶ所の国立公園指定後の、国立公園に対する国の姿勢を検討する。

1957年に自然公園法が制定されるが、それまでの時期には、保守党政府の展開した社会経済政策において経済自立と産業復興が最優先され、国立公園でも産業開発、中でも水力発電所建設計画を含む電源開発政策が数々浮上し、それに対する激しい反対運動、自然保護運動が進んだ（村串 2016, 34）。

自然公園法制定(1957年)以降の高度経済成長期、政府は経済成長の基本戦略の一つとして観光開発を位置づけ、国立公園における観光道路建設が推進された。生活水準の向上を受けた観光ブームも合わせ、各地の国立公園内で過剰利用、乱開発と自然破壊が問題化し、反動として環境保全、自然保護が活発化していった。（村串 2016, 35, 37-39, 42）

吉野熊野国立公園内でも、北山川電源開発計画に対する反対運動（村串 2011, 306-334）および大台ヶ原観光有料道路「大台ヶ原ドライブウェイ」の建設計画への反対運動という、産業と自然保護の対立が見られた。なお、大台ヶ原については、この時の開発反対運動の帰結として、原生林の一部が後、「西大台利用調整地区」となるに至っている。（村串 2016, 412-422）

自然保護・環境保全運動の激化、さらには1960年代の公害反対運動を受けて法制度上の対応が求められ、公害対策基本法の制定(1967)、自然公園法の改正(1969)、環境庁の設置(1971)が行われ、自然公園行政は環境庁自然保護局のもとで行われることになった。（村串 2016, 48）

以下では、具体的な政策として、昭和期の指定以後に進められた国立公園の新規指定・拡

張、および計画の方向性を検討する。

戦後に行われた国立公園指定には以下、いくつかの特徴が見られた。第一に、戦前に 12 の国立公園が設置された際には日光のような伝統的な名所や中部山岳のような自然の大風景地が対象となったが、1950 年代以降海岸の自然景観への評価も高まった。(武内・渡辺 2014, 13)

第二に、前述したように高度経済成長期に自然破壊が社会的な問題となり、生態系の保護への要請が高まったことが反映された(武内・渡辺 2014, 14)。従来の地形を重視した自然公園選定要領が 1971 年に改定され、景観要素に動植物などが追加されたことに加え、法制度の面からも保護規制が強化された(武内・渡辺 2014, 26)。国立公園の新規指定または大規模な拡張において、以前は「原始的な景観」や「すぐれた景観」など、特に地形を基盤とした風景的側面に高い価値が置かれていたが、希少で固有の「動植物」や「生態系」に重心が置かれるようになった(武内・渡辺 2014, 26)。知床(1964 年指定)、小笠原諸島(1972 年指定)、釧路湿原(1987 年指定)などがその例である。

1992 年に生物多様性の保全と持続可能な利用を目指す初めての国際的な枠組みである、生物の多様性に関する条約が締結され、翌年日本も批准した。この国際的潮流の影響を受けたと考えられるが、2000 年代には、国立公園は「生物多様性」に積極的な役割を果たすべきとの要請を受けて、自然公園法に生物多様性確保の視点が組み込まれた(武内・渡辺 2014, 26)。2010 年には、生物多様性条約第 10 回締約国会議(COP10)が日本で開催され、愛知目標の採択と名古屋議定書の合意に至った。COP10 に向けて環境省が全国の国立・国定公園を対象に主に生物多様性の観点から総点検を行うなど(武内・渡辺 2014, 39-40)、国立公園行政において生物多様性保全を重視する傾向がいつそう高まった。尾瀬国立公園(2007 年)、やんばる国立公園(2016 年)、奄美群島国立公園(2017 年)が指定されたのは、これを顕著に示すものである。

また、国立公園の計画の背景にあった思想について、堀によれば、戦前は、風景保護を主

とし、レクリエーション等での利用にも配慮していたが、戦後次第に利用の観点が薄れ、環境保全的な自然保護の思想が現れる。やがて、完全に自然保護型の国立公園が目指されるようになり、風景保護や利用の観点は計画の中心ではなくなっていくという。(堀 1995)

以上より、戦後、国立公園における産業・観光開発と観光的利用が激化し、その反動で自然環境保護への意識が社会的に高まっていった。社会の注目を集めた自然保護運動を通じて、観光利用推進から自然保護的な政策が中心となるなど、国立公園行政の理念が転換していった。国立公園指定における評価や計画思想も、地形を重視した大自然の風景地から「生態系」へ、続いて主に 2000 年代以降は「生物多様性」へと、また風景保護と利用促進から自然環境保護を重視したものへと変化していった。

5-1-4. 国立公園としての吉野における風景評価の変遷

本節では、吉野における国立公園管理行政の風景評価を示す記述を、環境省や国立国会図書館から資料を入手して収集し、変遷を把握した。主な資料は、吉野熊野国立公園指定書及び公園計画書（1988 年版）、同国立公園吉野地域吉野山管理計画区 of 管理計画書（1990 年版、2001 年版）である。これらの資料は作成年代が近く点数も限られており、国立公園指定の 1936 年以降現在までの風景評価を継続的に把握するには、より広範に資料を収集する必要がある。そのため、以下のように、一般向けのものも含めて、厚生省や環境省等国立公園当局および外郭団体が発行した資料を収集した上で、本論文で定義する吉野について記述のあった記事を抽出した。

①1936 年以降の内務省、厚生省、環境庁、環境省の刊行物で国立公園としての吉野を扱ったもの。

②雑誌『国立公園』1945 年以降刊行分より吉野熊野国立公園の吉野に関する記事。

③国立国会図書館東京本館所蔵、あるいは国立国会図書館データベースで公開されている、1945 年以降に刊行された書籍及び雑誌記事で、タイトルに「国立公園」を含み、著

編者が国立公園関係の公式書籍の出版を行ってきた国立公園協会であるもの。

表－6 吉野における国立公園の風景評価を示す資料

資料 種 別	年	資料
国立公園管理行政による刊行物		
①	1951	厚生省大臣官房国立公園部編：国立公園日本観光特選：全国身体障害者福祉協議会
	1952	厚生省国立公園部監修、国立公園協会著：国立公園のはなし、「第十七話 吉野熊野」
	1964	厚生省国立公園局：日本の国立公園：三和銀行
	1988	環境庁：吉野熊野国立公園指定書 昭和 63 年
	1988	環境庁：吉野熊野国立公園公園計画書 昭和 63 年
	1990	環境省：吉野熊野国立公園 平成 2 年管理計画
	2001	環境省：吉野熊野国立公園 平成 13 年管理計画
	2015	環境省自然環境局：日本の国立公園（パンフレット、地図）
一般向け書籍		
② ③	1951	国立公園協会：日本の国立公園、「吉野熊野国立公園」
	1952	国立公園協会：国立公園写真集 国立公園法制定 20 周年記念：朋文堂 ¹
	1953	国立公園協会：国立公園シリーズ 10 吉野熊野国立公園：朋文堂
	1956	国立公園協会：国立公園写真読本：東都書房、「吉野熊野」
	1957	National Parks Association of Japan: National Parks of Japan: Tokyo News Service, “Yoshino Kumano National Park”
	1977	国立公園協会：画集美しき日本 代表洋画家が描く国立公園七十八景：実業之日本社、「44. 吉野連山」（218-219 頁）、「吉野熊野国立公園」
	1981	国立公園協会：日本の風景 自然公園 50 周年記念 国立公園写真集：ぎょうせい、「吉野熊野国立公園」
	1989	国立公園協会、日本自然保護協会：日本の自然公園：講談社、「吉野熊野国立公園」
	1991	鹿子木孟郎、林静一郎：国立公園絵画シリーズ（24）吉野連山（吉野熊野国立公園）：国立公園 494
	1995	国立公園協会：国立公園図鑑：大蔵省印刷局、吉野熊野国立公園
	1996	菅沼孝之：還暦を迎えた吉野熊野国立公園大台ヶ原（吉野熊野国立公園指定 60 周年）：国立公園 543
	2006	福井良盟：日本の心の源流（特集 吉野熊野国立公園指定七〇周年）：国立公園 642

注 1) 文章はなく吉野山の春および一目千本の桜の景観を映した写真のみの掲載。

結果、記述を収集した資料は管理計画書を含め 20 点となった（表－6）。厚生省、環境庁、環境省の国立公園管理行政による刊行物 8 点と一般書籍 12 点に区分し、桜、国史、信仰、人工林に対する各資料の評価の有無を確認した。記述が事実の言及のみにとどまる場合には○、積極的な評価がなされていると考えられる場合には◎を付した。前者と後者の区別は、表－7 太字部分のような積極的、肯定的な評価を含む形容詞、動詞、名詞の有無で判断した。（各資料の記述の要約は史料－18 を参照）

表－７ 吉野における国立公園の風景評価 記述分析例

	言及のみ	積極的評価
桜	桜と史跡の吉野山（環境省自然環境局 2015）	<p>・吉野山は、古くから桜の名所として知られ、毎年 4～5 月にかけてたくさんの桜が咲きほこり、多くの花見客で賑わう（国立公園協会 1995, 118）。</p> <p>・『これはこれとはばかり花の吉野山 貞室』吉野山五万本の桜は、ほとんど白山桜であって、桜は下、中、上、奥の千本の各処に群落的に多く、その山桜の花が、谷から谷へ、峰から峰へと、麓から山頂に向つて、順次二十余日に亘って開くので、この間連続して、桜花を觀賞することができます。吉野山の桜は、蔵王権現の神木として尊崇保護せられたので、今日のように、わが国屈指の桜の名所となり、桃山時代には、豊臣秀吉の吉野の花見が、豪華に行われて、吉野の桜を全国に響かせました。（国立公園協会 1953, 25）</p>
人工林	地域の産業としては林業が中心で、古くから「吉野杉」の産地として知られるが、近年は林道網の整備に伴い、奥地自然林の伐採・人工林化が急速に進んだことから、自然環境・環境保全等にも問題を生じている（環境省 2001, 1）。	吉野川一帯には（中略）この辺りの大部分は吉野林業の中心である吉野杉の人工造林地が多く、 人工森林美の極致 を示している。（国立公園協会 1951, 188）
国史	源義経や後醍醐天皇などにまつわる数多くの史跡が残っているほか（環境省 1990, 4）	後醍醐天皇の南朝の 哀史 や義経・静の 悲話 など多くの 歴史に彩られた地 （福井 2006, 12）
信仰	中央部には蔵王権現を祭る金峰山寺があり、周辺には吉野葛や漢方薬を売る店が軒を並べている（国立公園協会 1995, 118）。	修験道では大峯山（吉野から山上ヶ岳にわたる地域の霊場としての呼称）を 我国第一の霊峰 となし、各峯は夫々仏が鎮座する浄土と信ぜられている。（国立公園協会 1951, 191）

（１）国立公園管理行政による刊行物の記述傾向

昭和期から現在までの国立公園としての吉野に対する風景評価を明らかにするにあたり、国立公園指定当初の資料として、1936 年 2 月の国立公園指定に先立ち、1935 年の第 7 回国立公園委員会で内務省が提案した「吉野熊野国立公園区域」案の指定理由説明を検討した（史料－１５）。

国立公園区域に属する行政区域や面積の紹介がなされた後に、本公園の特徴として「山岳、河川、海岸に亘り多種多様の風景地を総合」しているとして、風景種別ごとに地域、名所の紹介がなされている。山岳・溪谷・海岸の風景の全てを含む多様性を強調している。さらに、「奇勝に富む大杉谷」「瀨八丁の勝景」「秀名なる熊野川」「豪快明朗なる本邦の代表的海岸風景」など形容詞を用いて、風景の雄大さが強調されている。

人工林に関しては、地元林業家からの反対で、吉野林業地を国立公園区域から除外した経緯を踏まえ、国立公園内の林業地は最小限にとどめ、林業の施業経営を優先する姿勢が明らかである（史料－15点線下線部）。

昭和期の指定以後、吉野の国立公園管理に関する資料として最古のものは、国立公文書館に現存している「吉野熊野国立公園保存地区計画案」（1940）と考えられる（史料－16）。吉野町一帯の保存地区の保存対象は「史蹟及著名建造物」とされ、保存方針は「公益上止ムを得ヌ場合ノ外現状ノ変更ヲ禁ズ」とある。桜や人工林は保存対象に含まれていない。ただし、他の保存地区の保存対象では原始林やオオヤマレンゲなど、国立公園内で史蹟名勝天然記念物に指定された箇所が挙げられ、いずれも保存方針は現状変更の禁止となっており、保存地区とは、公園区域の中でも人為を加えず厳格な保存を行うべき場所を特定したものだったと考えられる。したがって、本資料から風景評価の対象を明確に知ることは難しい。

第二次世界大戦を経、厚生省が発行した資料として、最初のものは厚生省大臣官房国立公園部編「国立公園日本観光特選」（1951）である。ページ全面に掲載された桜期の吉野山の写真に添えて「櫻の季節ともなれば、全山櫻花に包まれ、その美しさは他所にみられない景色である。一目千本、奥の千本などの名所はとくに人に知られ、吉野の歴史とともに櫻の地として有名である。」（44 頁）と述べる。表題にある通り観光を目的としているという資料の性格もあるが、名所として桜を高く評価している。また歴史の地としても認識している。

一方で、同じ厚生省国立公園部が監修した「国立公園のはなし」（1952）では、「吉野林業といってスギの造林がさかん」（85 頁）として吉野の人工林の存在に言及している。本資料も「吉野といえば桜」（85 頁）として名所としての桜を強調し、かつ修験道に由来して吉野の桜が増殖した背景も述べ（88-89 頁）、信仰において象徴的な存在として桜を取り上げている。

厚生省国立公園局が発行した「日本の国立公園」（1964）では、吉野山などが古くから修験道の中心となっていることに言及し（77 頁）、かつ大杉谷の「美しいスギ林」（77 頁）を

評価している。

厚生省が 1950 年代から 1960 年代に発行した資料は、共通して桜の名所であることに重きを置いてはいるものの、杉の人工林や修験道の拠点であること、歴史的な環境についても取り上げており、多面的な評価がなされているといえる。

1936 年の公園指定以降、吉野熊野国立公園では他の国立公園と同様に、新たな地区の追加や地種区分の指定が段階的に行われ、吉野山地区については 1970 年に特別地域に指定された（環境省：吉野熊野国立公園ホームページ）。

1971 年に環境庁が設置され、国立公園を管轄するようになるが、環境庁発行の国立公園関係資料で吉野について具体的な記述のあるものは限られていた。

1988 年に吉野熊野国立公園の公園区域の全般的な見直し（再検討）が行われ、環境庁によって指定書及び公園計画書が作成された。文書としては一体となっているが、前半が指定書、後半が公園計画書となっており、本論ではそれぞれを別の資料として取り扱った。

指定書は、第 1 章変更理由、第 2 章地域の概要、第 3 章公園区域から成る。「変更理由」は、社会情勢の変化、市街地化の進展など再検討に至った理由を述べ、「公園区域」は公園区域が変更された部分および変更後の公園区域全体を、市区町村名と面積の一覧で示している。指定書が評価する資産・情報を読み取れるのは、第 2 章の「地域の概要」である（環境庁 1988）。

「地域の概要」は、本公園を山岳（大峰山脈）、河川（熊野川、北山川）、熊野灘に臨む海岸、熊野信仰で守られてきた那智山などから成ると概略を述べた後に、（1）景観の特性（ア.地形・地質、イ.植生、ウ.野生動物、エ.自然現象、オ.人文その他の特殊景観）、（2）利用の現況、（3）社会経済的背景（ア.土地所有別、イ.人口及び産業、ウ.権利制限関係）の各節が続く（環境庁 1988）。

最初に吉野に関する記述が見られたのは、（1）イ. 植生である。「暖帯性常緑広葉樹林から亜高山帯性針葉樹林まで、各種の森林をみることができる。しかし、古くから吉野杉の産

地として知られる林業地帯であるこの地域では、スギ・ヒノキ等の植林が盛んで、特に近年は林道網の整備等により、かなり奥地まで人工林化が進んでいる。(環境庁 1988, 4-5)」と、林業が地域の産業で人工林が多いことに事実として言及はしているものの、植生保護の観点から肯定的には捉えていない。

(1) オ. 人文景観では、「本公園は、中世から近世にかけて栄えた大峯修験と熊野信仰という宗教上の聖地を区域内に含み、これに関わる史跡や遺跡が多く見られる(環境庁 1988, 8)」とし、その拠点の一つとして吉野山を挙げ、古社寺が残り伝統を伝えているとする。また、「“花の吉野”として名高い吉野山のサクラ林も、当初はこの宗教に由来して植林、成立したものである(環境庁 1988, 9)」と述べ、桜を取り上げているが、特に信仰との関係を強調している。国史については、「吉野山には南朝に関する史跡も多い(環境庁 1988, 9)」と簡潔に触れられるのみである。

(2) 利用の現況では、「すぐれた人文資源の探訪(環境庁 1988, 9)」の対象地の一つとして吉野山が挙げられている。(3) 社会経済的背景のイ. 人口および産業では、吉野に限定はされていないが、山岳部では山林業が主な産業の一つであることが述べられる(環境庁 1988, 11)。このほか、(3) ウ. 権利制限関係で、保安林や鳥獣保護区として吉野町や川上村など吉野の町村地内が挙げられ、国指定の史跡名勝天然記念物一覧に吉野山が挙げられている。

以上から 1988 年版の指定書は、吉野について、桜、国史、人工林、信仰のいずれの側面についても客観的事実として言及はしているが、特に強調されているのが信仰であることがわかる。

再点検された公園計画書は、第一章で保護および利用の基本方針を述べ、第二章で地種区分ごとの保護計画、第三章で利用計画、第四章参考事項の各章が続く。

最初に吉野が言及されるのは、第二章ア.特別地域(ウ)第2種特別地域で、「奈良県 吉野郡吉野町 大字左曽、大字丹治、大字橋屋及び大字吉野山の各一部」が「吉野山」の名称

で挙げられている（環境庁 1988, 103, 106）。この地区の概要として、「吉野山一帯でヤマザクラを主とするサクラ林や数多くの史跡を有し、国の史跡・名勝に指定されている。社寺、集落地等の文化景観と周囲の自然が一体となり優れた景観を呈している。（環境庁 1988, 107）」とあり、史跡や社寺が多いこと、桜の名所であることが示されているが、強調されているのは特定の資産・情報ではなく全体的な景観である。

続いて第二章ア.特別地域（エ）第 3 種特別地域に、「奈良県 吉野郡吉野町 大字左曾、大字丹治及び大字吉野山の各一部」が挙げられている（環境庁 1988, 124,128）。地区の概要としては、「スギ・ヒノキの人工林で吉野山の利用環境の保全上重要な地域である（環境庁 1988, 129）」とレクリエーション的観点から人工林の重要性が述べられている。

第三章利用計画では、ア.集団施設の後、イ.単独施設の節で、「奈良県吉野郡吉野町（吉野山）」に「園地」「宿舎」「博物展示施設」が指定され（環境庁 1988, 160）、それぞれ「吉野山探勝利用者のための園地として整備する」「吉野山探勝利用者のための宿舎として整備する」「吉野山の歴史、文化、自然等を開設するための施設として整備する」と整備方針が述べられる（環境庁 1988, 161）。この後ウ.道路、エ.運輸施設でそれぞれ吉野で整備が必要な箇所が挙げられている。

以上から、1988 年版公園計画書は、国史や信仰については史跡・社寺が多いことを述べるのみである。桜については国の名勝であることに言及し、スギやヒノキの人工林が多いことにも触れているが、いずれの資産・情報も特に強調はされていない。

国立公園の管理計画書は最も古いものは 1983 年版であるが、現在では入手不可となっており、現存しているのは 1990 年版と 2001 年版（ともに環境省発行）である。

1990 年版は、吉野山が「日本一のヤマザクラの名所として知られている」（環境庁 1990, 4）とした上で、その保護育成を管理方針の一翼に挙げ（同上）、ヤマザクラが近年衰退しているため調査・対策を行う（環境庁 1990, 8）とし、名所としても生物種としても桜を国立公園の管理対象として非常に重視していることがわかる。吉野山は修験道の拠点として開

かれ門前町の雰囲気を留め（環境庁 1990, 1）、その雰囲気を損なわないことが管理方針の一つに挙げられており（環境庁 1990, 4）、信仰の存在は重視されている。人工林については、古くから吉野杉の産地として林業が地域を支えてきたことに言及する一方、それが自然環境保全上問題をきたしているとも述べ（環境庁 1990, 1）、国立公園の価値として人工林を評価するには至っていない。また、修験道はじめ源義経や後醍醐天皇など南朝にかかわる数多くの古社寺や史跡が残っているとし（環境省 1990, 1, 4）国史との関係性に言及している。

2001 年に省庁再編により環境省が誕生する。環境省が発行した資料として、現行最新かつ 2004 年の世界遺産登録時においても利用されていた、2001 年版吉野熊野国立公園吉野地域管理計画書では、冒頭、吉野地域の紹介で、管理対象地域の地理的、地形的な紹介がなされた後に、「植生は非常に豊か」「多様な森林」「数多くの動物が生息」「わが国屈指の野生動物の生息地」など、植生、動物相の豊かさが強調されているが、戦前のような風景地に関する記述は見られない（環境省 2001,1）（史料－17）。吉野山は「この信仰（大峰山脈の山上ヶ岳を中心に信仰登山を行ってきた修験道）の拠点として開かれたところで、多くの古社寺が残り、門前町の雰囲気を今も留めている」と紹介される。

人工林については、地域の古くからの産業として林業の重要性を認識する一方で、自然環境保護の観点から林業の過度な拡大を懸念している。植生の豊かさを重視する立場からは、人工林の単一的な植生が広がることは好ましくなかったと考えられる。

国立公園指定時は山岳、溪谷、海岸などの風景を捉える巨視的な視点であり、指定後は植生や動物の豊富さという風景の内容を見た質的な見方がなされていた。

吉野山管理計画区の「管理の基本方針」として、「修験道をはじめ、源義経や後醍醐天皇などにまつわる数多くの史跡が残っているほか、日本一のヤマザクラの名所として知られている（環境省 2001,2）」「山域各所には社寺も多く、その外縁にはサクラをはじめスギ、ヒノキ等の植林地が見られる（環境省 2001,2）」と述べられている。国史上の出来事と吉

野の関連の深さについては、1990 年版同様に事実の言及にとどまり、積極的な評価には至っていない。

「管理方針」として、「門前町の雰囲気を損なわないようにするとともに、ヤマザクラの保護育成に努める（環境省 2001,2）」とある。以上から、大峯修験の門前町であることに言及するだけでなくその雰囲気の保全も訴えていることから信仰と、名所であるという事実だけでなく保護育成も重視していることから桜を吉野の重要な資産と捉えているといえる。

さらに、「保全対象」として、「上千本、中千本、下千本、奥千本のヤマザクラ—本地区の主要な景観構成要素であるヤマザクラを保全する（環境省 2001,2）」と桜のみが取り上げられている。「本地区を代表するヤマザクラが、近年衰退の傾向を示しているため、これまで行われた保全のための調査結果を踏まえ、関係機関等の協力のもと以下の対策を推進（環境省 2001,6）」としており、1990 年版に比べより明確に桜を評価している。

2006 年には、吉野熊野国立公園の第 2 回点検が行われるとともに、指定書および公園計画書が改訂されたが、和歌山県地域の区域の削除、奈良県大台ヶ原の区域の一部拡張が行われ、吉野山周辺の変更はなく言及されていないため、本論では取り扱わないこととする。

最新の資料として、環境省自然環境局発行のパンフレット「日本の国立公園」（2015）があるが、吉野は「桜と史跡の吉野山」と紹介されるにとどまっている。

（2）一般向け書籍の記述傾向

一般向け書籍 12 点中一点を除くすべてが、吉野の特色として桜について記述していた（表－8）。

このうち一点は「桜と歴史の吉野山（菅沼 1996, 20）」のみで、具体的な評価の観点を明らかにしていなかった。11 点が吉野山の桜の美しさや樹数の多さ、古来名所として有名であったことを述べ、風景・名所としての桜を評価していると考えられた。とりわけ吉野の桜

について多くの記述が割かれていたのが、「国立公園シリーズ 10 吉野熊野国立公園」(1953)であり、吉野山五万本の桜が織り成す景観の魅力を具体的に描写し、豊臣秀吉の花見など歴史的に我が国屈指の桜の名所となってきたことを述べ(国立公園協会 1953, 25)、中表紙などに桜期の吉野山の写真を多数挿入している。吉野の桜に対する評価は、一般に対し伝えやすいものとして、国立公園指定以降安定して資料に登場していたことがわかる。

我が国において桜は文化や国民意識と深く結びつくものとされ、また吉野の桜は古くから信仰(修験道)や詩歌、絵画などで特別な意味を持ってきた。このような桜の持つ象徴性については、国花として桜と日本人のアイデンティティとの結びつきを示したもの(National Parks Association of Japan 1957, 94)、文学・芸術での重要性に触れたもの(福井 2006, 12)が各 1 点あったほかはすべて、信仰との結びつきを述べたものだった(12 点中 6 点)。このうち 4 点が 1950 年代に集中していた。1950 年代で最も古い資料である「日本の国立公園」(1951)では、修験道の開祖である役小角が蔵王権現を桜の材に彫刻した伝説から桜が神木視され、地元民や参詣者によって寄進、保護、人工増殖が行われてきた結果桜の名所が形成されたこと(国立公園協会 1951, 190-191)を解説し、吉野の有名な桜が修験道と密接に関わるものであることを強調している。他の資料でも、桜と役小角および蔵王権現の関係、修験道の神木としての保護や献樹が樹数の多さにつながったことが頻繁に登場する。象徴的な存在としての桜については、ほとんどの資料が修験道と桜の関係に関心を持っており、特により時代の古い資料にその傾向が見られると考えられる。

人工林について、古くから林業が盛んであることに客観的事実として言及した資料が 12 点中 6 点あった。上記 6 点中、人工林を森林景観として積極的に評価したものは 3 点のみでいずれも 1950 年代の書籍だった。具体的には、「吉野川一帯には(中略)この辺りの大部分は吉野林業の中心である吉野杉の人工造林地が多く、人口森林美の極致を示している。

(国立公園協会 1951, 188)」「又奥吉野に入れば、吉野杉の人工林が見事であります。(国立公園協会 1953, 25)」「(紀伊山地全体について(筆者補)) スギ・ヒノキ等の美林を産し

(筆者中略) わが国の国立公園中でも、比肩するもののない特色とあってよい。(国立公園協会 1956, 109)」と、非常に肯定的な言葉で林業地の森林美が描かれている。

国史上の出来事と吉野の関わりの深さに言及した資料は 12 点中 10 点、そのうち肯定的な評価を示していたのは 8 点で、年代の偏りは見られなかった。後醍醐天皇および南朝を取り上げたり、源義経と静の悲話や源平争乱を具体例として挙げていた。初期の資料で吉野の歴史的重要性を詳しく述べたものとして、「国立公園シリーズ 10 吉野熊野国立公園」(1953) は、吉野においては山伏の勢力が源平時代や南朝に関係し、とりわけ後醍醐天皇をはじめ楠正成・正行等の吉野朝の「尊い哀史」で彩られ、源義経や中世修験者、特に南朝関係の人物にまつわる有名な社寺、史跡および名所が多いと具体例を列举している(国立公園協会 1953, 28)。国史と吉野の関係性を記述した資料は年代の偏りなく見られるものの、上記資料の南朝に対する尊い、哀史、といった表現が示すように、1950 年代の早い段階では戦前の皇国史観の影響が残り、より国史との関係性に高い評価が与えられていたものと考えられる。

信仰に言及したのは 12 点中 9 点、積極的評価が見られたのはこのうち 6 点であった。いずれも山岳修験の中心として吉野が発展してきたことや、修験道関連の社寺、遺構が多く存在することを述べている。資料は 1950 年代から 2000 年代まで偏りなく分布しているものの、単なる言及の場合と積極的評価の場合が入り混じっているため、積極的評価が一定してあったとは言い切れない。

表―8 吉野における国立公園の風景評価に関する資料の記述

(詳細な記述内容は本論末史料―18を参照)

資料 ID	資料名	年	資産		情報		
			桜	森林	国史	信仰	産業
国立公園管理行政による刊行物							
1	厚生省大臣官房国立公園部編:国立公園日本観光特選:全国身体障害者福祉協議会	1951	◎		○		
2	厚生省国立公園部監修、国立公園協会著:国立公園のはなし	1952	◎	○		○	○
3	厚生省国立公園局:日本の国立公園:三和銀行	1964		◎		○	◎
4	環境庁:吉野熊野国立公園指定書 昭和63年11月7日	1988	○	○	○	◎	○
5	環境庁:吉野熊野国立公園公園計画書 昭和63年11月7日	1988	○	◎	○	○	◎
6	環境省(1990):吉野熊野国立公園 平成2年管理計画	1990	◎	○	○	◎	○
7	環境省(2001):吉野熊野国立公園 平成13年管理計画	2001	◎	○	○	○	○
8	環境省自然環境局(2015):日本の国立公園(パンフレット、地図)	2015	○		○		
			◎4 ○3	◎2 ○4	◎0 ○6	◎2 ○4	◎2 ○4
一般向け書籍							
9	国立公園協会(1951):日本の国立公園	1951	◎	◎	◎	◎	◎
10	国立公園協会(1952):国立公園写真集 国立公園法制定20周年記念:朋文堂	1952	◎				
11	国立公園協会(1953):国立公園シリーズ10 吉野熊野国立公園:朋文堂	1953	◎	◎	◎	◎	◎
12	国立公園協会(1956):国立公園写真読本:東都書房	1956	◎	◎	◎	◎	◎
13	National Parks Association of Japan(1957):National Parks of Japan:Tokyo News Service	1957	◎		◎	○	
14	国立公園協会(1977):画集美しき日本 代表洋画家が描く国立公園七十八景:実業之日本社	1977	◎		◎	○	
15	国立公園協会(1981):日本の風景 自然公園50周年記念 国立公園写真集:ぎょうせい	1981	◎	○	○		○
16	国立公園協会、日本自然保護協会(1989):日本の自然公園:講談社	1989	◎	○	◎	◎	○
17	鹿子木孟郎、林静一郎(1991):国立公園絵画シリーズ(24) 吉野連山(吉野熊野国立公園):国立公園494	1991			◎	◎	
18	国立公園協会(1995):国立公園図鑑:大蔵省印刷局	1995	◎			○	
19	菅沼孝之(1996):還暦を迎えた吉野熊野国立公園大台ヶ原(吉野熊野国立公園指定60周年):国立公園543	1996	○	○	○		○
20	福井良盟(2006):日本の心の源流(特集 吉野熊野国立公園指定七〇周年):国立公園642	2006	◎		◎	◎	
※○ 事実の言及のみ(表-7参照) ◎ 積極的に評価(表-7参照)			◎10 ○1	◎3 ○3	◎8 ○2	◎6 ○3	◎3 ○3

(3) まとめ

国立公園指定後第二次世界大戦を経て1950年代までの資料には、桜、人工林という資産、国史、信仰、産業という情報のいずれにも言及しその魅力や重要性を訴える多面的な評価が見られた。1988年の国立公園指定書および公園計画書では、地域の状況を詳述した前者と国立公園区域内の保護・利用の方針を記した後者とでは、同じ吉野に対しても記述内容が異

なり、前者が信仰の側面を強調したのに対し、後者は吉野のいずれの資産・情報も特に前面に出さず言及するにとどまっていた。全体的な傾向としては、時代が下るとともに人工林に対する美的評価、国史、信仰、産業に対する評価は一定的には見られなくなり、客観的事実の言及にとどまる場合が多くなった。1988年の指定書及び公園計画書が桜を信仰との関係からあるいは名所として言及するにとどまっているのと比較し、1990年、2001年の管理計画書、特に後者では名所としてかつ生物種として、桜を主たる保全対象に挙げている。桜という資産に対する評価のみが一貫して続き、現在の国立公園では明確に桜が風景評価の中心となっている。(表―8)

5－2．各種関連政策

5－2－1．目的および方法

第3章に関連し、吉野は明治期から文化財や風景地の保存に関する制度指定を受けており、これらは国立公園成立の初期段階に関係している。吉野公園（1894年）や吉野山保勝会（1916年）、史跡および名勝（1924年）などの吉野に対する評価を表す資料として、各制度や団体の設立文書、指定文書の記述を分析した（5－2－2）。また、第3章の国立公園指定過程で特定の評価を示していた学者が、これらの国立公園以前の制度指定に関わっていた場合、評価の違いも考察した。

第4章に関連し、吉野が大規模林業地としての側面を持つことから、林業に関する国家政策を検討した（5－2－3）。拡大造林政策の全体的傾向を見た上で、吉野周辺の空間的変容を統計データから確認した。さらに、吉野と観光が深く結びついてきたことを踏まえ、国土開発計画における観光政策の特徴を考察した（5－2－4）。

5－2－2．文化財および風景地の保存政策

吉野における文化財や風景地保存の起点として、近代の吉野において歴史的環境および自然環境の保全が初めて制度的に行われた（鳥越 2003, 157-158）吉野公園の設立（1894

年（明治 27 年）がある。

吉野公園沿革は、吉野山を「天然自然の風致に富む桜の名区」「修験道の開祖・役小角以来の寺院がある」「吉野朝（13 世紀に吉野を拠点に戦った後醍醐天皇の南朝）の帝都で忠臣義人の墳墓が散在」「明治の官幣大社が創設され古の神社仏閣も多い」「吟客騷士が訪れあるいは詩歌に詠んだ美名の地」と描写する。明治維新の混乱に乗じて吉野山の山林や名所史跡の荒廃が進んだとして、その保護を訴え設立の趣旨とする（史料－ 1 1）（奈良県吉野郡市役所 1919, 659）。

1916（大正 5）年には、吉野公園の名所旧跡の修理・保存、桜の増殖による全山の完美を目的に財団法人「吉野山保勝会」が設立された。吉野山保勝会の設立要旨は、吉野山を吉野朝（南朝）にかかわる名区とし、史蹟等を挙げた上で、修験道の中心として信仰を集めてきたこと及び古来名高い桜の美観を描写する（史料－ 1 2）（奈良県吉野郡市役所 1919, 672-673）。

吉野山保勝会は、官僚と学者から成り啓蒙・研究活動を通じて史蹟名勝天然紀念物保存法の立法を準備していた「史蹟名勝天然紀念物保存協会」（1912 年設立、以下「保存協会」と略。）の会長（徳川頼倫）を総裁に迎え、1916 年 4 月に保存協会のメンバーを吉野山に招いて大講演会を行い、奈良県を挙げての歓待を行っており（史蹟名勝天然紀念物 1 巻 11 号 1916, 88）、史跡および名勝指定を念頭に政府への働きかけを行っていたことが伺える。保存協会も、吉野山の「山中の櫻花、史蹟の保存」への効果が期待されるとこの講演会の感想を述べている（史料－ 1 3）（史蹟名勝天然紀念物 1 巻 11 号 1916, 88）。

また、保存協会の会員には天然紀念物保存の中心だった三好學がおり、雑誌『史蹟名勝天然紀念物』に桜に関する著述を多数残した。三好は、古来第一の桜の名所として吉野山を挙げると同時に、様々な山桜の優れた品種があり研究上貴重な場所であると述べた。「学問上から見ても、また園芸上から見ても、あるいは名所舊蹟等に（一判読不可一）して考えて見ても（中略）これらの場所にある桜は、十分に保護の策を講じたいものと思う。」として桜

保護の必要性を訴え、生物学的視点から吉野山の桜を評価していた(三好學 1916, 73-74)。

1919年に制定された史蹟名勝天然紀念物保存法に基づき、1924年12月に「吉野山」は史跡および名勝に指定された。この指定における吉野への関心を明らかにするため、指定時に内務省によって作成された説明文を検討した。説明文は、文化庁文化財部記念物課に保管されてある「史蹟名勝天然記念物指定台帳」に記載されており(平澤 2010, 232)、平澤(2010)に掲載されたものを参照した。

同説明文では、歴代天皇の御幸が行われ早くから国史に登場したこと、中古は「金峰(吉野山から山上ヶ岳までの峰々(筆者補))の信仰により山上隆盛を極め」たこと、吉野朝との関わりと史蹟について説明し、特に花期の景観と品種が詳述されている(史料-14)(平澤 2010, 240)。

以上から、史跡および名勝指定までの過程では、情報としては国史との関連性、修験道の拠点であること、資産としては桜の名所および生物種としての桜に関心が集まっていた。旧来の吉野山の風景観を基礎としていたといえる。また桜と修験道の関係には言及がなく、桜は専ら風景と品種の観点で捉えられていた。

5-2-3. 林業政策

本節では拡大造林に伴う吉野周辺の空間的变化を、統計データを基に検討する。

戦後、戦争で荒廃した町、村や山林を復興する必要性から、1950年代に全国的に造林が推奨され(大内 1987, 3-4)、高度経済成長期に入ると木材需要の逼迫を受けて積極的に進められた(大内 1987, 4)。1960年代から、都市への人口流出による労働力不足などから造林活動は停滞するようになり、1970年代には外材に押され林業生産は後退していった(大内 1987, 4-5)。50年代に植えられた人工林の間伐が課題となるなど、1980年代には拡大造林政策は転換された(大内 1987, 7)。

1960年から2000年にかけての世界農林業センサスから、吉野林業地域と言われる奈良

県の吉野町、東吉野村、川上村、黒滝村の四村およびその周辺 10 町村（図－16）の人工林の面積を調べた（表－9）（農林省統計調査部 1960, 同 1970, 農林水産省統計情報部 1980, 同 1990, 同 2000）。表－9 を基に、人工林の面積の積み上げをグラフ化した（図－17）。最も拡大造林が盛んだった 1950 年代から 1960 年代までの動きがわからないことが難点であるが、時代を経るごとに吉野林業地域だけでなく周辺の村でも人工林地が拡大している。1960 年では吉野林業地域の人工林面積が突出していたが、1970 年代にかけて周辺市町村特に天川村、上北山村、宇陀市、御杖村で人工林面積が急増し、以降も増加、2000 年の段階では吉野林業地域の町村を上回る周辺市町村もある。以上から、吉野林業地域の空間的特色が埋没していった様子がわかる。

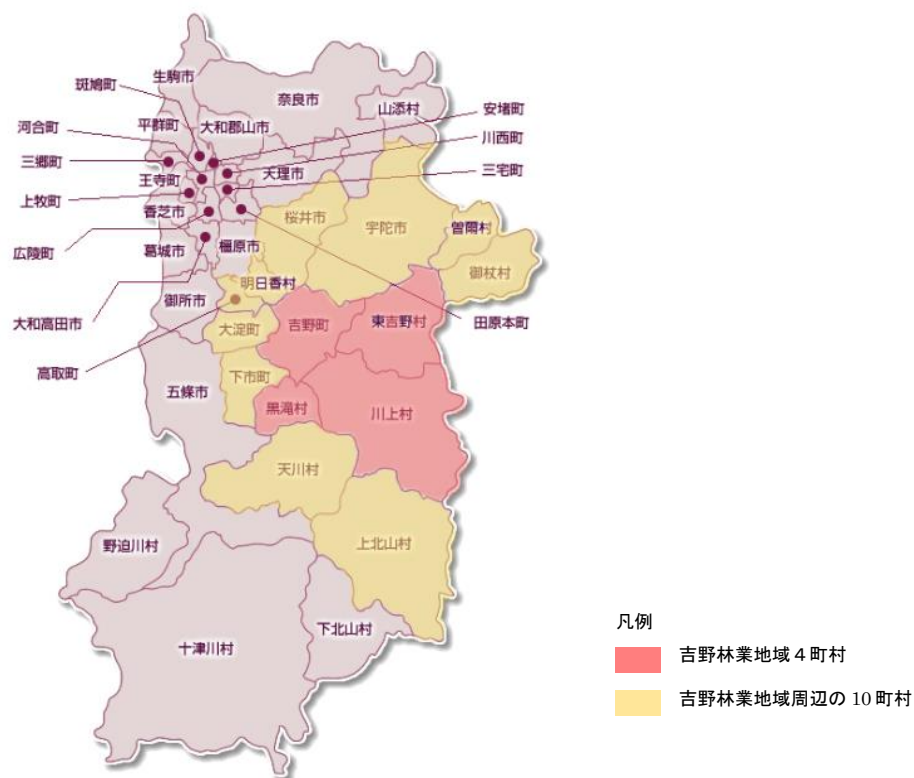
表－9. 奈良県吉野林業地域および周辺町村の人工林森林面積

世界農林業センサス 統計書（林業） <農林省統計調査部、農林水産省統計情報部>より

調査年	1960		1970		1980		1990		2000	
	樹林地計	人工林	樹林地計	人工林	樹林地計	人工林	樹林地計	人工林	樹林地計	人工林
吉野町	7168	4654	7679	5479	7893	5916	7925	6318	7850	6361
黒滝村	4307	3840	4399	4035	4599	4295	4600	4219	4596	4223
川上村	25001	15862	25726	16972	25238	17047	25064	17043	25440	16897
東吉野村	11398	10257	12324	10803	12344	11150	12487	11287	12515	11268
大淀町	2355	1216	2365	1214	2161	1178	2140	1254	1933	1199
下市町	4045	2686	4682	3298	4722	3507	4809	3601	4795	3622
天川村	15960	6330	16373	8875	16869	10038	16762	10696	17015	10656
上北山村	26130	6379	26221	7601	25942	9333	25074	10286	26280	9926
桜井市	5240	4673	5534	4640	5790	4736	5928	4873	5891	4950
宇陀市	16704	9528	18614	12684	17662	12966	18262	13869	18126	13870
曽爾村	4110	2519	3887	2841	3983	3235	4032	3386	4062	3395
御杖村	6757	2833	6918	5683	6920	6048	6971	6232	6969	6252
高取町	1579	1103	1649	1443	1660	1444	1625	1468	1609	1454
明日香村	1353	1275	1343	1282	1341	1281	1289	1229	1316	1234

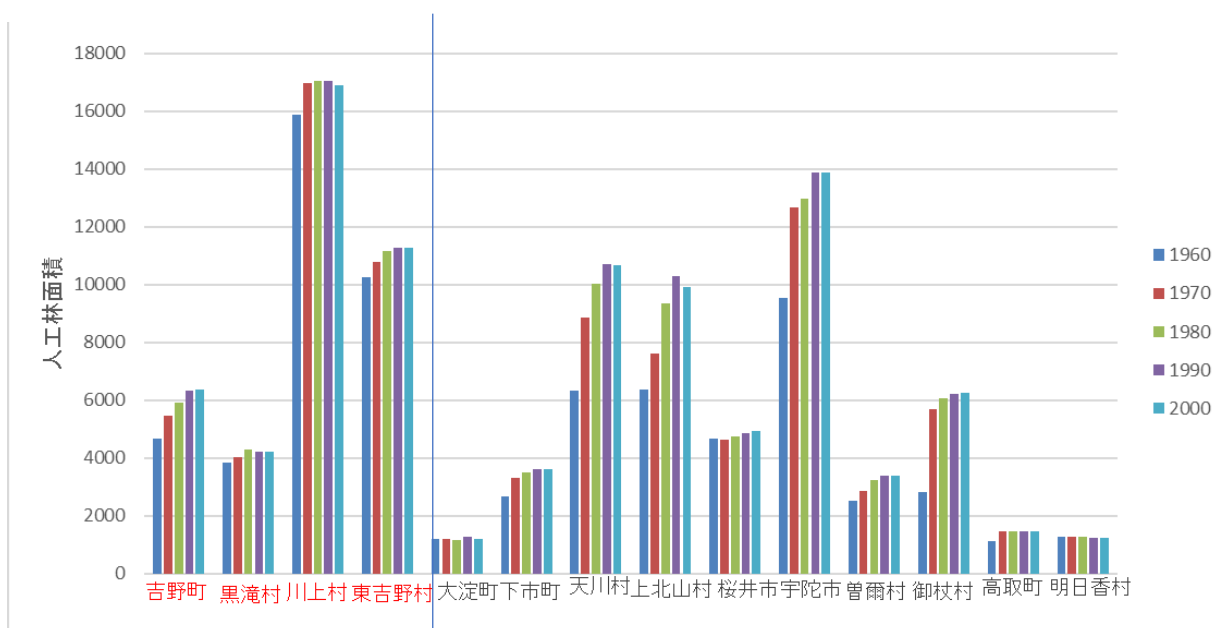
単位: ha

灰字=吉野林業地域



図－１６ 吉野林業地域と周辺町村

<http://www.pref.nara.jp/3605.htm> より作成



図－１７ 世界農林業センサスより 吉野林業地域および
周辺町村（奈良県）の人工林森林面積

赤字＝吉野林業地域

5-2-4. 観光政策

戦後、1960年代から国立公園で観光利用が活発化したことは既に述べたが、国の観光政策では国立公園はどのように捉えられていたのだろうか。新全国総合開発計画（新全総）は全国総合開発計画の第二次版で1969年に閣議決定された。全国総合開発計画は、国土の開発、利用、保全に関する総合的かつ基本的な計画であるため、日本政府の観光政策の基本的方向性を捉えるのに適している。とりわけ新全総は国立公園の観光利用が盛んになった時期に作成された資料である。

新全総の中で、観光に関する章は、「第一部 国土総合開発の基本計画」「第4 計画の主要課題」「2-4 観光レクリエーションの主要計画課題」（国土交通省 1969, 28-29）のみである。その対象として、自然だけが扱われている点が特徴的である。「(1)自然観光レクリエーション地区の整備および大規模海洋性レクリエーション基地の建設」として、自然観賞、登山、ハイキング、スキー、スケート等山岳、森林を対象にしたレクリエーションに必要な自然観光地域の中に、利用上の整備（ガス、水道、電気等の施設利用が可能なキャンプ場、ホテル等、スケートリンク、ゲレンデ等）を大規模に行うとしている（国土交通省 1969, 29）。

また、地方別の開発基本計画「第6 近畿圏整備開発の基本構想」「2 主要整備開発事業の計画」（国土交通省 1969, 65）では、今後の観光需要の増大に対応し、各国立公園、国定公園、ほか自然景観のすぐれた地域について、自然資源の保存を図りつつ、地域の特性を活かした観光レクリエーション施設を整備するとして、吉野熊野国立公園もその対象に挙げられている。

新全国総合開発計画では、観光政策は自然観光を指し、自然観光地域として国立公園の整備が重視され、吉野熊野もその一つとされた。桜が国立公園の風景評価の中心に置かれた背景には、以上のような観光政策の中で、自然資源、観光資源として桜がわかりやすかったことが考えられる。

5-3. 大峯奥駈道（「回廊」区域）の空間・景観

5-3-1. 目的および対象・方法

前述したように、国立公園指定では、吉野山と大峰山脈を結ぶ修験道の山岳修行の道・大峯奥駈道の一部と一致する「回廊」区域が、公園区域に一度は含まれながら最終指定で除外されていた（図-15）。世界遺産登録では、信仰の山としての「紀伊山地」に大峯奥駈道は構成資産として含まれ、「回廊」区域はバッファゾーンとなっている。現在、同区域の大峯奥駈道は大半が樹木に取り囲まれて視界が狭く、杉の人工林地となっている（2016年8月12日現在）。

前節では、吉野林業地域およびその周辺で、戦後、人工林が大幅に拡大していったことがわかったが、「回廊」区域は、戦後拡大造林により吉野林業地域と周辺で人工林が大幅に拡大する中、国立公園の規制を受けなかったために特に大きな景観変化が生じた可能性がある。

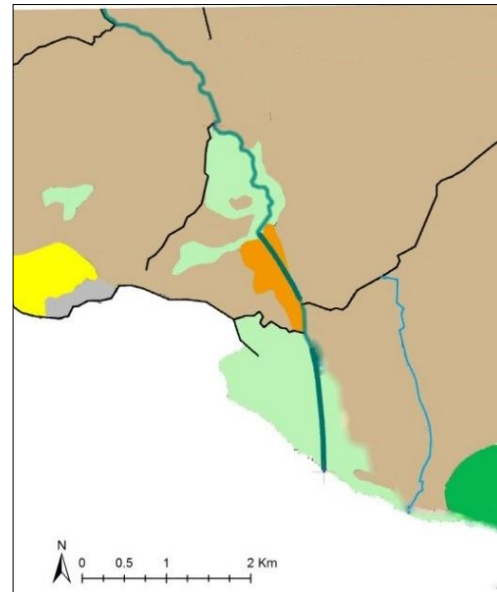
吉野に対する、国立公園指定にはない世界遺産登録の特徴を明らかにするに当たり、同区域の実態を把握するため、本節では、過去から現在に至る「回廊」区域における景観・空間の変化を分析した。対象とする景観は森林内の巡礼路を視点場としているため、「回廊」区域周辺の土地利用および「回廊」区域における可視領域と圍繞感から違いを比較した。

国土地理院地形図および環境省の植生図を用い、1913年から現在までの「回廊」区域周辺の土地利用の変遷を図にまとめた（図-18）。最新の資料は、2004年に調査が行われた第7回環境省自然環境保全基礎調査の2万5千分の1植生図で「回廊」区域が掲載されている「洞川」を用いた。それ以前の地図として、1969年の国土地理院の調査による2万5千分の1地形図「洞川」を用いた。それより以前の1913年、1948年、1957年については、2万5千分の1地形図は残されていないため、国土地理院による5万分の1地形図で「回廊」区域が表示されている「山上ヶ岳」を使用した。地形図のコピーに対してトレーシングペーパーを用い、「回廊」区域周辺で植生の異なる部分を記録していった。

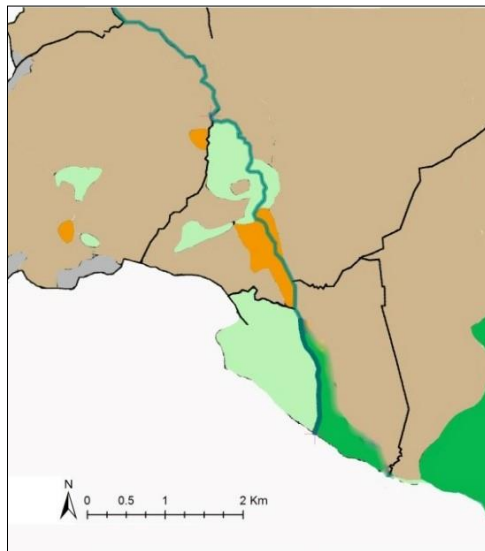
1) 1913 年



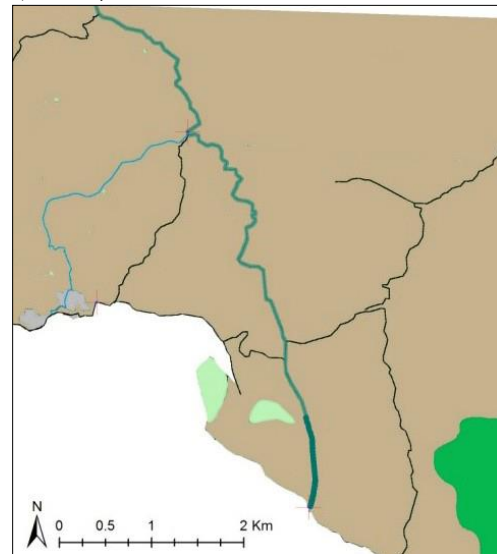
2) 1948 年



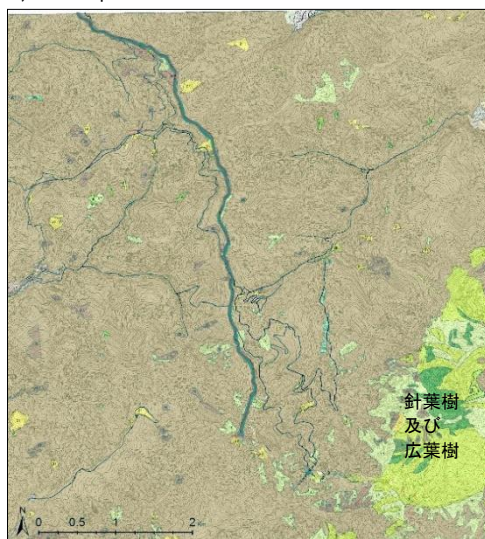
3) 1957 年



4) 1969 年



5) 2004 年

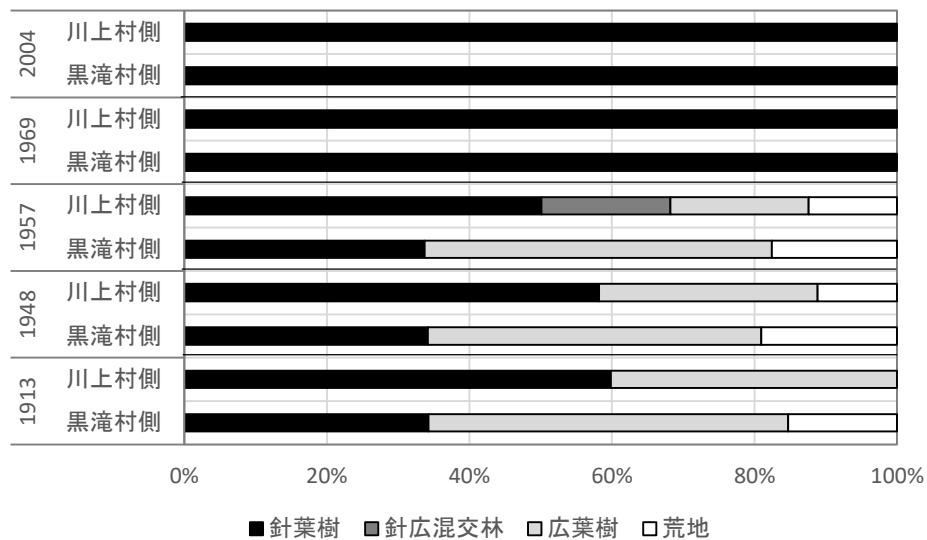


凡例

- 針葉樹
- 広葉樹
- 針葉樹・広葉樹
- 針葉樹・広葉樹・荒地
- 荒地
- 集落
- 大峯奥駈道（回廊区域）
- 新設の林道

図－１８．「回廊」区域の土地利用

1913、1948、1957、1969 年出版 国土地理院地形図および第 6ー7 回環境省自然環境調査 2 万 5 千分の 1 地形図「洞川」（2004 年）により作成。5）は図の色を完全に他図と一致させることが困難なため、図中に文言を追加。

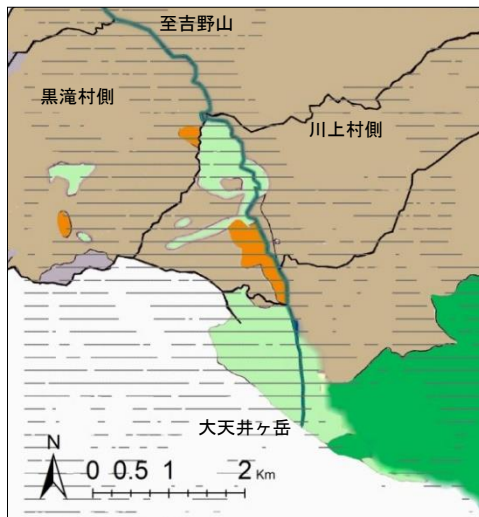


図－１９．「回廊」区域沿道の植生比変化

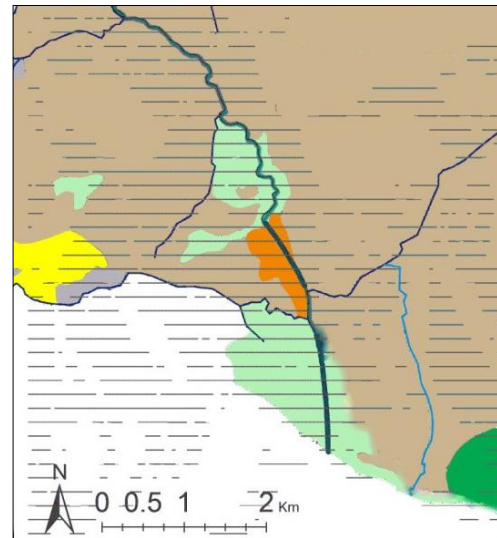
さらに、ArcGIS を用いて、図－１８上で「回廊」区域の大峯奥駈道の植生ごとに異なる距離を、左右両沿道で計測し、グラフにまとめた（図－１９）。

土地利用の変遷図をベースに、10m メッシュマップより ArcGIS を用いて「回廊」区域の大峯奥駈道からの可視領域を調べ、1913 年、1948 年、1957 年、1969 年、2004 年の変遷を確認した（図－２０）。加えて現地踏査で 2016 年現在の土地利用・植生およびそれによる景観を目視で確認した。

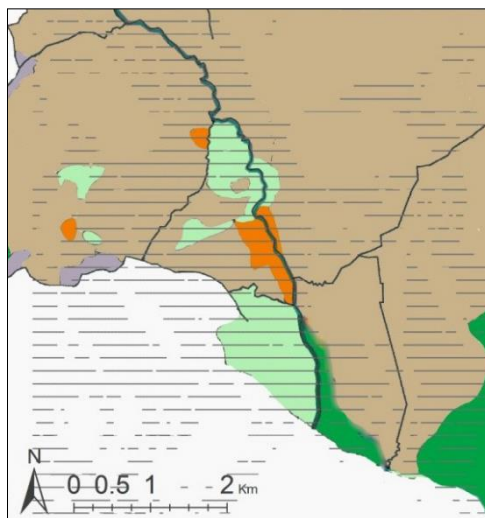
1) 1913 年



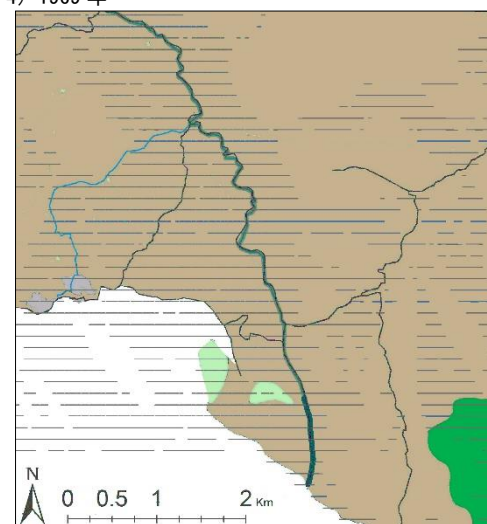
2) 1948 年



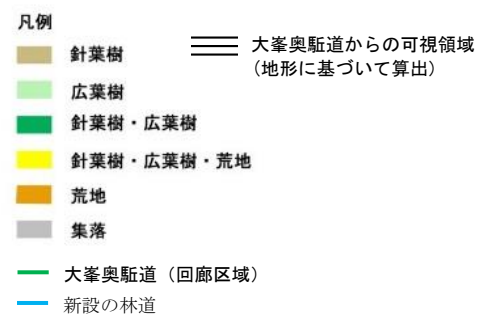
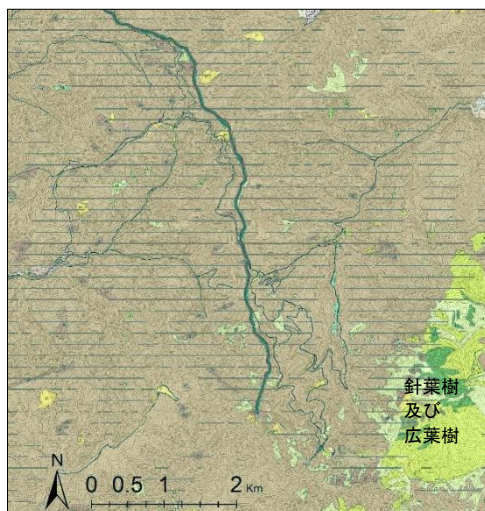
3) 1957 年



4) 1969 年



5) 2004 年



図－20. 「回廊」区域からの可視領域

1913、1948、1957、1969 年出版 国土地理院地形図および第 6-7 回環境省自然環境調査 2 万 5 千分の 1 地形図「洞川」 (2004 年)に基づき ArcGIS で作成。5) は図の色を完全に他 80 図と一致させることが困難なため、図中に文言を追加。

5-3-2. 土地利用の変遷と可視領域

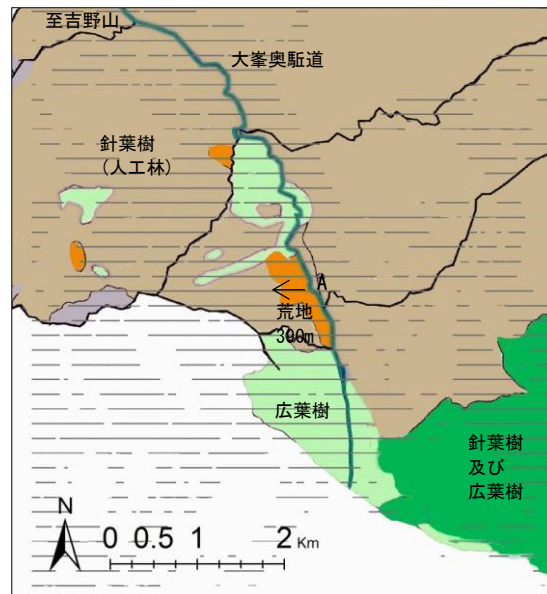
図-18、図-19から各年の土地利用の変化を比べると「回廊」区域沿道は現在、針葉樹（人工スギ林）に囲まれているが、過去には荒地や広葉樹林も広がっていた。図-19では、大峯奥駈道の左右両沿道の植生は、人工林単一の現在に比べて過去にはより多様であり、かつ両側で植生の異なる箇所があったことがわかる。大峯奥駈道の周囲の森林は私有林であり、高度経済成長の拡大造林によって、1940年代以降新たに林道が整備され、荒地や広葉樹林が人工林化し道の両側が針葉樹林になっていったとみられる。

拡大造林で、道周辺の広葉樹林や荒地が人工林化する以前、大峯奥駈道からの可視領域は広範に広がっていた（図-20）。図-20と図-19から、かつては大峯奥駈道から、沿道に針葉樹や広葉樹、荒地が見え、荒地では奥に遠くの山稜も見えるなど、針葉樹だけが見える現在の単調な眺めとは異なっていた。かつて修験者たちが大峯奥駈道を進んでいった際の視覚的な体験が、多様な眺めを伴うものであったことがわかる。

5-3-3. 囲繞感

現在、大峯奥駈道において来訪者が周辺の森林との関係において感じる囲まれ感（囲繞感）を、Spreirgen（1965）の囲みの感覚と仰角の理論に基づき⁶数値化し、過去と現在で比較を行った。算出は、修験道が盛んに行われ大峯奥駈道が最も活発に利用されていたと考えられる1913年の可視領域図（図-20-1）と、2004年の地形図および現地踏査で確認した現地の状況に基づいた。

⁶ 視対象の高さと視点場の視点位置の差（H）に対する、視対象と視点場間の距離（D）の比率から、視点場から視対象の頂点を見た仰角が計算される。Spreirgen（1965）によれば、仰角45度（H:D=1:1）で完璧な囲繞感が生じ、仰角18度（H:D=1:3）で最低限の囲みを感じられ、仰角14度（H:D=1:4）で囲繞感が消失する。

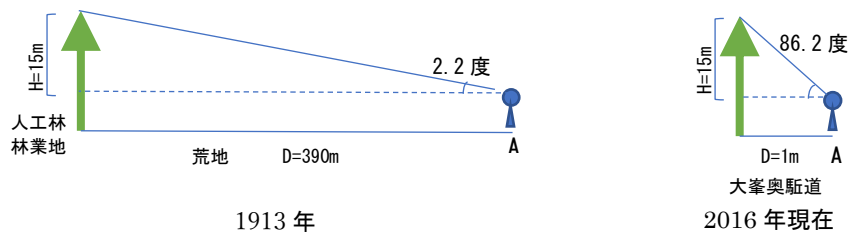


図－２１．１９１３年における大峯奥駈道上の視点場 A から眺めた林業地（人工林）の方向

１９１３年可視領域図上で点 A に視点場（来訪者の位置）を設定した（図－２１）。点 A は、荒地の最も広がっている部分の大峯奥駈道の中心線上にあり、点 A からの可視領域は荒地地およびそれを越えた針葉樹林に及んでいる。大峯奥駈道上で過去において、最も開放的で遠方まで眺めが得られた地点である。現在と異なる眺めが得られた点で過去の大峯奥駈道を代表しており、現在の同道上から周囲の森林を見た眺めと最も対照的な結果が得られる可能性があるため選定した。視点場 A と視対象（森林）間の距離（D）は、１９１３年については ArcGIS を用い図－２１上で約 390m と測定し、２０１６年現在については ２０１６年 ８月 １２日の現地踏査で視点場 A の近隣地点で目視により約 1m と設定した。森林の高さと来訪者の視点の位置の差（H）は、２０１６年 ８月 １２日の現地踏査で視点場 A の近隣地点において（図－２２）、大峯奥駈道沿道の森林の高さから目視により 15m と設定した。視点場 A から見える森林は、１９１３年時点も現在も針葉樹からなる林業地の人工林であり、施業方法に大きな変化はないと推定し、高さ H はともに 15m とした。



図－２２．視点場 A 近隣の大峯奥駈道の現況
(撮影：2016 年 8 月 12 日、渡邊真菜美)



図－２３．1913 年と現在における大峯奥駈道上の視点場
A から林業地（人工林）を眺めた仰角

結果、1913 年では、大峯奥駈道上地点 A の来訪者が森林を見た仰角は、圍繞感が消失する 14 度以下の約 2.2 度 ($H:D=1:26$) で、圍繞感は全くなかった。一方、現在の仰角は、完璧な圍繞感が生じる 45 度以上の約 86.2 度 ($H:D=15:1$) で、現地踏査においても完全な圍繞感が感じられた (図－２３)。

5－3－4．まとめ

土地利用と可視領域および圍繞感の変化を検討した結果、大峯奥駈道からの景観は、針葉樹の人工林に加え荒地の開けた眺めや広葉樹の自然林も含んだ多様なものから、主に杉林に囲まれた単調なものへ変化したことが確認された。さらに圍繞感の変化より、奥駈修行で大峯奥駈道が頻繁に利用されていた時代に修験者たちが見ていた景観は、現在のように常

に道の両側を人工林で囲まれていたものではなかったと考えられる。周囲が荒地で視界が開けていた箇所もあり、荒地を挟み人工林を中景として見ていたり遠景も見えたりするなど、修験者たちが現在よりも変化のある景観を体験していた可能性が指摘できる。

5 - 4. 結果

第3章に関連して、吉野公園や吉野山の史跡および名勝指定では、資産としては名所および生物種としての桜に、情報としては国史との関連性、修験道の拠点であることに関心が集まっており、旧来の吉野山の風景観があった。その後、吉野熊野国立公園が、大正末期から昭和期にかけて日本で初めて行われた国立公園指定の文脈で成立し、そこには伝統的な日本の風景観から離れ、巨視的に風景を捉える、すなわち主にレクリエーション利用のための大スケールの自然風景を貴重とする思想があった。古来桜の名所として詩歌等に取り上げられてきた吉野山は、日本の伝統的な風景とみなされ、国立公園指定に向けた議論の初期には、候補地の検討対象から外れたと考えられる。やがて、このようなスケールの大きさを重視する国立公園思想と、前述したドイツ森林美学や三好學の人工的美および景観の考え方の影響もあり、旧来の吉野山の風景ではなく、一時は整然とした森が広大に広がる人工林景観に関心が持たれるようになった。国立公園指定の過程では、資産としては森林、情報としては産業が重視されたといえる。

第4章に関連して、国立公園関連資料の記述分析から、国立公園指定後世界遺産登録までに、桜という資産が吉野の中心的な風景として位置づけられるようになっていた。人工林という資産や林業が盛んであること、国史や信仰などの情報については、強調した資料も一部にはみられたが、時代を経るとともに客観的な事実として認識されるにとどまっていた。また新全国総合開発計画が示したように、国の観光政策上、自然観光が重視され、吉野ではわかりやすい自然観光資源である桜が注目された。

一方、昭和期の指定以降、国立公園での観光開発、産業開発の波に対抗して自然環境保護

への意識が社会的に高まったこと、さらに、1990 年代からは生物多様性条約など国際的な動きを受けて、国立公園行政の重心は以前の風景地保全から「生態系」「生物多様性」に移っていった。風景保護とレクリエーション利用促進を重視し、原生的な自然を主に指定していた国立公園初期に対し、以降は自然環境保護を中心とした指定・拡張や計画が行われるようになった。

吉野熊野国立公園の管理行政でも、植生や動物の豊富さを捉える微視的な視点が採られていた。生物多様性が重視され、どれだけ多様な動植物相があるかが重視される中では、人工林は植生として単一的であるため、国立公園では評価されなかった。

拡大造林政策による吉野周辺地域の人工林増加に埋没し、空間的に林業地としての吉野の特殊性が認識されにくくなった。

拡大造林の結果、かつては荒地も広がっていた大峯奥駈道の「回廊」区域を、人工林が密に取り囲むようになったことで、聖地・道とそれらを取り巻く森林景観を、信仰の山の表象とする UNESCO/ICOMOS から高く評価され、UNESCO/ICOMOS が神聖なものと捉える結果となったと考えられる。

国立公園指定後世界遺産登録までは、桜という資産に安定的な評価が行われた一方、資産のうち森林（人工林）と、国史、信仰、産業という情報に対する評価は全体として希薄であった。その後、世界遺産登録では、森林という資産が神聖視されるかたちで評価された。このような変化は、生物多様性に集中していった環境省（庁）の国立公園行政、国土庁の観光政策、林野庁の拡大造林政策という三つの行政の動きが関係し合った結果であったといえる。

6. 結論

本論では、第3章で国立公園指定時における吉野に対する国立公園当局の評価、第4章で世界遺産登録における UNESCO/ICOMOS の吉野に対する評価を明らかにした上で、第5章で諸政策の変化と空間の変化の両面から上記二つの評価の背景を明らかにすることを試みた。評価対象を、桜、森林という資産と、国史、信仰、産業という情報に整理して分析した。

第3章から、国立公園の指定過程では、林業を通じて人が手を入れてきた森林という資産が、林学者の本多静六を中心に高く評価された。ただし、最終的には、林業者による国立公園からの除外要求が優先されて林業地が公園区域から縮小された。吉野山の飛地化という変則的な区域設定に説明をつける必要もあり、国史という情報のみが指定理由となった。

本多は整然とした森林美を評価するドイツ森林美学に触れており（第3章）、三好は人為の加わった植物に人工的美を見出し且つ植物の集団が作り出す眺めを意識していた（第3章）。両者は、このような思想的背景から、吉野林業地の人工林美を強く主張することになったと考えられる。また、第5章から大正期から昭和期にかけた国立公園思想は、旧来の名所よりも広大な自然の風景を重視しており、国立公園指定の過程を通して桜が評価されないことにつながったと考えられる。

史跡および名勝の指定過程では、名所としておよび生物種としての桜という資産と、信仰（修験道）という情報が評価されていたが（第5章）、国立公園指定の過程の議論では桜への言及は全く見られなかった（第3章）。史跡および名勝指定と国立公園指定ともに携わった三好學が、吉野において前者では桜を評価し（第5章）、後者では人工林を評価していた（第3章）。それぞれで評価する対象が明確に異なっており、国立公園指定においては、旧来の名所を評価対象としない方針であったことがここからもうかがえる。国立公園指定の過程では、本多静六と三好學によって、林業という人の営みを含めて総合的に空間を捉えようとする新しい風景観が提起されていた。

第4章から、世界遺産登録においては、信仰という情報が UNESCO/ICOMOS の評価の

中心だった。日本の世界遺産登録関係資料は、吉野の森林の多くが人工林であることや地域産業における重要性、林業に基づく文化的景観の存在に繰り返し触れていた。このように、価値として取り上げられたわけではないが事実として言及はされていたにもかかわらず、林業に基づく森林は認識されず、吉野の多様な側面の一つにすぎない信仰だけが評価の対象となった。さらに、資産については、森林を重視、その背景にある林産業という情報を踏まえないまま、神聖性を当てはめた。

なお、ICOMOS の評価報告書や保全状況審査報告書、顕著な普遍的価値のステートメントにおける森林に関する記述は、紀伊山地全体に対するものであり、吉野や「回廊」区域に限定されたものではない。紀伊山地全体の視点から見れば、豊かな森林に覆われた山岳地で古代から自然信仰が生まれ発展してきた、という UNESCO/ICOMOS の認識は誤りではない。長く建造物等有形の文化財を中心としてきた ICOMOS の評価において、森林を文化遺産である文化的景観の中心的な価値として取り上げている点は、卓見ともいえる。

しかし、「回廊」区域は、国立公園の指定を受けず、したがって保護の範囲から外れながら世界遺産の構成資産となっている。第5章3節で示したように、世界遺産登録までに活発な林業活動によって大峯奥駈道の両側は人工林化し、極めて人工的、産業的な森林であるにもかかわらず、「信仰の山」とされているのである。森林に信仰との結びつきを見出して重視する世界遺産登録の評価が、吉野の「回廊」区域では顕著に表れている。紀伊山地全体の視点から行われた UNESCO/ICOMOS の評価では、個々の森林の情報までは捉えきれていなかったといえる。

また、第5章3節の「大峯奥駈道（「回廊」区域）の空間・景観の変化」から、「回廊」区域ではかつては大峯奥駈道沿道に広葉樹林や荒地もあり、遠くの山並みも眺められていた。しかし、現在は拡大造林の結果人工スギ林が道を密に取り囲み、UNESCO/ICOMOS はそのような森林を神聖と見ており、かつて巡礼者が実際に体験していた神聖な空間を確認してはいないといえる。

第5章から、国立公園指定後の吉野に関連する資料の記述を追った結果、資産について、桜への評価は継続して見られたが、人工林に対する評価は一定ではなかった（表－10）。1988年の国立公園指定書では桜に加え、信仰上の吉野の重要性が強調されていたが、1990年と2001年の管理計画書では桜が風景評価の中心となっていた。

すなわち、国立公園指定では、国史という情報が最終的な評価となった一方、指定過程では森林という資産も評価されており、これは人工林に対する評価で、産業という情報と結びつけられた森林であった。世界遺産登録では、UNESCO/ICOMOSにおいて、信仰という情報に対する評価が中心的で、森林という資産も重視されたが、この森林は、林業という本来吉野の森林の背後にある情報ではなく、信仰と結びつけて捉えられていた。

国立公園指定、世界遺産登録ともに森林という資産を評価している点では共通しているが、前者が森林の背後にある産業という情報を把握していたのに対し、後者では自然に対する信仰を重視していた UNESCO/ICOMOS が、人工林を産業と切り離し、巡礼路と一体的に資産として捉え、「信仰」を関連づけて神聖性を読み込んだと考えられる。

国立公園指定から世界遺産登録に至るまでの期間には、桜という資産に評価が集中し、人工林という資産をはじめ産業などの情報に対する評価は不安定だった（表－10）。

また、国立公園指定、国立公園指定と世界遺産登録の間、世界遺産登録の日本資料では、国史が評価されたり、産業と結びつけた森林への評価や言及があるなど、評価に連続性が見られる。一方、世界遺産登録の UNESCO 資料では、国史は全く言及されず、森林は信仰と結びつけて評価され、日本における評価とは視点が異なっていることが伺える（表－10）。

第5章から、国立公園指定後の吉野では、環境行政、国立公園行政が風景保護と利用促進から生物多様性保全へと軸足を移し、植生の多様性が重視され、単一的な人工林への風景としての評価は高まらなかった。さらに、吉野林業地域の周辺、吉野山の周辺でも拡大造林が進み、吉野山周辺の人工林の美的特殊性が空間的に埋没し認識されにくくなっていったことも、国立公園で人工林が評価されなかった理由だった。これらに加えて、新全国総合開発

表－１０ 国立公園指定と世界遺産登録における吉野に対する評価

		資産		情報		
		桜	森林	国史	信仰	産業
国立公園指定		×	(○)	○	×	(○)
国立公園指定～世界遺産登録		○	△	△	△	△
世界遺産登録	日本	○	事実の言及	△	○	事実の言及
	UNESCO/ICOMOS	△	○	×	○	×

○全般的な評価 △一部の資料でのみ評価 ×評価なし

計画が示したように、自然観光を促進した国の観光開発政策を受けて、国立公園ではわかりやすい自然資源である桜に注目が集まっていった。このように、林業地の価値が吉野で確立されていなかったことが、第４章で明らかにしたように、世界遺産登録時の評価からも抜け落ちることにつながったと考えられる。

UNESCO/ICOMOS では、巡礼路と周囲の森林をともに神聖なものと捉えている（第４章）。しかし、吉野の大峯奥駈道周辺の森林は、林業という人の営みによって形成されてきた人工林であった。日本資料では、森林を社会経済的なものと捉え、その間を通る巡礼路とは別に扱っていた（第４章）。第５章からも、拡大造林の過程から、巡礼路と、針葉樹林や広葉樹林、荒地の奥の稜線といった周囲の景観とは別々の文脈で成立あるいは消失してきたことがわかる。つまり、結果的に一つの空間となった巡礼路と森林は、一体的に形成されてはいなかったと言える。

第５章より、大峯奥駈道の「回廊」区域は国立公園区域から除外された結果、戦後規制を受けずに植林が拡大し、人工の杉林に囲まれた空間が形成された。このことが、第４章で示したように世界遺産で現在「神聖」と捉えられる結果を生んだ可能性が考えられる。

以上より、第３章から、国立公園指定では最終的には国史という情報が評価されたものの、一部では吉野の美しい人工林という資産が評価されており、第４章から世界遺産登録では信仰という情報を中心に吉野が見られ、特に森林の神聖性が強調されていたことがわかつ

た。第5章から、国立公園指定における人工林美の評価の背景には、国立公園当局が国立公園以前の制度で評価されていた桜の名所という古来の吉野山の風景を離れ、広大な自然風景を重視する中、本多静六の森林美学や三好學の人工的な植物美および景観の概念があったと考えられる。また、第5章から、資産について、世界遺産登録において林業地の存在に言及がなく森林が神聖として評価された背景には、国立公園指定後、国立公園行政が生物多様性を重視するようになり、単一的な植生が評価されなかったこと、地域全体の林業地拡大による吉野の空間的特殊性の低下、国の観光政策の下桜に注目が集まったことなどから、林業地への評価が吉野で高まらなかったこと、さらに「回廊」区域では国立公園から除外されたために植林が広がり、人工林に常に取り囲まれた景観が生まれ、「神聖」な「自然」という評価と合致した空間となった。

吉野に国立公園指定は森林を見ずに歴史を、世界遺産は森林に信仰を見出した。両制度において抜け落ちてきたのが、人の営みの結果である森林の美に対する評価であった。林業という産業が生み出した森林の価値は、国立公園、世界遺産の双方において制度指定の途中では認識されつつも、最終的な指定や登録には一貫して反映されてこなかった。

大峯奥駈道（回廊区域）の景観や空間の変化から、世界遺産登録においてUNESCO/ICOMOSが「神聖」と捉えた、巡礼路を取り巻く森林は、手つかずの原生的なものでは必ずしもなく、一つには営々と続いてきた地域の産業の結果だったことがわかった。地域の情報への理解がないまま、「信仰」「神聖」という国際的にわかりやすい価値が当てはめられていた。世界遺産登録という国際的な評価においては、資産（巡礼路および森林）と情報（信仰）が適切に関連づけられていなかったといえる。

日本の遺産保護地域には多くの人々が暮らし、多くの人間活動が行われている以上、国際的に関心の高い価値のみに目を向けるのではなく、産業など地域の情報と資産を適切に関連づけた上で、指定・登録や保全管理に向けた議論を行っていくことが必要だろう。

吉野の国立公園の管理計画は、現状は吉野林業の存在に言及し林地拡大を懸念するにと

どまっているが、国立公園がそもそもは風景地保全を目的とした制度である以上、地域の林産業が国立公園内の人工林美を作り出しているのであれば、その活性化に林野庁とともに主体的に関わっていくべきであろう。

今後、世界遺産その他国際的な指定制度に日本の地域を推薦する際には、各制度の評価基準に対応した国際的な価値（世界遺産で言えば **Outstanding Universal Value**）だけでなく、地域の資産とそれを支える生業についても調査を行い、推薦書に対象地域の背景として明記していくべきである。その結果として登録や指定に結びつかなかったとしても、地域の実態について正確な理解がなされた上で国際的な議論がなされるように、情報を提供していかなければならない。

また、吉野をはじめ既に世界遺産（とりわけ文化的景観）に登録されている地域については、保存管理計画書や定期的に作成される **ICOMOS** の保全状況審査報告書を改善する必要がある。構成資産や登録事由となった **Outstanding Universal Value**（「紀伊山地の霊場と参詣道」では信仰との関連性）は、世界遺産条約の目的に基づいた基準によって評価・審議され、決定されたものであり、そこに登録後にたとえば吉野の林業地を加えることは現実的ではない。しかし、世界遺産となった資産を成立させた背後にどのような地域の生業や営みがあったのかは認識し、保存管理計画書等に明記していくべきである。国際的に認められた価値だけでなく、それを支える地域の価値についても管理のレベルで取り上げていくことである。

本研究を踏まえ、今後、「回廊」区域ははじめ世界遺産としての吉野の保全管理においては、地域の林業家の今までの取り組みを評価し、それが産業として継続していく方法を検討していく必要がある。遺産保護の枠組みの中で産業の支援も行っていくべきである。

本論文の冒頭で述べたように、世界遺産登録後の保全管理においてはコミュニティの協力が不可欠である。「回廊」区域すなわち世界遺産に含まれる吉野林業地域において、地元の林業家たちはコミュニティを構成する重要な存在である。林業家たちは、長い年月に亘り

高度な技術で山林を管理してきた。今日まで大峯奥駈道周囲の森林が整っているのは、このような林業家たちの営みがあったためである。彼らが山を守ってきたからこそ、土砂災害などから守られ、周囲の森林が築かれてきた。

したがって、UNESCO/ICOMOS が神聖だと評価した「回廊」区域周辺のような巡礼路沿いの森林を守っていくには、林業家の協力を得ることが不可欠である。国際機関や日本の行政が、林業家の今日までの活動の成果を正当に評価した上で、高齢化や後継者不足、外材圧力など多くの課題に直面する林業が、地域の生業として持続できるよう支援をしていく必要がある。各遺産保護制度における行政からの経済的支援を林業家の後継者育成事業にも適用することなどが考えられる。

なお、ここで述べている林業地は、「回廊」区域周辺の拡大造林地とその他の伝統的な吉野林業地の両方を指す。国際的に守るべき遺産として森林が評価されたのであれば、形だけ进行评估するのではなく、情報、すなわち森林を成立させてきた産業を認識した上で、持続支援をしていくべきである、そうしなければ森林を維持していく上でコミュニティの協力が得られない恐れがある、というのが本論の趣旨である。そして、情報（産業）を認識する上では、伝統的な林業で形成されてきた森林もあれば、拡大造林で大きく空間が変容した森林もある、という空間の履歴の違いを把握することが重要である。

国際社会の中で、世界遺産の対象（道や森林）も、林業家という地域の産業の担い手もともに守り、残していかなければならない。

国際的に文化遺産として資産を評価しても、それを成立させてきた地域の生業が持続していかなければ、周囲の森林は荒廃し、遺産を守っていくことはできなくなる。国際的に森林を神聖だと価値づけるだけではなく、価値づけたものをどのように将来残していくかという議論が求められる。

なお、遺産の保護を行っていく上で、研究背景で述べたようにコミュニティの協力を得ることが不可欠であることを考えると、周囲の森林を維持している林業とは全く別に、巡礼路

を守っていくことが妥当なのかは論を待たなければならず、江戸時代から続く林業と道を利用してきた修験道との関係について、別途研究が期待される。

近年では、吉野林業地が文化庁による日本遺産⁷の認定を受けたほか、人工スギ林を含む国定公園⁸が新たに指定され、生業に基づく景観を文化的資源あるいは自然の資源として認め、将来に継承していこうという動きが見られる。このほか、吉野林業地は、技術を中心に評価する「林業遺産」の認定も受けている⁹。そのような潮流を踏まえれば、今後吉野だけでなく他の日本の地域においても、物理的な資産を遺産として評価するだけではなく、それを成り立たせている地域の生業や技術の継承を、遺産保護の枠組みの中で行っていくべきである。

日本遺産としては、吉野では、ホームページ等を通じた構成文化財や見どころの紹介、宿泊案内、歴史や信仰、文化の紹介、地域の人々へのインタビュー記事など情報発信が主であり、観光による地域活性化が主となっている印象がある。林業地についても、全町村を対象とした「吉野の人工林」と一部の村有林が構成文化財として挙げられるのみで、林産業を支援する取り組みは見られない（吉野地域日本遺産活性化協議会ホームページ）。京都丹波高原国定公園においても、スギ林の広がる京北・山国地域をエリアに含めてはいるものの、国定公園の管轄は京都府の環境部自然環境保全課であり、具体的な林業支援は管轄外となっ

⁷ 「日本遺産」(Japan Heritage) とは、文化庁が平成 27 年度から創設したもので、地域に点在する有形・無形の文化財をパッケージ化し、日本の文化・伝統を語るストーリーを認定する制度である。平成 28 年に、奈良県の吉野町、下市町、黒滝村、天川村、下北山村、上北山村、川上村、東吉野村が「森に育まれ、森を育んだ人々の暮らしとこころ〜美林連なる造林発祥の地 吉野 〜」として日本遺産に認定された。約 500 年にわたり造林技術により育まれた人工の森と、地域の人々が神仏座す地として信仰する天然の森、森での暮らしの中から生まれた食や文化が今に伝わってきたとされ、吉野各地の天然の森と人工林をはじめ、国や県・村指定あるいは未指定の有形・無形の文化財、吉野建という民家建築、吉野山の街並みという景観、樽丸や割り箸の制作などの工芸技術、「山の神の信仰」といった慣行や、「吉野葛」「柿の葉寿司」といった地域の名産品まで構成文化財として含まれている。

⁸ 平成 28 年 3 月に、京都府の中央部、京都市、綾部市、南丹市、京丹波町にまたがる丹波高原が京都丹波高原国定公園に指定された。原生自然の残る芦生の森に加え、茅葺屋根の民家が多数残され自然の恵みを生かした暮らしが伝わる集落や、日本海と京都を結ぶ多くの古街道など、自然と文化が融合した風致を特色とする。京都市街の西北に位置する「京北・山国地域」は、8 世紀に遡る林業の歴史を持ち、かつては林業で隆盛し、人工造林の景観が広がっている。

⁹ 「林業遺産」は一般社団法人日本森林学会が「林業発展の歴史を示す景観、施設、跡地等を中心に、体系的な技術、特徴的な道具類、古文書等の資料群を、林業遺産として認定」するものである

(<https://www.forestry.jp/activity/forestrylegacy/>)。黒滝村・川上村・東吉野村全域の林業景観が認定対象に含まれているが、行政による指定制度ではなく、学術団体による認定事業であり、また技術史的側面に重点が置かれている。本研究では、国際機関や国などの行政による、文化財や自然環境、風景地の指定制度を対象としているため、林業遺産としての吉野については詳述しないが、林業景観を後世に継承していくべき広い意味での遺産として価値づける試みとして、日本遺産や京都丹波高原国定公園と同様の動きと位置づけられよう。

ている。

現在、上述した三つの取り組みは、林業地を取り上げながら、国定公園は風致、日本遺産は文化的側面、林業遺産は技術と、評価の対象や守ろうとする対象が異なっている。今後、林業地を次世代に継承していくためには、三つの視点を統合して評価を行い、空間も文化も技術も含めて総合的に林業を持続させていく、林家が経営を続けられるよう継承を図っていく必要があると考える。日本遺産事業から地域が得た利益を原資に基金を設立し、林産物の普及や、林家の後継者獲得と技術継承などに活用していくことなどが考えられる。

7. 参考文献

- (1916)：吉野山保勝會の一日：史蹟名勝天然紀念物 1 卷 11 号
- (1931)：第一回国立公園委員会議事録, 環境省所蔵
- (1931-1935)：「国立公園審議会一般・昭和 6～10 年」, 国立公文書館所蔵
- (1940)：吉野熊野国立公園一般計画集 三、吉野熊野国立公園保存地区計画案：国立公園
計画指定一般・吉野熊野国立公園・昭和 15 年：マイクロフィルム（昭和 47 年 環境
01272100 リール No.033200）, 国立公文書館所蔵
- (1996)：日本地名大百科 小学館
- (2004)：歩く旅シリーズ〔街道・古道〕吉野・大峯の古道を歩く：山と溪谷社
- 赤羽武ほか（1987, 1988, 1988, 1989, 1989, 1990, 1990, 1991, 1992）：吉野林業史料集
成：筑波大学農林学系
- 飯田繁（1984）：吉野における山守の地位（吉野林業の構造と展開基軸<特集>）：林業経済
37 (9), 13-17
- 伊藤弘（2010）：大正から戦後にかけての国立公園行政における多島海景観としての松島の
評価：日本建築学会計画系論文集 75 (656) , 2391-2396
- 井戸田祐子（2004）：奈良県川上村における森林管理の現状と山守制度の課題—山林所有
者のアンケート調査を中心に—：森林計画誌(38), 47-59
- 井戸田祐子（2005）：奈良県川上村における山守の実態：森林計画誌(39), 157-169
- 植田拓也、浦出俊和、大平和弘、上甫木昭春（2012）：吉野林業の森林管理における山守の
実態とその存続に関する研究：農村計画学会誌 31 卷論文特集号、315-320
- 大内幸雄（1987）：拡大造林政策の歴史的展開過程：林業経済研究 No.111、3-11
- 小田匡保（1989）：山岳聖域大峰における 75 霊地観の成立とその意義：人文地理 41 (6) ,
512-528
- 小田匡保（2000）：吉野山における観光客数の推移と季節性：駒澤地理 (36) , 33-54
- 小野良平（2008）：三好学による用語「景観」の意味および導入意図：ランドスケープ研究

(71) 5、433-438

川村誠 (1994) : 吉野林業の過去・現在・未来(個性ある施業技術は今・3-) : 林業技術(628), 12-16

高橋絵里奈・竹内典之 (1999) : 東吉野村におけるスギ人工林の密度管理(I) -間伐木順 唾忠一氏聞き取りを中心に- : 森林応用研究(8), 117-120

環境庁 (1988) : 吉野熊野国立公園指定書及び公園計画書 昭和 63 年 11 月 7 日

環境省 (2006) : 吉野熊野国立公園指定書及び公園計画書 昭和 18 年 1 月 19 日

環境省 (1990) : 吉野熊野国立公園 平成 2 年管理計画

環境省 (2001) : 吉野熊野国立公園 吉野地域管理計画書, 国立国会図書館所蔵

環境省 : 第 6 回・第 7 回自然環境保全基礎調査植生調査情報提供ホームページ : 2 万 5 千分の 1 植生図「洞川」 <http://gis.biodic.go.jp/webgis/sc-006.html?_ga=1.199700972.375402929.1457838585>, 2016.06.27 更新, 2016.10.28 参照

環境省 : 吉野熊野国立公園ホームページ : 概要・計画書 <<https://www.env.go.jp/park/yoshino/intro/index.html>>, 2017.10.11 更新, 2017.10.13 参照

環境省 : 富士箱根伊豆国立公園ホームページ : 公園の特長 <<https://www.env.go.jp/park/fujihakone/point/index.html>>, 2018.01.22 参照

環境省自然環境局 (2015) : 日本の国立公園 (パンフレット、地図)

神田孝治 (2009) : 吉野熊野国立公園の指定と熊野風景の変容 : 和歌山大学観光学部設置記念論集, 99-113

京都府 : 京都丹波高原国定公園ホームページ <<http://www.pref.kyoto.jp/shizen-koen/tamba.html>>, 2018.01.20 参照

厚生省国立公園局 (1964) : 日本の国立公園 : 三和銀行

厚生省国立公園部監修、国立公園協会著（1952）：国立公園のはなし

厚生省大臣官房国立公園部編（1951）：国立公園日本観光特選：全国身体障害者福祉協議会

国土交通省（1969）：新全国総合開発計画（増補）

<<https://www.mlit.go.jp/common/001135929.pdf>> PDF 2017.06.15 参照

国土地理院（1913）：「5万分の1地形図 山上ヶ岳」、国立国会図書館所蔵

国土地理院（1948）：「5万分の1地形図 山上ヶ岳」、国立国会図書館所蔵

国土地理院（1957）：「5万分の1地形図 山上ヶ岳」、国立国会図書館所蔵

国土地理院（1969）：「2万5千分の1地形図 洞川」、国立国会図書館所蔵

国立公園協会（1932）：雑報 第二次国立公園委員会総会の記「吉野及熊野国立公園候補地」：

国立公園第4巻11号<国立公園選定記念号>

国立公園協会（1936）：第7回国立公園委員会総会の記：国立公園第8巻1号

国立公園協会（1951）：日本の国立公園

国立公園協会（1953）：国立公園シリーズ10 吉野熊野国立公園：朋文堂

国立公園協会（1956）：国立公園写真読本：東都書房

国立公園協会（1977）：画集美しき日本 代表洋画家が描く国立公園七十八景：実業之日本社

国立公園協会（1981）：日本の風景 自然公園50周年記念 国立公園写真集：ぎょうせい

国立公園協会、日本自然保護協会（1989）：日本の自然公園：講談社

国立公園協会（1991）：国立公園494

国立公園協会（1995）：国立公園図鑑：大蔵省印刷局

自然公園財団（2016）：国立公園マップ 吉野熊野国立公園<

<http://www.bes.or.jp/parkmap/files/20-yoshino.pdf>> PDF 2017.11.17 参照

世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」に関する三県協議会（2005）：世界遺産「紀伊山地の
霊場と参詣道」に関する包括的な保存管理計画

- 自然公園財団（2006）：国立公園 2006 年 4 月号（642）（特集吉野熊野国立公園指定 70 周年）
- 清水裕子、伊藤精悟、川崎圭造（2006）：戦前における「森林美学」から「風致施業」への展開：ランドスケープ研究 69（5），395-398
- 国立公園協会（1996）：国立公園 543
- 武内和彦・渡辺綱男（2014）：日本の自然環境政策—自然共生社会をつくる：東京大学出版会
- 田中正大（1981）：日本の自然公園—自然保護と風景保護—：相模選書
- 谷爾兵衛（2008）：近世吉野林業史：思文閣出版
- 第 46 回帝国議会衆議院 議事録 1922（大正 11）年 12 月～1923 年 3 月
- 鳥越皓之（2003）：花をたずねて吉野山—その歴史とエコロジー：集英社
- 内務省（1930, 1931）：「国立公園委員会議事録・候補地概要」，環境省所蔵
- 内務省衛生局（1932）：「国立公園候補地地図」，環境省所蔵
- 奈良県吉野郡役所（1919）：奈良県吉野郡史料（上巻）
- 奈良県（2005）：世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」奈良県保存管理計画
- 奈良県農林部林業振興課：パンフレット「吉野林業」
- <<http://www.pref.nara.jp/dd.aspx?menuid=7429>>, 2016.08.22 更新, 2016.09.01 参照
- 奈良県吉野町（1972）：吉野町史下巻：吉野町役場
- 奈良県吉野町ホームページ：林業
- <<http://www.town.yoshino.nara.jp/about/sangyo/ringyo/>>, 2016.09.07 参照
- 西田正憲（2011）：自然の風景論：アサヒエコブックス，「第四章 風景の政治学」『国粹的自然＜吉野熊野＞』（187-196）
- 西田正憲（2016）：1930 年代における 12 国立公園誕生の国立公園委員会にみる風景の政治学：ランドスケープ研究オンライン論文集 9, 39-50
- 農林省統計調査部（1960）：世界農林業センサス 市町村別統計書（林業地域調査） No.29

奈良、14p、54p、74p

農林省統計調査部（1970）：世界農林業センサス 奈良県統計書（林業編）、42p、122p

農林水産省統計情報部（1980）：世界農林業センサス 奈良県統計書（林業編）、30p、68p

農林水産省統計情報部（1990）：世界農林業センサス 第1巻奈良県統計書（林業編）、12p、
53p

農林水産省統計情報部（2000）：世界農林業センサス 第1巻奈良県統計書（林業編）、45p

ブリタニカ・オンライン・ジャパン（2017）：ブリタニカ国際大百科事典（日本語版）

<<http://japan.eb.com/rg/article-12354400>>

平澤毅編（2010）：文化的資産としての名勝地：奈良文化財研究所

堀繁（1993）：わが国の国立公園の計画管理の実態とその変遷に関する研究（Ⅰ）：東大農学部演習林報告 90、97-182

堀繁（1995）：わが国の国立公園の計画管理の実態とその変遷に関する研究：ランドスケープ研究 59(2)、85-92

増田勝則（2013）：吉野林業を背景に設立された奈良県森林技術センター設立 50 周年を迎えて－：木材保存 Vol. 39-1, 43-48

松尾容孝（2010）：吉野林業地帯の再編と吉野山村地域の動態：人文地理学会大会研究発表要旨 2010(0), 78-79

水谷知生（2014－1）：大正期の 16 国立公園調査地の選定経過と田村剛の国立公園観：ランドスケープ研究オンライン論文集 7, 67-74

水谷知生（2014－2）：吉野熊野国立公園熊野地域の選定における地元の要望と風景認識：ランドスケープ研究オンライン論文集 7, 89-97

水谷知生（2014－3）：吉野熊野国立公園指定時の私有林との調整結果とその意味：ランドスケープ研究オンライン論文集 7, 81-88

三好學（1902）：植物生態美観：富山房

- 三好學（1915）：日本植物景觀 第四集：丸善
- 三好學（1916）：優れたる櫻の品種：史跡および名勝天然紀念物 1 卷 10 号, 73-74
- 三好學（1929）：欧米の国立公園と天然記念物保存：国立公園 1 卷 1 号, 8-9
- 三好學（1930）：日光の特殊植物景觀に就て：国立公園 2 卷 5 号, 4-5
- 三好學（1931）：史蹟名勝天然紀念物保存ニ就テ：国際観光委員会
- 三好學（1934）：雲仙国立公園、霧嶋国立公園並に瀬戸内国立公園の植物に就て：国立公園
6 卷 4 号, 6-9
- 三好學（1934）：日光国立公園の景觀：国立公園 6 卷 12 号, 5-9
- 三好學（1936）：十和田国立公園の景觀：国立公園 8 卷 3 号, 4-7
- 村串仁三郎（2004）：吉野熊野国立公園成立史—自然保護と利用開発の確執を中心に—：経
済志林 71（4）, 153-180
- 村串仁三郎（2006）：自然保護の砦としての国立公園 吉野熊野国立公園の指定運動を振り
返る：国立公園 2006 年 4 月号（642）（特集吉野熊野国立公園指定 70 周年）, 4-7
- 村串仁三郎（2011）：自然保護と戦後日本の国立公園—続『国立公園成立史の研究』：時潮社
- 村串仁三郎（2012）：国立公園成立史の研究—開発と自然保護の確執を中心に—：法政大学
出版局
- 村串仁三郎（2016）：高度成長期日本の国立公園—自然保護と開発の激突を中心に—：時潮
社
- 森庄一郎（1983）：吉野林業全書完全復刻原文・原面对照現代語訳付：日本林業調査会
- 吉野地域日本遺産活性化協議会：日本遺産吉野ホームページ<[http://japan-heritage-](http://japan-heritage-yoshino.jp/)
[yoshino.jp/](http://japan-heritage-yoshino.jp/)>, 2017.03.30 更新, 2018.01.20 参照
- 吉野山サクラ調査チーム（2010）：平成 20 年—22 年 吉野山サクラ調査報告書：京都大学
大学院地球環境学室
- 和歌山県世界遺産センター（2016）：吉野・大峯 <<http://www.sekaiisan->

wakayama.jp/know/yosino.html>, 2016.09.07 参照

Government of Japan (2004) : Sacred Sites and Pilgrimage Routes in the Kii Mountain

Range: Nomination File

<<http://whc.unesco.org/en/list/1142/documents/>> PDF 2016.10.19 更新, 2016.10.24 参照

National Parks Association of Japan (1957) : National Parks of Japan : Tokyo News Service

UNESCO World Heritage Center (2004) : Sacred Sites and Pilgrimage Routes in the Kii

Mountain Range: ICOMOS Advisory Body Evaluation

<<http://whc.unesco.org/en/list/1142/documents/>> PDF 2016.11.01 更新, 2016.11.03 参照

UNESCO World Heritage Center (2006) : World Heritage Committee 30th session, 7B.

State of conservation reports of properties inscribed on the World Heritage List, Sacred Sites and Pilgrimage Routes in the Kii Mountain

Range<<http://whc.unesco.org/en/documents/6529>> PDF 2016.11.01 更新, 169-171, 2016.11.04 参照

UNESCO World Heritage Center (2013) : World Heritage Committee 37th session, 8E:

Adoption of retrospective Statements of Outstanding Universal

Value<<http://whc.unesco.org/en/decisions/4964>> PDF 2016.11.01 更新, 2016.11.03 参照

UNESCO World Heritage Center (2016) : Sacred Sites and Pilgrimage Routes in the

Kii Mountain Range <<http://whc.unesco.org/en/list/1142>> 2016.11.01 更新, 2016.11.03 参照

UNESCO World Heritage Center (2018) ; Fujisan, sacred place and source of artistic

inspiration <<http://whc.unesco.org/en/list/1418>> 2018.01.22 参照

8. 史料

史料－１ 昭和６年１１月 第一回国立公園委員会議事録

第九 大台ヶ原及大峯山国立公園候補地

本候補地は国立公園候補地中唯一の水成岩地系統に属する山岳地方でありまして、大台ヶ原は古生層より成れる一大広原でありまして、大峯山は所謂大和「アルプス」と呼ばれる連山でのこぎり状の山系をなしております。併しながら水成岩山地系統の風景としては更に雄大なるものに日本南「アルプス」新高山などがありまして、本候補地を以って第一流の山岳地方となることを得ませぬ。

併しながら岩峯、台地（一判読不可）谷、瀑布等地穀の変化に富むでおりまして、且つ之をおおふ森林が落葉潤葉樹林と針葉樹林とにまたがって特色ある林相をなしておるのは聊か本候補地の誇りとする所であります。区域は三万五千町歩に達しまして、自然的風致を存する区域は相当広大でありまして、此の點につきましては国立公園としてそれ程遜色はありません。然るに土地所有関係におきましては私有地がその半以上を占めまして、公有地、御料地之に亞ぎ、候補地最も不利な條件を有するものといわなければなりません。殊に地方は林業上重要な位置を占めまして森林の多くは施業林でありまして風致保護上不利を免れないのであります。位置は近畿地方にありまして、而も観光コースよりみれば奈良と熊野とを結ぶ要路に当っておりますので、交通上有利な位ちを占めるに拘らず、本区域内に道路を開くことがすこぶる困難でありまして、将来の開発上著しく不利であります。更に利用方法について見ますに、社寺巡礼の外特筆するものもなく、雨量の多きは愈々その欠陥を大ならしめております。只本候補地の特徴とも云ふべきは人口稠密なる近畿地方に於ける唯一の候補地でありますから、国立公園の分布上重要な意義を伴うという点であります。

（第一回国立公園委員会議事録、環境省所蔵）

史料－２ 昭和６年１２月 国立公園の選定に関する第１回特別委員会 議事大要

藤村委員長（冒頭発言の中で、筆者注）：

「内務省の１６候補地は無論有力なものではあるが他からも優れたものの請願、陳情もある故むろん委員会としてはこれ等についても審議せねばならない。公平なる選定を為す上からは相当民間の事も聞いてやる必要がある。

（中略、筆者）

先般の総会で太平洋の沿岸に候補地のないのは遺憾なりとの説があつたが之も有り得るかも知れない。又分布は理論的に云えばどうでもよいのであるが之も適当に考慮すべきだと思う。

（中略、筆者）」

藤村委員長：

「人文的国立公園即日光とか奈良とかいうものを国立公園にするという意見もある位であるが国立公園は自然的のものであることが必要条件であるから之は論議の外にしましょう。」

脇水委員：

「プリント（請願、陳情をまとめたもの、筆者注）の中に大雪山と支笏湖とがある。もう一つ考えていただきたいのは熊野と奈良県の南に拡張して南紀の海岸を包含したものである。即海岸美を主とした国立公園即ち臨海公園とでも名付けるべきものの提唱である。又日本の海を大体日本海、瀬戸内海、太平洋の三つの型に分けて太平洋のものとして右に述べたものを採りたい。」

藤村委員長：

「区域は広大な方がよいのであるから、大台ヶ原を含めて一つとしたい。」

新井委員：「賛成」

(他の候補地について同様の拡張案が出される、筆者注)

赤木委員：「地域が如何に大なるも纏まりがなければ駄目です。」

田村委員：

「区域を拡張するとその中に町村部落が入り、之が入ることは自然的であるということに及するのみならず、私有地即ち住宅地、農耕地等を地域内に入ることは法の適用上からも亦、立法の主旨からも面白くないことです。」

藤村委員長：「箱根等の町はどうしますか。」

田村委員：「之は特に除外すべきものであらうと考える。」

岡部委員：「普通地域に入れて統制してほしい。又遠望のきくものは区域を広くしてほしい。」

平熊委員：「田村君の意見は良くわかる。先ず十六候補地についてやってみよう。他のものについては詳しい調べはできていないからその方がよかろうと思う。即区域拡張をあまり考えずに決めてみたらいかが。」

正木委員：「数はいくつにするのですか。」

藤村委員長：「各地方に幾つと凡そ概念でも決定したい。即地理的分布が問題になると思う。」

(「国立公園審議会一般・昭和 6-10 年」、国立公文書館所蔵)

史料－３ 昭和７年３月 国立公園選定に関する第５回特別委員会 議事大要

・地元奈良県、和歌山県の拡張要望が田村剛から説明される（筆者補）

・大杉谷を北の方に拡張してほしい

・区域を南方に拡張、北山川支流の東の川流域を含めてほしい

・北山川の下流を小口から延長、奥瀬、上瀬、瀬峡を新宮まで水路によって連絡し、以降、国有林及び道路によって、紀州海岸、鬼ヶ城、小口に至り、南は勝浦に出で、一方は那智の滝、大島、潮の岬に連絡しさらに古座川を加える。

・点在する地域を水路及び道路によって一つの公園系統として纏めるやり方について田村剛から意見（筆者補）

「国立公園に就いてはこの考え方は今まではしませんでした、もし海岸地方の国立公園を考えるならばこの様にせねばならぬと思います。以上は地元の希望であります、これと別に海洋の国立公園が考えられるかもしれません。もし前のような拡張が適切としますれば、技術上北山川の水路の連絡によるの外はないので陸路の連絡は考えられません」

・「熊野海岸を大台ヶ原大峯山と切り離して別に海岸の公園を作ることについては意見を持っておりますが必要なときに述べることにいたします。」（田村）

・「林業の関係といたしましては私有地が多く、吉野林業の中心地でもありますから林業上重大な関係があります。一時之等の林業家達は反対意見を持っていましたが現在では国立公園に好意を持ってきております。森林所有者の考えは十分に調査する必要があると思います」（田村）

・熊野方面への拡張案について支持する議論の後

田村委員：「この案によって海岸一帯をも含むとすれば中心が変わって山の方と結ぶのが却って無理になりはしないでしょうか。」

委員長：「内務省で案を作ってくださいたい。」

脇水委員：「山は日本アルプス等に劣っているのですから寧ろ海の方に重きを置きたいと思
います。」

長瀬委員：「之を止めて別に海岸の公園を作ってはどうかでしょう。」

田村委員：「海岸の風景は確かに我が国の代表的のものです。」

（委員長、佐原委員、田村委員との間に観光地点と国立公園との問題に就き意見の交換があ
り、内務省において地元民の意見等を聞き案を練ることとなる。筆者補）

三浦幹事：「此所には山と溪谷と海の三つがあつて之を併せて初めて国立公園としての意義
があるのですから以上のように拡張してほしいというのが和歌山、奈良両県の希望なので
す。」

田村委員：「この様な考え方はこの候補地に限る特別な関係によるものでありますが他の候
補地の場合にも起り得るので国立公園選定上弊害が起り統制がとれなくなるのではないかと
懸念されます。」

委員長：「史蹟を大いに考えてもらいたい。」

岡部委員：「私の希望としては他の場合はその時に考えるとして潔癖に考えずに山も結びつ
けてほしい」

正木委員：「色々の意味から拡張するなら吉野まで入れたい。」

委員長：「これで閉会にいたします。」

（「国立公園審議会一般・昭和 6-10 年」、国立公文書館所蔵）

史料－４ 昭和７年３月 国立公園選定に関する第６回特別委員会 議事大要

（前回和歌山県、奈良県から審議要請のあった大台ヶ原及大峯山国立公園候補地の拡張案を幹事の方で作成し「吉野群山及熊野地方国立公園候補地説明補遺」として説明する。筆者補）

田村：

「新しい区域は従来の区域の東北部に大杉谷北部の御料林及民有林を加え、南方に北山川本流及東の川流域を入れ、更に南方に北山川、熊野川に沿って帯状地帯をとったものであります。その趣旨は本候補地は溪谷、河川が根本的特徴であることから、北山川沿線から眺望し得る範囲を主として取入れたのであります。また熊野海岸も区域に入れましたが海岸地方の風景地として已むを得ぬ事情のために連続した一帯とすることが出来ず、瀬戸内海と同様の基準により、どうしても風致上の保護及び公園施設をせねばならぬ箇所を点々と区域に編入したのであります。要するに本候補地は溪流、河川、海岸に非常な特徴を有する特異の事情によりこの様な区域になったのであります。前回の審議の際に吉野、古座川、熊野三社附近をも編入する意見がありましたが、従来の国立公園の観念を変えずにどうしても必要なものだけを取り入れますと今申し上げた様な区域になるのです。国立公園の観念を変えろということは別に差し支えないことではありまじょうが、他の候補地に及ぼす影響もありますし、国立公園の選定上は一応このような区域で考えようと思います。」

（中略、筆者）

正木委員：「吉野群山という名称は変ではありませんか」

田村：「名称は假に付けた丈のものです。もっと適切な名称を考える必要があると思います。」

（中略、筆者）

本多委員：「吉野林業地の様な経済的林業を営んでいる所では作業の制限等は相当寛大にせねばならないでしょうね」

田村：「あそこは人工林の美が主なので、大体皆伐作業をそのまま許す方針です。」

（中略、筆者）

本多委員：「吉野を区域に入れなかったことには理由がありますか。」

田村：「利用上吉野とは関係が薄いので入れなかったのですが、更に研究の必要があるように思います。」

（「国立公園審議会一般・昭和 6-10 年」、国立公文書館所蔵）

史料－５ 懇談会に関する各委員の発言録

三好委員：

第一回懇談会

- ・大台ヶ原を主としたものでは物足りない。峡谷と海岸が入ると少し散漫の嫌はあるがずっとよくなる。
- ・熊野地方の私有地は遠大の計画にて買収すればよい

第三回懇談会

- ・吉野群山附近の景色は他にはない。地学上から説明ができると思う。吉野の人工林もよい。副次条件も重く見る必要がある。これより見れば有力である。

岡部委員：

第一回懇談会

- ・大台熊野は世界に珍しい景色である。

第三回懇談会

- ・大台大峯は山だけでは資格がないが河と海を連絡す（る）所に妙味がある。建国の歴史が大切である。民有地は制限をゆるくすればよい。
- ・山と海との連絡の点で大台は大山とは比較にならぬ。
- ・吉野熊野は候補地中第一位である

赤木委員、大島委員（衛生局長）：

第三回懇談会

- ・内務省としては選定標準は動かぬものと考えている。適用する場合には運用が必要であろう。熊野はこの条件に適しているものと思う。

・委員会で国立公園は必ず必要条件を満足させねばならぬと決めたのであるからそのつもりで全会一致で確信を以て御答申願ひたい。

・大台ヶ原及大峯山は水成岩系統として代表せしめ得るとすればよい。之に海岸河川の傑出せるものを加えては如何。つまり水成岩山地系統以外のものが出るのに之の系統のものが出なければ惜しいと考えられるし、代表し得るとすれば尚結構である。

・建国の歴史に富み、尚近畿地方にあることを考に入れて審議ありたし。

・吉野熊野については、私共の考えとしては海がよくて山の方は従とすれば海は調査せぬところが多い。国立公園としては海岸はどうかというので入れていない。

・吉野熊野は海岸も入れるなら区域の問題になる。私有地は法律を改めてでもやりたい。

脇水委員

第一回懇談会

大台ヶ原及大峯山は熊野海岸を入れればよくなる。

第二回懇談会

・日本の海岸風景としては熊野海岸が最もよい。水成岩山地系統の箇所が必要ならば大台ヶ原大峯山、熊野地方を選びたい。南アルプスは山大なるも面白い所なし。秩父は散漫で纏まっていない。潮の岬は区域に入れたい。

第三回懇談会

・水成岩系統としては大台ヶ原大峯山以外に新高山、南アルプスがあるが、風景としては大台ヶ原大峯山の方がよい。水成岩の風景地を傑出して代表している。

・吉野群山、熊野地方を国立公園にしなければ、何故しないかと批難されると思う。

平熊委員、長瀬委員、木島委員（山林局長）

第二回懇談会（早尾技師 山林局長代理）

・三矢氏と同感なり。吉野熊野地方を重要視するは価値なし。田村氏と同感なり。他の理由あれば考慮してもよろし。

第三回懇談会（木島委員）

・大台大峯は必要条件に合致していないということである。之を条件に合わせる様に色々説明を加えている様にとれる。之は入れぬ方がよい。

新井委員、佐原委員（観光局長）

第二回懇談会

- ・大台ヶ原に靈感受くる者多し。
- ・瀬は非常に良い。
- ・区域は如何に長狭になりても差支なし。
- ・自動車も入れられるし水電は条件付といわれるがあの区間を捨てても続けられる、岩石美だけでもよろし。
- ・飛地続きにしても差支えなし。

第三回懇談会

- ・河川、海岸は調査会の時に説明されてはいない。田村氏の腹案はあったかも知れぬが。
- ・外客誘致の方からいうと学術上の保存の外に国立公園と外客誘致とは離すべからざるものである…

三矢委員（帝室林野局長官）

第一回懇談会

- ・吉野群山及熊野地方に関しては田村氏と同感で選に入れるの要なしと思う。

第二回懇談会

- ・吉野群山及熊野地方は位置としてはよきも国立公園としては不可なり。

第三回懇談会

- ・吉野熊野は必要条件の点では弱いと思う。
- ・近畿地方に一つ欲しいとは思いますがよいものがなければやむをえない。
- ・選定基準は厳守したい。選定基準が悪いという意見なら委員会で作り直したい。調査会と委員会が別の会であるという型式論には反対である。せっかく作った標準を軽く扱うことには反対である。
- ・吉野の御料林はすべて皆伐である。
- ・大台大峯は大規模の山ではない。遠望すればどこでも雄大である。大台は雄大と思わない。

藤村委員長

第二回懇談会

- ・国立公園は天然のみを主とせず人工的施設をも加ふる必要あり。内務省の意見には全然反対である。
- ・水力電気とは協調する必要あり。飛地の問題は区域決定方法により解決せらるべし。
- ・私有地は寛大に取扱い、気永に収容、買収することもできる。
- ・靈感享受の点で霧島、吉野は傑出している。
- ・産業は靈感の妨げとならず。
- ・天然公園本質論は潔癖に過ぎる理想論で賛成が出来ぬ。
- ・河川海岸に公園が出来ぬ理由がない。
- ・歴史的に吉野熊野は貴重である。
- ・潮岬まで入れてよい。
- ・南紀海岸は海岸として一番よい。

第三回懇談会

- ・選定条件は尊重するが全然これに拘束される必要がない。

・日本の風景は山水で河川や海を省いて風景はない。河川、海岸が調査してなければ調査してほしい。大台には河川と海を付けたい。他が調査していないことは入れないという理由にならない。

・大台は霧島に次いで眺望がよく風景として立派に資格がある。これに川と海が加はるから益々よい、十六候補地中第一と思う。

正木委員

第一回懇談会

・産業上問題がある場合潔癖論を取る必要なし。

第二回懇談会

・選定条件は大体の基準と解してよい。日本の国立公園は歴史に重きを置かなければならぬ。吉野熊野は自然も優し歴史上に於ても大切である。大台を助けんがために弁護するのではなく、最初より立派なものだと思っている。

第三回懇談会

・吉野熊野は必要条件を満足している上に副次条件として他の追従を許さぬものを持っている。必要条件を満たさぬという懸念はない。

本多委員

第一回懇談会

・大台ヶ原大峯山は国立公園として他と異なったものにつくりたい。

第二回懇談会

・大台ヶ原大峯山を第一位とは解せないが、森林美を強く主張したい。日本の杉の美しい人工林は吉野地方である。又柑橘が方々にあって之も代表している。故に大台ヶ原は立派な理由が立てられる。

第三回懇談会

・吉野群山を中心とするものは第一とは認めないが、選に入る資格はあると思う。故に国立公園の数の問題となる。

(「国立公園審議会一般・昭和 6-10 年」、国立公文書館所蔵)

史料－6 第二次国立公園委員会総会の記「吉野及熊野国立公園候補地」

「本候補地は大峯山、大台ヶ原等の吉野群山、北山川及熊野川並に熊野海岸に亘る一帯を含むものである。吉野群山は候補地中唯一の水成岩系統に属する山地にして大杉谷、北山川及熊野川は之等水成岩地を穿つ峡谷を形成し、大杉谷と北山峡とはいずれも奇勝をもって顕れ本邦溪流中特異なる景觀を現出しているのである又紀州海岸は外洋に面して本邦の代表的海岸風景と称すべきものである、要するに本候補地は山岳、森林、溪谷、河川、海岸の各種優れたる風景を併せ備うる点において他に類例を見ざるところである。

本候補地は神武建国以来の貴重なる史跡伝説に富み、利用方法としては史跡、社寺巡礼、自然研究、観光、舟遊において特色がある。」（国立公園協會 1932, 37 旧字体を適宜修正。）

史料－7 第7回国立公園委員会総会の記

「吉野熊野国立公園の区域は奈良、三重、和歌山の三県に跨って居りまして、奈良県では吉野郡の七ヶ町村、三重県では多気県、南牟婁郡の十三ヶ町村、和歌山県では新宮市及東牟婁郡、西牟婁郡の二十二ヶ町村に亘る面積約五万五千三百町歩の区域でありまして、その中には御料地、国有地、公有地も相当含まれておりますが、全区域の約6割は私有地に属して居ります。

本公園の区域は山岳、河川、海岸に亘り多種多様の風景を総合して居りますが、先づ山岳部に於きましては山上ヶ岳、大普賢岳、仏経ヶ岳、釈迦ヶ岳等を連ねる大峰山脈と日ノ出岳、大蛇岨等を擁する大台ヶ原山とを主体とし、此の間に水源を発する特色ある溪谷と致しましては無数の瀑布を懸けて奇勝に富む大杉谷があり、又急湍、深淵の一大連鎖をなし取分け瀬八丁の勝景を以て知られるものに北山峡があり、その下流には秀明なる熊野川が続いております。更に紀州海岸におきましては、東は鬼ヶ城より西は潮岬に至る間、外洋に面する豪快明朗なる本邦の代表的海岸風景を包括しておるのであります。尚之等自然の風景地の外吉野山、熊野三社の神域その他我が国建国以来の貴重なる霊地、史蹟等は本国立公園の成立上欠くべからざるものでありますので之を取り入れた次第であります。

次に産業との関係に付きましては、区域内に吉野林業の名をもって知られる林業地が相当含まれておりますが、之は国立公園として必要な最小限に止めたものでありまして、その施業経営に著しい支障をきたさない範囲において両者の調和を図りたい考であります、又北山峡には水力電気の問題がありますが、北山峡は本公園の中核をなし本邦の峡谷を代表するに足る貴重なる風景地でありますので、本問題に付ては慎重に研究の上適当に措置する考であります」(国立公園協會 1936, 27 旧字体を適宜修正。)

史料－８ 昭和 10 年 12 月 十和田・富士・吉野熊野・大山 各国立公園区域決定に関する
第 2 回特別委員会 議事大要

田村：「吉野熊野の区域の変更のあった部分がありますから、図面に付き申し上げます。」

（南方、海岸部の一部除外について議論。筆者補）

三好委員：「吉野は私有林が多いので有名であるが之は人工林であります風致上大切な地位を占めております。所有者が之を除いてくれという陳情がありましたがこの原案に付きこの点の考慮は十分拂っていると思われませんがこの私有林の方は所有者の方で差し支えないものだけですか。總て苦情のある所を除いたのでしょうか。場所によっては問題の所でも之を押切るつもりですか又将来交渉の結果編入することはないですか。」

田村：「林業家より陳情請願が出ております最初の区域について当局は色々考え原案は結果に於いて縮小されました。之は農林当局とも度々交渉を重ねた結果最も妥当なものと考えたものです。地元の所有者では猶満足しない向もありますが根本の区域決定方針に付ても齟齬を来すことがあってはならず陳情の内容を見ると多く杞憂に属するものと考えられこれ等は今後の取扱如何によるものでこの点林業者の立場を尊重する考えで今後このことに付いては問題は起らないと考えます委員の中には人工林の美が代表しておるから之を多少入れたいと申されましたが今日では之以上拡張編入の見込みがありません。

三好委員：「将来決定的であって吉野の林業地に関しては加える見込みはありませんか。」

田村委員：「大体見込みがありませんが絶対とは言えません。」

村上委員代理：「吉野熊野については田村委員から説明もありましたが原案に付いては農林省も相談に乗り大体異議ない旨御答えしました。然し日本有数の林業地ですから相当影響を被るので大体営業者が納得することが前提として区域を決めて頂き度いと考えています。国立公園の取扱の点について緩和せられ多よく御考慮を願いたいのです。」

本多委員：「私が最初吉野熊野の国立公園選定に賛成した趣旨は吉野地方の杉檜の人工林が世界的に優れており世界の人々が之を見に来ます。川から峯まで植えられた百年生、二百年

生の人口美林があるがこの様な人工林は他の国立公園にはありません。この人工林を入れることで選定に賛成いたしました。大台大峯の天然林位の天然林他の国立公園の何処にでもこの人工林がこの公園の中心となるべきであるのに実際入っておるのは天然林であって大事な所が抜けており他にいくらかある区域のみ入れておる。最初は之を当局も入れる考えだったが面倒だから之を除外した様ですが真に国立公園に必要なら面倒だとか厄介だとか言ってやめる様なことは困る。之を特別に公園規則を作って木材の利用を妨げない程度で区域に編入し区域内に出来るきたない工作物の出来るのを防ぎ林業を阻害しない様に人工林を取扱うことに規定が足りない様にも思っています。大瀧川上流一帯の人工林を入れる様にしたい希望条件の下に賛成しています。(中略、筆者) 調査を開始して杉檜人工林の中心になる様なものを区域に入れてほしく思います。

(中略、国立公園に含まれる林業地について、三矢・西村委員による補償及び担保価値低下への対応について議論。筆者補)

村上委員代理：「増担保の問題がありますので相当懸念をもって居る。現実の問題として、下る様な情勢にあるらしい農林当局より詳しい意見を出してあるがこの点内務省でもよく事情を考えるとこののでよい取扱を期待しているのでありますが地元ではまだしっくり納得してくれているとは思えない。然し取扱が緩和され、従来と変化ないと言うことに情勢が変わるのではないかと思います。我々としては民業が圧迫されては困るのです。林業の発達が阻止されては困ります。」

清水委員：「水電関係についてはこの区域に於て開発されたのが六ヶ地点許可済で(中略、筆者)」

(中略、北山川上流、瀬八丁の上流、熊野川十津川下流などの水電開発と国立公園の両立について、開発に影響を与えないよう規制の緩和や、開発方式、堰堤式にしたときの地元林業者の木材流送への影響について長い議論が行われる。筆者補)

細川委員長：「区域の委員会では大体これでよいと云う区域を決めその中のことは両立させ

る様に当局間でうまくやったださればよいのでないか別に区域について意見がありますか。」

(中略)

村上委員代理(三浦幹事):「区域については異存ないと思いますが指定になると国立公園法が働き公園計画がたてられるからそれについて一、二意見を申し上げたい。(農林省の意見として、林業、水産業への規制を最低限にすることが述べられる。筆者補)」

(「国立公園審議会一般・昭和 6-10 年」、国立公文書館所蔵)

史料－9 昭和10年12月 十和田・富士・吉野熊野・大山 各国立公園の区域決定に関する

第3回特別委員会 議事大要

本多委員：「吉野熊野についても当局の調査は厄介なところ、面倒なところは除こうという方針ですか、仕事上の便宜の上からのみではいけないように思います。真の利用の中心地が外にあれば調査をしておいた後で適当な区域があれば入れるという条件の下に賛成したい。この区域には人工の美林が入っていないと思いますが吉野の人工林が除外されてしまえば選定の価値がない様なものでありますから、拡張を条件として賛成します。」

脇水委員：「少しは入っているのではありませんか。」

田村委員：「代表的の人工林は全部除外されております。」

本多委員：「大瀧川上流から入（シホ）の波までが代表的の人工美林ですが之は全部除外せられております。」

細川委員長：「条件のもとに賛成ということは委員会に於ては結局反対ということになる熱心な希望という程度にして拍合願えないでしょうか。特別委員会で本多博士が反対だということになると大変困りますから。」

本多委員：「それでよろしい。」

細川委員長：「この区域については多少不満の点もあるでしょうが大体このくらいで我慢していただきたいと思います。潮の岬付近は原案が変更されましたが」

（略、海岸地域の区域設定および水力発電事業への配慮について議論。筆者補）

（「国立公園審議会一般・昭和6-10年」、国立公文書館所蔵）

史料－１０ 吉野山周辺の世界遺産構成資産の保存管理方針

大峯奥駈道

○大峯奥駈道については、道で行われる宗教行為等との調整を十分に図りつつ、遺存する道の本質的価値を構成する諸要素の適切な保存管理を行う。

○現在の道の幅がもともとの大峯奥駈道の幅員を踏襲しているものと推定されることから、現状において遺存する狭隘な道幅の厳密な保存管理に努めることとする。

○大峯奥駈道を使用して宗教活動を行っている修験者等をはじめ、関係社寺・地域住民とも十分な調整を図りつつ、原則として現状の維持を基本とする保存管理を行うこととする。

○大峯奥駈道は大峰山脈の稜線を通過している関係上、岩場や急坂など通行が困難な地点には鎖や階段などの施設が設置されており、これらの施設の維持管理や補修に努める。

○大峯奥駈道とその沿道には民有地が多く存在し、林業経営地である山林の占める割合も多いことから、土地所有者や林業経営者等との十分な調整を行う。

(奈良県 2005, 25)

社寺関連遺跡

○吉野山の社寺等の遺跡については、原則として現状での厳密な保存管理を図り、建築物や工作物の設置・改修、土地の形質変更、木竹の植栽・伐採などに当たっては、必要に応じて事前に発掘調査等の学術調査を行い、地上及び地下の遺跡の保存に努める。

○国宝又は重要文化財に指定されている建築物及び工作物をはじめ、史跡等の本質的価値を構成するその他の歴史的な建築物及び工作物については、原則として現状維持的な保存管理に努める。

また、それらの解体の過程で当初の意匠・構造が判明した場合には、復元することも視野に入れて最も適切な修理の方法について検討を行う。

○境内地の樹木は、社寺の歴史的な建築物及び工作物と一体となった独自の景観を形成している重要な要素であり、厳密な保存管理が必要である。しかし、歴史的建造物や石垣などの構造物に対して悪影響を与えている場合には、適切な対応を行う必要がある。

○大峰山寺境内・金峯山寺境内・吉水神社境内・吉野水分神社境内・金峯神社境内・玉置神社境内などでは、現在においても宗教活動が継続的に行われているため、関係社寺とも十分に調整を図りつつ、地上に遺され又は地下に埋蔵されている遺跡の適切な保存管理を行う。

(奈良県 2005, 26)

自然的名勝地

○吉野山については、史跡及び名勝として歴史上・学術上の価値及び芸術上・観賞上の価値を維持するために、地域住民等の理解・協力を求めていく必要がある。また、吉野山のサクラについては、財団法人吉野山保勝会や関係諸機関との連携を図りつつ、保存管理に努めることとする。

○特徴的な地形・地質の適切な保存を行うとともに、建築物又は工作物の新築・増築・改築に当たっては、規模・材質・色彩等に十分配慮するものとする。

(奈良県 2005, 26)

史料－１１ 吉野公園設立沿革

一、吉野山公園ノ沿革

吉野山ハ幽邃閑雅天然自然ノ風致ニ富ミ且つ櫻花ハ海内ニ冠タルノ名區ニシテ加フルニ役小角開基以來ノ寺院アリ殊ニ延元ノ朝吉野皇居ノ帝都タルコト五十餘年其ノ間忠臣義人ノ遺烈ヲ存スル墳墓ノ所々ニ散在スルアリ剩ヘ明治ノ聖世ニ及ビテ官幣大社ノ創設ヲ仰グアリ又古ヘノ神社佛閣花間ニ隱見スルモノ少ナシトセザル所況ンヤ吟客騷士ノ杖ヲ曳キ遊ブモノ多クシテ或ハ人心ヲ鼓舞スルノ吟詩詠歌モ尠少ナラズ其ノ美名ノ天下ニ著ル、ヤ久シ矣然レドモ維新ノ際官家ノ禁弛ムニ乗ジ樵牧ノ徒事ヲ顧リミズ濫リニ山林ヲ伐採シテ遂ニ自然ノ風色ヲ失ヒ且栽培其方ヲ盡サズ纔カニ芳雲社有志ノ設ケアリテ之レガ恢復ノ道ヲ計リシモ名實相違背シテ殆ンド名所舊跡ノ湮滅ヲ来サントスルノ傾キアリ此ニ於テカ明治二十六年四月其ノ吉野山中ニ介在セル官有山林原野ヲ請ヒ之レヲ其ノ公園トシテ以テ名勝ノ區ヲ保全擁護センコトヲ内務農商務ノ二大臣ニ請ヒ得テ此ニ始メテ公園ノ經營ヲ開クヲ得タリ其ノ地筆數十八區ニ及ベリ

(奈良県吉野郡市役所 1919, 659)

史料－１２ 吉野山保勝会設立要旨

吉野山保勝會設立ノ要旨

吉野山ハ吉野朝五十餘年間ノ 都皇國ノ盛衰勤王ノ精華ヲ語ルモノ必ズ逸ス可カラザル名區ナリ

役行者修驗道場ノ大本山トシテ南都北嶺ト相對峙シ修驗者及ビ朝野貴賤ノ崇敬措カザル靈跡ニシテ一目千株唯見白皚々山上山下櫻花萬朶ノ美觀ハ古來櫻ノ勝地トシテ日本第一ノ盛名ヲ誇ル處

明治維新ト共ニ寺祿絶ヘ天下無比ノ名勝靈域モ昔時ノ盛況ヲ維持スルニ由ナシ而モ吊古ノ士探詩ノ學生將タ觀櫻ノ客交通ノ開クルニ随ヒ之ニ來往スル者日ニ繁ク月ニ盛ニシテ亦一日モ荒廢ニ委ス可カラザル所ナリ是ニ於テ乎我等同志ノ者奮然起テ吉野山保勝會ヲ設立シ寄附金ヲ集メ舊跡ノ回復勝地ノ發揮ヲ企ツニ至レリ其事業ノ概目及規則ハ左記ノ如ク既ニ其筋ノ認可ヲ得タリ望ムラクハ大方諸士ノ深厚ナル同情ヲ得テ斯ノ皇國無比ノ名勝靈域ヲシテ長ヘニ千歲無朽ナラシメンコトヲ

吉野山保勝會々則

第一條 本會ハ當吉野山著名ノ神社仏閣ヲ保護シ荒廢セル吉野朝趾ヲ始メ名所古蹟ヲ修理經營シ之ヲ永遠ニ保存スルト共ニ櫻樹ノ増殖ヲ計リ全山ノ風致ヲ完美セシムルヲ以テ目的トス

(以降筆者により略)

(奈良県吉野郡市役所 1919, 672-673)

史料－１３ 史蹟名勝天然紀念物保存協会による吉野公園の報告

吉野山保勝會の一日

保勝會の案内に由り、會長、國府宮澤兩幹事は四月九日に上途せられ、十日に吉野山東南院にて會長の講演あり、聴衆五百餘名極めて盛會なりき、當日は三好博士（吉野山の櫻花と其保存）、關野博士（吉野山の古社寺に就きて）、白井博士（吉野郡の名山保護に就きて）の講演あり、木田川知事代理、田寺理事官の挨拶等ありて閉會せり、本會は保勝會長谷原岸松氏衆議院議員岩本、貴族院議員木本兩氏の首唱により、徳川侯爵、奈良県知事木田川奎彦、大極殿保存會幹事塚本慶尙、本會幹事戸川安宅二の賛助に由れる計畫なりしが、非常の大成功を得たりとの谷原會長よりの通信あり、來會の名簿に由れば本県師範學校長、農林學校長、郡長、吉野鐵道會社社長 大和水力電氣會社支配人、警察署長、其他町村長、東京、大阪、奈良などの新聞記者等にして聴衆は教員、議員、青年會員 生徒等なりき、各地の新聞に由れば講演の影響感化の著じるしきを見たり、他日講演の結果は山中の櫻花、史蹟の保存に關して刮目する所ありと信ず。

（史蹟名勝天然紀念物 1 卷 11 号 1916, 88）

史料－１４ 吉野山の史跡および名勝指定についての

「史跡名勝天然記念物指定台帳」（文化庁文化財部記念物課保管）説明文

「吉野はその名夙に国史に著れ斉明天皇以来天武持統文武天正聖武等御歴代御幸の事あり中古は金峰の信仰によりて山上隆盛を極めしか後元弘建武の際より吉野朝との関係特に深く史蹟として普く世に知らるるに至れり。

「吉野は亦桜の名所としてその来歴の古きとその樹数の多きとは實に全国に冠たり桜樹は悉く白山桜の純系統に属しその数は十万本に達すと称せられその中自ら多数の品種あり全山中桜樹最も多きは一目千本にして花期には山容悉く桜花を以て充満せらるるの觀を呈すその他中千本上千本奥千本等ありて花期その妍を競い地勢の高低によりその景觀自ら異り實に他にその比類を見さるところなり。」（平澤 2010, 240 旧字体を適宜修正。）

史料－１５ 1935 年第 7 回国立公園委員会での内務省による「吉野熊野国立公園区域」案

指定理由説明

「一、吉野熊野国立公園区域の概要

吉野熊野国立公園の区域は、奈良、三重、和歌山の三県に跨って居りまして、奈良県では吉野郡の七ヶ町村、三重県では多気県、南牟婁郡の十三ヶ町村、和歌山県では新宮市及東牟婁郡、西牟婁郡の二十二ヶ町村に亘る面積約五万五千三百町歩の区域でありまして、その中には御料地、国有地、公有地も相当含まれて居りますが、全区域の約六割は私有地に属して居ります。

本公園の区域は山岳、河川、海岸に亘り多種多様の風景地を総合して居りますが、先づ山岳部に於きましては山上ヶ岳、大普賢岳、仏教ヶ岳、釈迦ヶ岳等を連ねる大峰山脈と日の出岳、大蛇岨等を擁する大台ヶ原とを主體とし、此の間に水源を発する特色ある溪谷と致しましては無数の瀑布を懸けて奇勝に富む大杉谷があり、又急淵、深淵の一大連鎖をなし取分け瀨八丁の勝景を以て知られるものに北山峡があり、其の下流には秀名なる熊野川が続いて居ります。更に紀州海岸に於きましては、東は鬼ヶ城より西は潮ノ岬に至る間、外洋に面する豪快明朗なる本邦の代表的海岸風景を包括して居るのであります。なおこれら自然の風景地のほか吉野山、熊野三社の神域その他我が国建国以来の貴重なる霊地、史蹟等は本国立公園の成立上欠くべからざるものでありますので之を取り入れた次第であります。

次に産業との関係に付きましては、区域内に吉野林業の名を以て知られる林業地が相当含まれておりますが、之は国立公園として必要な最小限度に止めたものでありまして、その施業経営に著しい支障を来さない範囲において両者の調和を図りたい考であります。又北山峡には水力電気の問題がありますが、北山峡は本公園の中核をなし本邦の峡谷を代表するに足る貴重な風景地でありますので、本問題については慎重に研究の上適当に措置する考であります。」（雑誌『国立公園』 昭和 11（1936）年 1 月 第 8 卷 1 号 「第 7 回国立公園委員会総会の記」 太字、下線は筆者補）

史料－１６ １９４０年「吉野熊野国立公園保存地区計画案」
（国立公文書館所蔵同文書より作成）

三、保存地区

名称	位置	地区	保存ノ対象	保存ノ方
佛經嶽保存地区	奈良縣吉野郡上北山村及天川村地区内	佛經嶽山頂	原始林	公益上止ムを得ヌ場合ノ外現状ノ変更ヲ禁ズ
明星ヶ嶽保存地区	同縣同郡天川村及大塔村地内	明星ヶ嶽山頂	おほやまれんげ	学術研究ノ外（一判読不可一）ヲ禁ズ
吉野保存地区	同縣同郡吉野町地内	吉野町一帯	史蹟及著名建造物	公益上止ムヲ得ヌ場合ノ外現状ノ変更ヲ禁ズ

史料－１７ 2001 年 吉野熊野国立公園吉野地域管理計画書

「１．管理計画作成方針

本管理計画の対象となる吉野地域は、紀伊半島のほぼ中央を南北に走る大峯山脈と、その北端を占める吉野山、大峯山脈の東側に位置する大台ヶ原及び大杉谷からなり、近畿の最高峰である大峯山脈・仏教ヶ岳（標高 1915m）を含む広大な山岳地帯である。またこの地域は、わが国でも有数の多雨地帯であり、急峻な斜面と深い V 字谷がよく発達した壮年期の山岳地形を示している。

植生は非常に豊かで、ブナ林等の落葉広葉樹林を主体に、暖帯性常緑広葉樹林から亜寒帯針葉樹林に至る**多様な森林**が成立している。**動物相**も、これらの豊かな森林を背景に、カモシカ、ツキノワグマ、ニホンジカ、ニホンザル等の大・中型哺乳類をはじめ数多くの動物が生息しており、**わが国屈指の野生動物の生息地**となっている。

また、大峯山脈は、一千年以上の長きにわたって修験道の根本道場とされてきたことから、それにかかわる多くの遺跡、史跡が残っており、現在でも山上ヶ岳を中心に、信仰登山が盛んに行われている。特に、吉野山は、この信仰の拠点として開かれたところで、多くの古社寺等残り、門前町の雰囲気をも今も留めている。

地域の産業としては林業が中心で、古くから『吉野杉』の産地として知られるが、近年は林道網の整備に伴い奥地自然林の伐採・人工林化が急速に進んだことから、自然景観・環境保全等にも問題を生じている。

一方、公園利用面では、吉野山で社寺参詣、史跡探訪等をみるほかは、登山・ハイキング利用が主であるが、近年、吉野山、洞川、池原等では、林間学校、自然探勝等の利用が増加している。」

（2001 年 吉野熊野国立公園 吉野地域管理計画書 1p）

史料－１８ 吉野における国立公園の風景評価に関する資料の記述

- ・各資料の書誌情報は、５－１－４． 表６（６０頁）を参照。
- ・記述中の番号は掲載頁数を示す。
- ・＊は備考を示す。

資料 ID：１

44 吉野山の櫻 「櫻の季節ともなれば、全山櫻花に包まれ、その美しさは他所にみられない景色である。一目千本、奥の千本などの名所はとくに人に知られ、吉野の歴史とともに櫻の地として有名である。」

＊ ページ全面に桜期の吉野山の写真を掲載。

資料 ID：２

85 吉野林業といってスギの造林がさかんなのもこのため 88 吉野といえば桜 88-89 役小角が蔵王権現を桜の木に刻んだ伝承、吉野で修験道がさかんになるとともに神木とされ、献木の風習が続けられて桜が沢山になった 89 下千本以外の桜は全て明治以降の植樹によるという事実

資料 ID：３

77 これらの山々（吉野山など）は、古くから修験道の中心道場となっていることで知られており… 77 大台ヶ原山の東麓にあたる大杉谷には、伊勢神宮の用材供給林である美しいスギ林がある。

資料 ID : 4

4-5 暖帯性常緑広葉樹林から亜高山帯性針葉樹林まで、各種の森林をみることができる。しかし、古くから吉野杉の産地として知られる林業地帯であるこの地域では、スギ・ヒノキ等の植林が盛んで、特に近年は林道網の整備等により、かなり奥地まで人工林化が進んでいる。8 本公園は、中世から近世にかけて栄えた大峯修験と熊野信仰という宗教上の聖地を区域内に含み、これに関わる史跡や遺跡が多く見られる。この拠点であった吉野山、洞川、山上ヶ岳、前鬼及び、熊野三山と呼ばれる那智山、本宮、新宮には、古社寺が残り伝統を伝えている。9 “花の吉野”として名高い吉野山のサクラ林も、当初はこの宗教に由来して植林、成立したものである。9 吉野山には南朝に関する史跡も多い。9 その中でも吉野山、熊野、那智等のすぐれた人文資源の探訪や… 11 山岳部分、河川部分の居住者は、山林業、農業、商業、海岸部分は、漁業、農業、商業を主とする。

資料 ID : 5

106 (第2種特別地域に挙げられた「吉野山(奈良県 吉野郡吉野町 大字左曽、大字丹治、大字橋屋及び大字吉野山の各一部)について」) 吉野山一帯でヤマザクラを主とするサクラ林や数多くの史跡を有し、国の史跡・名勝に指定されている。社寺、集落地等の文化景観と周囲の自然が一体となり優れた景観を呈している。129 (第3種特別地域に挙げられた「奈良県 吉野郡吉野町 大字左曽、大字丹治及び大字吉野山の各一部」について) スギ・ヒノキの人工林で吉野山の利用環境の保全上重要な地域である。

資料 ID : 6

1 吉野山はこの信仰(大峰山脈の山上ヶ岳を中心に信仰登山を行ってきた修験道)の拠点として開かれたところで、多くの古社寺が残り、門前町の雰囲気は今も留めている。1 地域の産業としては林業が中心で、古くから「吉野杉」の産地として知られるが、近年は林道網の

整備に伴い、奥地自然林の伐採・人工林化が急速に進んだことから、自然環境・環境保全等にも問題を生じている。2〔吉野山管理計画区紹介〕大峯修験の門前町として長い歴史、古社寺や南朝にまつわる史跡等が数多く残る、桜の名所・自然景観と人文景観が一体となって特徴的雰囲気 4〔吉野山管理計画区 概要及び管理方針〕修験道をはじめ、源義経や後醍醐天皇などにまつわる数多くの史跡が残っているほか、日本一のヤマザクラの名所として知られている。4 管理の基本方針：門前町の雰囲気を損なわないようにするとともに、サクラの保護育成に努めるものとする。7 観桜期に利用者が集中しているが、自然と歴史、史跡の探勝を目的とする観桜期以外の利用も促進することが望ましい 8 本地区を代表する桜が近年衰退の傾向を示しているため、その原因及び抜本的対策について調査、検討が必要（以下、当面の対策）

資料 ID：7

1 吉野山はこの信仰（大峰山脈の山上ヶ岳を中心に信仰登山を行ってきた修験道）の拠点として開かれたところで、多くの古社寺が残り、門前町の雰囲気を今も留めている。1 地域の産業としては林業が中心で、古くから「吉野杉」の産地として知られるが、近年は林道網の整備に伴い、奥地自然林の伐採・人工林化が急速に進んだことから、自然環境・環境保全等にも問題を生じている。2〔吉野山管理計画区 管理の基本方針〕修験道をはじめ、源義経や後醍醐天皇などにまつわる数多くの史跡が残っているほか、日本一のヤマザクラの名所として知られている。2 山域各所には社寺も多く、その外縁にはサクラをはじめスギ、ヒノキ等の植林地が見られる。2 管理方針：門前町の雰囲気を損なわないようにするとともに、ヤマザクラの保護育成に努める。2 保全対象：上千本、中千本、下千本、奥千本のヤマザクラ―当地区の主要な景観構成要素であるヤマザクラを保全する。6 本地区を代表するヤマザクラが、近年衰退の傾向を示しているため、これまで行われた保全のための調査結果を踏まえ、関係機関等の協力のもと以下の対策を推進（対策内容）

資料 ID : 8

桜と史跡の吉野山

資料 ID : 9

188 大峯山脈の北側に飛地として編入されている吉野山の桜は、森林とは異なる美しさで古くから有名 188「吉野川一帯には～この辺りの大部分は吉野林業の中心である吉野杉の人工造林地が多く、人口森林美の極致を示している。190 役小角が蔵王権現を桜の材に彫刻した伝説に基づき、桜が霊木視され愛護増殖された結果、桜の名所に。191 吉野の蔵王堂が、役小角とその刻んだ蔵王権現像に連なる修験道の霊地で、大峯山が修験道で我が国第一の霊峰とされ、修験道が興隆してきたこと 191 桜が神木として地元民、参詣者に保護、人工的に植栽され、主として修験道の寄進によって下の一目千本が形成。ただし、他の一目千本は明治以降に植樹。 191 吉野朝の哀史と共に吉野の歴史は桜にも美しさを加えている

*188 吉野林業の伐木に伴う北山川、吉野川の筏流しの絵画的な風致を人文景観として評価。

資料 ID : 10

*写真のみ 吉野：吉野山 春 一目千本

資料 ID : 11

3「歌書よりも、軍書に悲し吉野山」の南朝哀史等の史跡地が、至る処に豊富でありますから 25「興味地点」の章で山岳、河川・溪谷、海岸、温泉などの中で、神社仏閣の節で吉野山が登場。吉野山五万本の桜が織り成す景観の魅力、蔵王権現の神木としての保護、豊臣秀吉の花見など歴史的に我が国屈指の桜の名所となってきたこと。25 又奥吉野に入れば、吉野杉の人工林が見事であります。28 山岳信仰の修験道が吉野山の金峰山寺、その奥院の大

峰山の山上ヶ嶽を中心としてきたこと、吉野山・大峰山・熊野三山を結ぶ山伏の修験道の歴史。28 大きな勢力を誇った大峰山の山伏が源平時代や南朝に関係したこと、特に「吉野朝には忠誠を励み、後醍醐天皇を始め、楠正成・正行等の尊い哀史で彩られて」いる。源義経や中世修験者、とりわけ南朝関係人物にまつわる有名な社寺、史跡および名所が多いとして具体例を列举。

*中表紙：吉野山の桜、2 吉野山 中千本 桜 写真 25 吉野山 一目千本の桜 写真、25 吉野山の秋の紅葉を評価。28 吉野山の桜 写真 30 金峯山寺と桜の写真

資料 ID : 1 2

109(紀伊山地全体について)スギ・ヒノキ等の美林を産し〜「紀の国」が「木の国」から出ている〜わが国の国立公園中でも、比肩するものがない特色とあってよい。109 吉野が南朝政治の中心だった 109 有名な桜が役小角と蔵王権現に由来し、修験道の発展とともに参詣者に献じられ名所となった 109 大峰山は吉野山と密接に関係し、険悪な山上を修験道の鍛錬の道場とした。

資料 ID : 1 3

93 桜と多くの歴史との関連性で有名な吉野山 94 桜は日本の国花として世界に知られ、吉野山はその桜の美と伝統が最も豊かに表れている場所/山岳信仰の信徒たちにより 1000 年に渡り植樹が続けられてきた/桜の下で多くの日本史の栄華と悲劇が繰り返されてきた

資料 ID : 1 4

219 北端の吉野山は、修験道にちなむ古くからの花の名所、南北朝の歴史に悲しい名勝地。

資料 ID : 1 5

290 吉野山などの山岳地域/この地方（国立公園全体）は特に雨量が多いため全般的に森林はよく発達しており/この地方はわが国有数の林業地帯でもあり、標高 1,000m 前後までスギ、ヒノキの人工林が見られる。/吉野山は桜の名所として知られている。/吉野山、熊野三山にまつわる史跡も多い。

*写真 289 夏の吉野山（緑、霧） 291-293 春の吉野山（桜） 299 冬の吉野山（雪）

資料 ID : 1 6

86(公園について全般的に)標高 800 メートル以下は～山地にはスギ・ヒノキの植林が広く行われ、いわゆる吉野林業が進められている。87（吉野山の）桜樹を囲むようにスギ・ヒノキの植栽林、竹林が広がり、一部に植栽起源によるコウヤマキがみられる。88 地域のほとんどは有数の林業地であり、この 30 年ほどの間に皆伐に近い伐採をうけ、スギ・ヒノキの植林におきかえられてきている。/86 吉野山のシロヤマザクラは、山岳修験信仰に由来し、植栽されたもの 87 吉野山は千本桜の名所として知られ 87 吉野山は、古くからサクラの名所として知られ、歴史的にも有名である。主体はヤマザクラで… 86 南朝遺跡や山岳修験にかかわる寺院・神社などの人文景観に富むことも、この公園の特色のひとつ。源義経や後醍醐天皇の遺跡を残す吉野山、

資料 ID : 1 7

45 吉野連山は、水成岩で構成され、その溪谷は深く険しい。それをおおう森林はうっそうとして太古の面影を示す。また、吉野山は、古代からの連綿たる歴史、修験道の遺構等文化財の宝庫でもある。

資料 ID : 1 8

118 吉野山は、古くから桜の名所として知られ、毎年 4～5 月にかけてたくさんの桜が咲きほこり、多くの花見客で賑わう。中央部には蔵王権現を祭る金峰山寺があり、周辺には吉野葛や漢方薬を売る店が軒を並べている。

資料 ID : 1 9

20 桜と歴史の吉野山/20 それだけではなく、国立公園の中で、私有地が 66%を占めるのも大きい特徴で、吉野林業、尾鷲林業と呼ばれる林業の盛んな人とのかかわりが大きい地域にあって、自然がよく残されている。逆にいうと、7.2%の特別保護地区と 26.4%の特別地域は、スギ、ヒノキの植栽林に囲まれているといっても過言ではない。

資料 ID : 2 0

12 吉野の桜の有名さ、三万本が山一面を咲き上る景観の圧巻、吉野山が我が国固有の山岳信仰「修験道」の聖地であること、開祖・役行者の伝承にちなみ桜が聖木とされ長きに渡る信徒による献木が桜の山を生んだ=吉野の桜は信仰の証、吉野の桜が歴史古くから多くの文人墨客に愛されてきた、後醍醐天皇の南朝の哀史や義経・静の悲話など多くの歴史に彩られた地

謝辞

本研究を行うにあたり、多くの方々のお力添えをいただきました。指導教員である伊藤弘先生（筑波大学人間総合科学研究科）には博士前期課程を含めて 5 年間に亘り温かいご指導をいただきました。先生の励ましがなければ最後まで研究をやり遂げることはできませんでした。心より御礼申し上げます。副査をお引き受けいただいた水谷知生先生（奈良県立大学地域創造学部）、吉田正人先生（筑波大学人間総合科学研究科）、武正憲先生（筑波大学人間総合科学研究科）には、それぞれのご専門の視点から論文に丁寧なご指導をいただき、多くを学ぶことができ、大変感謝いたしております。所属するゼミのメンバーをはじめ、筑波大学人間総合科学研究科世界遺産専攻・世界文化遺産学専攻の学生からは、現地調査に同行していただいたほか、ゼミでの議論を通して、数々の鋭いご指摘をいただき、論文を執筆していく上で心強い支えとなりました。伊藤文彦氏、中井陽子氏、船木大資氏、その他全員のお名前を挙げることはできませんが、この場を借りて御礼を申し上げます。